

長野県松本市あがた遺跡発掘調査報告書

# あ が た 遺 跡

昭和56年3月

松本市教育委員会



(上) 緑釉段皿 (1 : 1.7)  
(下) 錠 子 (1.4 : 1)

長野県松本市あがた遺跡発掘調査報告書

# あ が た 遺 跡

昭和56年3月

松本市教育委員会

## 序 文

あがた遺跡は県ヶ丘一帯に広がる広範囲な遺跡で、大正8年松本高等学校設立の際に縁釉段皿が出土したことや、松商学園校地より八陵鏡が出土したことなどにより、古代より栄えた地域であろうと言われているところであります。

昭和52年、この旧松高敷地の西半分を国より譲渡をうけ、公園として広く市民に開放することとなりました。市としては造成工事に先立ち、文化財保護の立場から事前に発掘調査を行うこととし、独自予算を立て、関係の方々のご指導をいただいて、市文化財審議委員の原嘉藤氏を団長とする調査団を編成し、調査にあたることとなりました。

調査は昭和55年3月10日より末日まで、国立奈良埋蔵文化財研究所、県教育委員会等のご指導もいただきながら、雪の降る中も休まず、調査員はじめ大学生、高校生、一般市民の方々と、多数の方々のご協力により一つがなく調査が進み、弥生時代、土師時代の遺構・遺物が数多く発見され、松本の古代史解明の貴重な手掛りを与えてくれました。

この報告書作成にあたっては調査員の連夜にわたる献身的なご努力と、奈良埋蔵文化財研究所、元興寺文化財研究所、京都市埋蔵文化財研究所、県中央道遺跡調査団の方々よりご教示をいただきました。記して深甚なる謝意を表します。

本発掘調査および報告書が多少なりとも市民の文化財愛護の啓発と、関係の方々のお役にたてば幸甚です。

昭和56年3月

松本市教育長 中島俊彦

## 例　　言

○本書は昭和55年3月10日～3月31日まで22日間にわたって行われた、松本市県3丁目1番1号所在のあがた遺跡発掘調査報告書である。

○本調査はあがた公園造成に先立つ発掘調査であり松本市の単独事業である。

○本調査は松本市教育委員会の委嘱した原嘉藤氏を団長とする調査団および地元出身大学生、高校生の他、一般住民の参加を得て行われたが、発掘・遺物整理それぞれの段階において次の各氏よりご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

信濃史学会会長　　一　志　茂　樹　氏  
奈良埋蔵文化財研究所長　坪　井　清　足　氏  
同　　研究所　　西　村　　康　氏  
京都埋蔵文化財研究所　田　辺　昭　三　氏  
県教育委員会指導主事　丸　山　敏　一　郎　氏  
同　　関　　孝　一　氏  
県中央道遺跡調査団　樋　口　昇　一　氏  
同　　笠　沢　　浩　氏  
県史編纂委員会　　桐　原　　健　氏  
奈良元興寺文化財研究所　西　山　要　一　氏

○本書の執筆に当っては各調査員が分担してこれに当った。文責は執筆者にある。

○本書の編集は事務局が行った。

○今回出土の遺物はあがたの森文化会館内の松高記念館に保管、展示してある。原図等については、松本市教育委員会で保管してある。

# 目 次

序	i
例 言	ii
目 次	iii
挿図目次	iv
図表目次	iv
図版目次	iv
<b>第1章 発掘の経過</b>	
<b>第1節 発掘調査に至るまで</b>	1
発掘調査協力者	3
<b>第2節 調査日誌</b>	4
<b>第2章 遺跡の位置と環境</b>	
<b>第1節 遺跡の位置</b>	6
<b>第2節 地形及び地質</b>	6
<b>第3節 湧水</b>	8
<b>第4節 周辺遺跡と既出遺物</b>	
1 周辺遺跡	11
2 周辺遺跡の既出遺物	14
3 真遺跡一県ヶ丘高等学校地点	18
<b>第3章 造構と遺物</b>	
<b>第1節 弥生時代の造構と遺物</b>	
1 第1号住居址	23
造構	23
遺物 (1)土 器	25
(2)石 器	36
(3)一括集積石器群出土状態	38
2 第2号住居址	45
造構	45
遺物	45
(1)土 器	47
<b>第2節 土師時代の造構と遺物</b>	
1 第1号住居址	50
造構	50
遺物 (1)土 器	51
第1号住居址床面出土遺物	52
第1号住居址覆土内出土遺物	56
<b>第3節 その他の造構と遺物</b>	
1 碑 敷 造 構	68
2 その他の造構と遺物	70
<b>第4節 植 物</b>	72
<b>第4章 考 察</b>	74

## 挿 図 目 次

第1図	あがた遺跡地層図	7
第2図	湧水地図	9
第3図	周辺遺跡図	13
第4図	周辺遺跡出土遺物実測図(1)	16
第5図	周辺遺跡出土遺物実測図(2)	17
第6図	県ヶ丘高等学校地点出土遺物実測図	19
第7図	あがた遺跡全体図	22
第8図	弥生第1号住居址実測図	23
第9図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(1)	32
第10図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(2)	33
第11図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(3)	34
第12図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(4)	35
第13図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(5)	39
第14図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(6)	40
第15図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(7)	41
第16図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(8)	42
第17図	弥生第1号住居址石器出土状況	42
第18図	弥生第1号住居址出土遺物実測図(9)	43
第19図	弥生第2号住居址実測図	46
第20図	弥生第2号住居址出土遺物拓本実測図(1)	48
第21図	弥生第2号住居址土師第2号住居址出土遺物拓本実測図(2)	50
第22図	土師第1号住居址実測図	51
第23図	土師第1号住居址出土遺物実測図(1)	53
第24図	土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(2)	55
第25図	土師第1号住居址出土遺物実測図(3)	57
第26図	土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(4)	59
第27図	土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(5)	61
第28図	土師第1号住居址出土遺物実測図(6)	63
第29図	土師第1号住居址出土遺物実測図(7)	66
第30図	縄文遺構実測図及出土遺物実測図	69
第31図	その他の遺構出土土器拓本実測図	71
新聞切抜		79
あがた古代ニース	1～4	80

## 図 版 目 次

口 絵	縄文段皿・釦子	
図版 1	発掘地点全景	84
図版 2	弥生第1号住居址・同遺物出土状況	85
図版 3	弥生第1号住居址出土土器(1)	86
図版 4	弥生第1号住居址出土土器(2)	87
図版 5	弥生第1号住居址内石器出土状況(1)(2)	88
図版 6	弥生第1号住居址内石器出土状況(3)(4)	89
図版 7	弥生第1号住居址出土土器	90
図版 8	弥生第2号住居址・イヌドクサの上にあった石	91
図版 9	弥生第2号住居址・縄文、その他の地域よりの出土遺物	92
図版10	土師第1号住居址及釦子出土状況	93
図版11	土師第1号住居址出土土器(1)	94
図版12	土師第1号住居址出土土器(2)	95
図版13	土師第1号住居址出土土器(3)	96
図版14	縄文 遺構	97
図版15	発芽したイヌドクサ・発掘時のイヌドクサ	98

## 図 表 目 次

表1	松本市地区別井戸分布	10
表2	弥生第1号住居址出土石器一覧	44

# 第1章 発掘の経過

## 第1節 発掘調査に至るまで

1.

あがた遺跡はあがた公園を中心にして蚕糸公園・県ヶ丘高等学校一帯を含む、広い遺跡で埋蔵文化財包蔵地として早くから知られている。特に大正8年、この地に松本高等学校が建設された際に縄文な皿が発見されたことは有名である。松本高等学校は学制沿革により信州大学となり、信大の拡充とともにキャンパスは旭町へ移り、昭和52年3月、跡地を松本市が買いうけ、あがた公園として広く市民に開放することとなり、昭和53年度より、公園造成工事が行われることとなった。

54年度は公園南側の植樹帯と園路造成工事であり、その工事に先立ち現場の表面調査をしたところ、当該地点は水路と教官の官舎のあったところであり、既に搅乱をうけているため、立合調査とした。その結果は下記のとおりである。

### 松本市あがた遺跡立合調査報告書

1. 立合調査地 松本市県3-1-2102-4
2. 遺跡名 県町遺跡(台帳番号52) 県遺跡は信州大学文理学部跡地を中心として、周辺の松商学園、県ヶ丘高等学校、蚕糸試験場など広範囲にわたっている。
3. 調査目的 松本市によるあがた公園造成工事の際、遺構・遺物の有無を確認する。
4. 調査者 神沢昌二郎(日本考古学協会員)
5. 調査日程 昭和54年11月26日～昭和55年3月31日
6. 調査結果 工事の進行にともない、立会い調査を行なったが掘削工事箇所はバーチャ、給配水管埋設部分のみで、他は園路等盛り上げ部分がある。掘削部分は平均地表下60cmで地層は第2回のごとく旧校舎、プール等のあった位置のため搅乱されている。この搅乱層より第3回の3片の土師須恵器片が検出されたが、これは、過去の敷地造成等のため混入したものと思われる。

#### (遺物説明)

- 1) 須恵質土器でタタキ目のある壺胴部破片である。口頸部近くで内面にも細いタタキ目がある。
- 2) 内黒の土師坏で外面は明かるい茶褐色を呈しており、胎土はよく焼成も良い。

3) 土師質土器で壺底部で糸切底である。

#### 7. 附図(略)

図1 位置図

図2 立合調査区域とあがた公園造成計画図

図3 遺物拓本図

2

昭和55年度公園造成工事は旧松高校舎東側において、園路のほか池の造成も計画されていたため、市文化財審議委員会の指導も得て急拠、54年度末に発掘調査をすることとなり市は、そのために310万円の補正予算を組んだ。

あがた遺跡は別項で述べているように松本市にあっては古代史解説上重要な遺跡であり、そのため市としてもできる限りの調査体制をとることとなった。

まず調査団編成にあたっては、次の各氏を委嘱し、調査にあたることとした。

団長 原嘉藤 松本市文化財審議会委員

調査主任 神沢 昌二郎 松本市教育委員会

調査員 大久保 知巳 国鉄職員

三村 塚 会社員

西沢 寿晃 信州大学

森義直 大町高校

山越 正義 旭町中学校

小林 康男 塩尻市平出考古館

浅輪 俊行 公務員

事務局 松本市教育委員会 社会教育課長 小川好治

文化係長 神沢 昌二郎

主事 大日向 栄一

同 清野 陽子

また調査補助員には地元出身大学生が当ることとし、発掘作業には、あがた考古会員を中心とした一般市民に広く希望を募って当ることとした。

3

あがたの森公民館では市民講座の一環として、考古学の初步的理解を得るために7回にわたって総論的な講座を開催した。本講座で学んだことを生かすために、希望者は引きつづき、あがた遺跡の発掘調査に参加するということを含んでの講座であったため、講座希望は100名にも達した。その

プログラムは次のように、はじめて土器をみる者もその平易な講義に発掘時への期待をふくらませた。

回 数	日 時	チ ー マ ー	講 師
第1回	55・1・26(火)	あがたの森の歴史—古代から現代まで—	原 嘉藤
第2回	55・2・2(火)	市民の手による歴史の発掘—野尻湖発掘—	郷原保真
第3回	55・2・9(火)	遺跡発掘のはじめから終りまで	小林 康男
第4回	55・2・16(火)	考古学はどういう学問か—考古学概論—	樋口昇一
第5回	55・2・23(火)	発掘の実際	神沢昌二郎
第6回	55・3・1(火)	土器や石器の知識	小林康男
第7回	55・3・8(火)	松本市の遺跡見学	神沢昌二郎

これら受講者は引き続き行われた発掘調査に、自分自身の出来る限りの部門で参加することとなり、発掘を行う者、土器を洗う者、注記する者、お茶を沸かす者等、各自分担して発掘に参加することとした。

#### 発掘調査協力者

横田作重、山本紀之、熊谷康治、平林彰(日大)、白居直之(中大)、丸山正一郎(独協大)、篠宮 正(奈良大)、古幡 弥、横山正美、大月正次、太田富子、藤原孝子、菅沼よし、磯刈高志、多田謹美、吉沢西巴、三溝循治、大出六郎、小沢真男、瀬川長広、村松国富、大塚 鮎、土屋古婦美、柴田尚子、小林せつ子、安藤利袈裟、加藤幸子、小野文子、名和伸二、松岡 彰、飯田澄子、高山三千彦、手塚拓二、上野正春、中沢銳一、中沢嘉乃、山田克人、堀内正博、河村英一、三村康子、忠地八枝子、百瀬泰隆、酒井喜十郎、犬飼正子、谷浩一郎、小林かづ子、吉川登、清水亨、(以上、成人学校考古学科受講生、一般)

三村泉、手塚州美礼、土橋久子、出井かおる、柳沢順(大学生)

小口妙子、百瀬嘉代子、清水和史、鹿川明彦、山下泰永、松山 浩、野村恭子、二木みどり、祢津真由美、塙原温彦、中沢 誠、小松かおる、市田まゆ美、斎藤浩子、太田美穂、前田初恵、三村竜一、飯沼富夫、藤森悦二、矢花利幸、安塚弘明、平出克彦、降幡勇一、斐保三子、越山しのぶ、倉田俊樹、清沢能成、上条正範、高橋由香、山藤宏子、彦瀬 恵、北原史子、平沢優美、藤原正宏、芦田恵理、村山安子、有賀清子、中沢ゆう子、柳沢正英、木挽俊彦、竹原 学、中村 栄(以上、県ヶ丘、豊科、松商、本郷、美須ヶ丘高校生)

(事務局)

## 第2節 調査日誌

- 55年3月5日（水）晴、三村、本間らにより2500m<sup>2</sup>内に東西に1～26、南北に1～26発掘地点決定後、グリット（2×2m）杭打ちを行う。
- 3月10日（月）晴、あがたの森文化会館において結団式を行う。小川社会教育課長あいさつのあと、原団長による遺跡の概要説明。事務局より調査予定等説明をし、引き続き作業に入る。

17-5、13-5、21-1、25-9等各グリットを掘り下げる。17-5地表下25～30cmあたりより高台付土師壺、蓋つき、灰釉片等出土。13-5では礫などと共に土師片等出土。5-1では地表下40cmより旧校舎のコンクリート基礎が出る。本日は計15グリットに手をつける。
- 全般的にみてマイナス40cm位より土師片の出土があるが、旧校舎の解体した燃え残りの木材や、レンガ等が埋められてあって部分的に地層は擾乱されているようである。
- 3月11日（火）晴、地層を確認のためバックホーで南側の9-1、東側の2の25を中心に2～2.6mの深さに掘る。どちらも河川敷らしく、砂礫層が深い。グリットでは13-5、9-5、12-7、9-25、13-25、21-25、21-21、21-17、25-17等を掘る。比較的南よりの方に遺物が多い。
- 3月12日（水）晴、前日の継続の他、新しく13-13、15-13、17-13、21-13、17-9、20-5・6、21-6、22-5・6、13-9等をあける。ほとんどがマイナス40～50cmで砂礫層に至る。21-13では人頭大の礫が列んだようになっており、そこより須恵器片が10片程出土。21-5では落込みを感じこの周辺で住居地の可能性も考えられる。

「あがた古代ニュース、No.1」を発行。
- 3月13日（木）晴、列石を感じる21-13周辺を掘り広げ、また落込みのある21-5周辺も広げる。13-29でも礫石の列が出る。その横からは石炭ガラが出て、旧校舎時代のゴミ捨てらしい。SBCラジオ・テレビ・信毎・市民タイムス各紙取材に来訪。
- 3月14日（金）午前10時頃より雪のため午後外仕事は中止し、土器洗いおよび注記作業を行う。

東北側、1-38・39を掘る他20-5のセクションとなる。東北側は南側よりかなり深く、ガラス瓶などを埋めた擾乱層があるものの部分的に汚れていない地層もある。地表下65cmより土師片出土。
- 3月15日（土）晴、落込みのある20-5を中心に掘る班と、東北側1-38・39を掘る班と大別され、他は中央のグリットを掘る。20-5周辺の落込みは土師の住居址と判明し、第1号住居址とする。
- 3月16日（日）薄曇、第1号住居址より全メッキの釦子出土。中央東側5-17の砂層より高环甌部出土。河川がかなり動いており、僅かの地点で礫層。砂層と変化がはげしい。
- 3月17日（月）薄曇、東北側グリットを拡張する。弥生後期の波状文破片等出土。他に19-12周

辺の列石部分を掘り広げる。

- 3月18日（火）薄曇、県教委員会指導主事の指導をうけるべく連絡をとる。他に第1号住居址掘りこみ。礫敷状遺構、弥生出土地点等を握る。6-39では高坏、小型壺等の破片があり、一方中央東側の5-21でも弥生の甕が出土する。
- 3月19日（水）晴、ニュース3号出る。第1号住は、昨日同様掘り下げを行なう。他に4-38、5-38、6-40、7-39等各グリットを掘り下げる。土器洗いも行なう。
- 3月20日（木）晴、第1号住の掘り下げを行ない、合わせて礫の地域を掘り下げる。5-18、5-20グリットでマイナス100cmで弥生式土器を出土する。
- 3月21日（金）薄曇、北東グリットの断面実測のための壁面精査、6-38グリットの調査、湧水関係の調査を行なう。なお、6-38グリットでは、黒褐色土を約10cm下げマイナス65cmで、半完成と思われる弥生式土器を出土した。（櫛描波状文を施したものか）この地の状況により、6-38グリットを拡張する。県の関指導主事來訪。
- 3月22日（土）雪、大雪のため作業中止。手塚館長の記事信毎に載る。
- 3月23日（日）薄曇（小雪）、第1号住の掘りこみを中心に行なう。床面上部より、小礫混じりで土師多く出土する。
- 3月24日（月）晴、第1号住の積雪を除去し、床面清掃、覆土および床面より、多量の土師、須恵、灰釉片を検出。北東域の、東西南北断面図をとる。
- 3月25日（火）晴、奈文研西村康先生來訪。6-39グリット内の遺物出土を作図。赤色塗彩の高坏片、櫛描波状文の土器片が散在して検出される。15-13グリットを、バックホーで、マイナス70cmまで掘り込む。
- 3月26日（水）曇、第1号住の実測、配石地城の拡張する。5-20、5-38各セクションの土手をはずす、その遺物は、黒褐色土層より、土器、炭化材が多量に出土。6-38、6-41グリットでは、落ちこみを確認できなかった。
- 3月27日（木）晴、第1号住の実測、配石址の清掃を行なう。5-19グリットの土手をはずす。5-38、6-38・39グリットを掘り下げ、黒褐色土層中より、多量の弥生土器を出土する。
- 3月28日（金）晴、5-37、6-37グリットを昨日に続き、拡張、掘り下げを行なう。5-39グリットの黒褐色土を精査したところ、孔のある磨製の弥生石鑿を二つ出土した。5-19グリットを測量した後、配石址実測、第1号住の床面からマイナス10cmで、土師・須恵出土。ニュース4号出る。
- 3月29日（土）曇のち雨、第1号住の床面掘り込み、配石址の実測を行なう。5-38グリットの実測を行なった後、土器の取り上げを行なう。6-38グリットでは、昨日の続きの掘り下げを行ない、貼床の周辺に炭化材焼土が一面に現われていることを確認した。
- 3月30日（日）曇のち晴、昨日に引き続き、床面の全面掘り下げを完了する。6-38グリットで

は、石器群が出土した。5-37~40、6-38~40などのグリット調査。5-40、6-40では、北測グリット壁のコーナーを結ぶ半円のプランと、それを取り囲む形で3個のピットを昨日の雨のため、確認する。

- 3月31日（月）曇り一時雨、6-38グリットで検出された石器群の実測と遺物取り上げを行なう。  
石器群南わきより、フレイクが數片出土する。本日で調査を完了する。

（事務局）

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

あがた遺跡は松本平の南東部にあり、薄川の扇状堆積地である。標高はほぼ600mで北西に僅かに傾斜しており、松本市の中心街へと続く。位置は薄川へは南へ約400m、女鳥羽川の清水橋へは北西に700mの地点にあり、松本市街地の東端にあたる。

東には2~3kmで美ヶ原から続く里山辺の山地があり、西側は奈良井川、梓川を越えて、15kmあまりで西山の山地に至る。

社寺、建造物に対してみると、南に薄川を隔てて筑摩神社があり、北に800mほどに耳塚様、清水に櫛井泉神社がある。松本城へは直線距離で北西へ1.5kmである。

湧水についてみると現在時点のものは別項でふれたが、江戸時代では埋橋に城内で産湯に用いたといわれるお玉ヶ池、善光寺名所図絵にも残されている源地の親井戸、前記櫛井泉等の名泉が知られている。

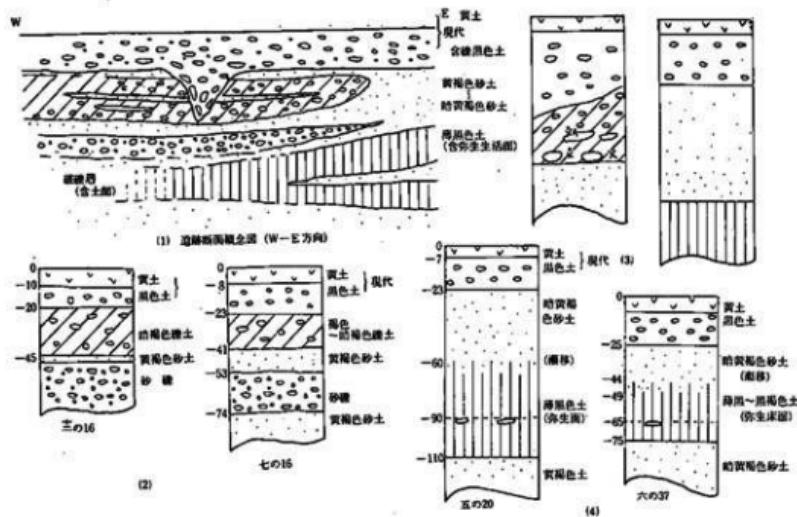
また当地は大正8年に松本高等学校が建設されるまでは、あがたの宮があったが、南方200mの位置に遷座されている。

（事務局）

### 第2節 地形及び地質

本遺跡は、薄川の度重なる氾濫により急速に堆積してきた扇状地上にある。薄川は三峯山に源を発して、北西に流下し、入山辺地区を扇頂として西に広がる扇状地を作っている。その扇端は松本市街地にあり、北は清水付近で女鳥羽川の扇状地に接し、南は神田付近まで広がっている。遺跡は扇端近くの右岸にある。

薄川の流路は約16kmあり、松本市中条で田川と合流する、河床は急勾配のため、有史以後もしばしば洪水を起こし、土砂の堆積量は殊にはなはだしい。



第1図 あがた遺跡地層図

本遺跡付近の地層（第一図参照）は、厚さ、数mの黄褐色砂土層を造構のベースとして、その上部に同層へ腐植土の混入した薄黒～黒褐色土がある。そして、この薄黒色土中に最下部の造構（弥生）があり、その上に粘土質を全く含まない砂砾層が、南東方向から北西方向へレンズ状に入っている。この砂砾層中には、土師の破片を少量含んでいる。

さらに、その上に黒褐色～褐色の礫土が厚いレンズ状に乗ってくる。この中には須恵、土師、灰釉陶器およびその遺跡らしいものがある。これ等の砂砾層と礫土層の二層はいずれも筋分けが極めて悪く、第一図に示すごとく黄褐色砂層上部に洪水による氾濫で堆積したものである。

この二層のうち、上の黒褐色礫土層は表土（黒色土）と共に度重なる人工的擾乱を受けている所が多く、このため、古代末以後の造構は大部分破壊されたものと推定される。

以上のごとく、古い遺跡は洪水により、上の新しい遺跡は人工的に擾乱されている。弥生の造構がある 5-20付近や 6-37付近は、第一図の東端にあり、二度の洪水による擾乱をまぬがれたものである。

#### ○ 砂層中の礫について

この薄川が上流で、内村累層を浸食し、流下しているので岩質も、半深成岩が変質作用を受けた緑色火成岩が最も多く、統いて石英閃綠岩、ヒン岩、安山岩、砂岩などの、やや変質作用を受けた礫となっている。

#### ○土質について

黄土…人工的堆積土でローム質

表土…含礫黑色土、現代の遺物多し

黒褐色～褐色礫土層…砂礫層とベースの黄褐色砂土が混ざり腐植土が入ったもの

砂礫層…いわゆる砂利層（粘性全くなし）

薄黒色～黒褐色土層…ベースの黄褐色土層が沼地となり腐植土となっている。一番粘性に富む。

黄褐色～暗黄褐色砂土層…遺構のベースをなすもので細砂シルトに粘土が加わったもので粘性がある。

以上、土質について簡単に述べたが、本遺跡で注意すべきことは、同じ地層でも、含有する腐植酸のわずかな違いで色が微妙に変化しており、異った堆積物として錯覚し易いことである。

（森 義直）

## 第3節 湧水

1

市内の湧泉はいわゆるカマといわれる、盆状のくぼんだ底地から湧き出た水をたたえたもので、池状湧泉といつてはいけない。これらの湧泉の分布は昭和30年頃の調査でみると、奈良井川、田川、薄川、女鳥羽川等の扇状地で、比較的西南部に多い。特に出川、井川城、鎌田、笠部、征矢野、高宮、両島、渚方面に多い。他には東部の筑摩、埋橋、源地、中心部では松本城周辺等である。

これらの湧水はその多くは飲用水として大切に使われていたが、上水道の普及と共に飲用水としての使命が失われ、またビル・工場等による自家用、工業用水の使用増加、加えて周辺地域の用地開発により大巾に湧水地図は変化してきている。

昭和54年6月における地区別井戸分布は表1のとおりで、旧市内は浅井戸が多く、今井、芳川地区は深井戸が多い。これら地下水の供給源は奈良井川の伏没する能力が最も大きく松本市街地付近の地下水の主要部分を占めており、河川表流水からの供給量の60～80%を占めている。

地下水供給は河川の他に用水路・水田などを通して行われるが、河川・用水路の改修が大巾に進み、表流水の伏没量についても大きな変化が生じている。

2

あがた遺跡は薄川右岸にあり、今回の調査でも別項地質調査において、詳述されているが、地表下20～30cm以下は礫層であり、薄川は定まらず時期によっては氾濫を繰り返していたものと思われる。本遺跡の造られた時期に薄川がどこを流れていたかは判明しないが、現河川位置と大きく違わないことは礫層などより推定される。



第2図 漫水地図

当時の湧水についても判然としないが、現在の湧水からある程度の推定がつくと思われる所以、あがた遺跡周辺を限って見てみたい。

あがた遺跡の北東、里山辺北小松の塩野寿夫氏宅には深さ約13mのつるべ井戸があり、55年7月6日の調査時には自然水位が地下4mであった。この井戸水は旧松本高等学校の最初の校舎をつくった折、セメントねりに使われたとのことである。<sup>(4)</sup> 北方200mの農林省蚕糸試験場では現在も井戸水を汲みあげて使用している。その50m北東の旧金山町増田眞三氏宅には古い池があり、昔より湧水していいたとのことであるが現在は枯れている。遺跡の真西の松南高校でも井戸水を汲み上げており通年にわたって利用されている。

片倉製糸の間を通る国体道路ぞいには、松本城内で産湯に使った程の名水で知られるお玉が池があるが、現在は地・井戸の痕跡がない。

南側をみると、源池小学校北の墓地と道ぞいに井戸ポンプが残っているが、勿論現在は使っていない。埋橋町内もやや西寄りになると湧水があり埋橋1-2-13、赤羽公民館では自噴する井戸を使っている。

これらを通してみると、現在ではあがた遺跡周辺は湧水の東端にあり、その西側は豊富な湧水にめぐまれている。これらのことから立地条件としてはやや高めの台地となると思われる。

(事務局)

#### 参考文献

- (1) 東筑摩郡松本市誌、第1巻自然P.411
  - (2) 「松本の地質」より
  - (3) 環境保全調査研究業務委託報告書 S.55.3
  - (4) 里山辺、塩野寿夫氏の教示による。
- 湧水全般について太田守夫氏の教示を得た。

表1 松本市地区別井戸分布

(松本市役所地下水採取量出典による。S.54.6)

地区名	本数	備考
本郷岡田	17	
里山辺・筑摩	65	
旧市内北部	133	浅井戸が多い
旧市内南部	159	#
西部・島内・島立	25	
新村・和田		
笛賀・神林	45	
今井	21	深井戸が多い
芳川	49	#
寿・中山・並柳	45	浅井戸が多い
合計	559	

## 第4節 周辺遺跡と既出遺物

### 1 周辺遺跡（第3図）

あがた遺跡の周辺は、薄川の中流域に位置し、北側を流れる女鳥羽川との複合扇状地上にあたる。このため、弥生、土師期の遺跡が多くある。第3図によりこれらの遺跡について述べてみたい。なお県ヶ丘高校遺跡より出土した遺物についてはまとめて別項でふれた。

#### ■先土器時代

市内南東の中山丘陵北端の弘法山古墳東麓より、ポイント1点が採集されている。

#### ■縄文時代

この時代の遺跡は、東山山麓から市街地に西下するにしたがって数が少なくなってくる。薄川の右岸では、四谷から加曾利E式に属する完形土器が、埋橋から凹石と大形石棒が発見されており、左岸では、林城山西麓の山越遺跡から石棒、神田集落内と筑摩小学校東側から土器片が採集されている。他方南側の千鹿頭社入口北側、横山永藏氏所有のブドウ園から、土師、須恵、灰釉とともに縄文土器、打製石斧が同氏により採集されている。また弘法山北西麓の平畠遺跡から石鎌、更に南方西麓の山行法師遺跡では縄文式土器と人骨、宋錢が出土している。

#### ■弥生時代

この時代の遺跡はほとんど土師期の遺跡と重なっている。薄川右岸の里山辺塞ノ神遺跡、針塚遺跡から、条痕文や太い沈線文、引搔き文のある壺形土器の破片が出土しており、やや下流で、当遺跡も含め、北東隣りの県ヶ丘高校敷地、蚕糸公園など、広範囲に分布している。また左岸では、富士電機敷地およびその付近、神田保育園とその付近、筑摩小学校東、それに昭和54年に発掘調査され、少量の弥生土器が出土している松本工業高校遺跡などが知られており、百瀬式から箱清水式にわたる遺物の出土をみている。

#### ■古墳時代

薄川の右岸、当遺跡よりやや上流の里山辺薄宮周辺には、荒町古墳、大塚古墳、針塚古墳、猫塚古墳、古宮古墳など積石塚古墳が分布しており、下って清水小学校西側墳丘より小形八稜鏡と灰釉の壺、环が発見されている。更に南西へ下ると、古墳と思われる県の森敷地内の県塚第1号墳、これより北へ約100mの地点に、県塚第2号墳があり、また当遺跡南側の松商学園敷地内の墳丘から直刀と半欠の瑞花双鳥八稜鏡が発見されている。左岸では、林城山西側の台地にある林御符古墳で直刀、劍が発見されており、南西に下った山腹あるいは尾根の基部に生妻古墳、棺護山古墳群があり、開成中学校建築の際、調査され、5本の直刀、劍や鉄鎌、有孔砥石が発見された。また同校々庭拡張のため調査された中山36号墳からは船載鏡1面と土師器壺1点が出土した。更に西側、中山

丘陵の北端に前方後方墳の弘法山古墳があり、昭和49年に発掘調査され縄文内より半三角縁四獸文鏡、ガラス小玉、鉄斧、鉄器片鉄劍、銅鏡、鐵鏡が出土している。平地にもどって、薄川南岸里山辺南小松に土上古墳があり、直刀、馬具等が出土している。

土師期の古墳以外の遺跡となると、前出の弥生時代の遺跡と重なっているものが多く、薄川右岸では、当遺跡のほかに里山辺荒井、北小松の百瀬一渡氏屋敷内より縄軸の破片（現在、山崎治男氏所蔵）、同八坂神社境内より骨、炭、本郷の惣社、南西へ下って県の森の北側、県ヶ丘高校敷地から須恵器、土師器、灰軸、布目瓦等、同校南側より須恵器片と共に焼けた布目瓦が（小岩井英雄氏が採集し、現在は、塩野寿夫氏所蔵）また、県の森敷地内の工事現場からも須恵器、土師器片の出土が確認されている。そのほか蚕糸試験場敷地、松商学園敷地、四谷、埋橋など広範囲にわたっている。左岸では、前記の千鹿頭社入口北側のブドウ園、松本工業高校敷地、富士電機工場敷地、神田保育園敷地、神田北、三才、筑摩等に須恵器、土師器の出土をみている。なお、松本工業高校校庭より布目瓦が出土したことが塩野寿夫氏により確認されている。

（熊谷康治）

#### 参考文献

- 東筑摩郡、松本市、塩尻市誌 第2巻 歴史上
- 長野県立松本工業高等学校遺跡緊急発掘調査報告書
- 弘法山古墳
- 松本市史 上巻



1. 和泉 2. 御符 3. 山越 4. 千葉頭社北 5. 平畠 6. 山行法師 7. 鈴塚・窓の神 8. 県ヶ丘  
高校 9. 葛糸公園 10. 富士電機工場 11. 神田 12. 筑摩 13. 筑摩小学校東 14. 松本工業高校 15. 荒  
町 16. 北小松 17. 清水 18. 新井 19. 松商学園 20. 南小松 21. 柏原山古墳群 22. 生妻古墳 23. 弘  
法山古墳 24. 三才 25. 悅社

第3図 周辺遺跡図

## 2 周辺遺跡の既出遺物

第4図と第5図は、日本民俗資料館、松商学園所蔵他の本遺跡周辺出土遺物である。資料館所蔵遺物については、残念ながら子細な出土地は不明である。以下各項にそって概略を紹介したい。

### 弥生土器（第4図）

1と2は、市内清水地蔵で発見された壺型土器と甕である。1については、口縁部は一部を除き欠損している。復元すると口径は4.3cm、胴部最大径は5.9cm、底径は4.2cm、器高は8cm、厚さは5mm前後の小型土器である。胎土は淡褐色で焼成は良好である。器面全体に赤色塗彩をほどこし、外面はたて方向に、内面口縁部付近は横方向にみがきがかけられている。2は、口径10.6cm、底径5cm、厚さ7mm前後の小型の甕である。色は淡褐色を呈し、胎土はもろく、一部はげ落ちたところがあり無文である。

3は清水地蔵に隣接する四ツ谷地蔵で出土した壺型土器である。口縁部は欠損している。現在の器高は12.5cm、底径6cm、胴部最大径11.7cm、厚さは8mm前後で、器面全体に赤色塗彩をほどこし、断面は、淡褐色で焼成は良好である。胴部周囲3ヶ所に2隆1組の突起があり、またこの突起と突起の間下方に貫孔突起がある。欠損している口縁はやや外反するものと思われる。

4は、薄川左岸の筑摩地区内で出土した瓶型土器である。口径10.8cm、器高6.7cm、厚さ6mm前後で、底部はやや丸味があり、18個の穿孔をもつ。胎土は淡褐色で焼成はやや軟い。器面内外全体に赤色塗彩であるが、現在はほとんど消えている。

### 土師器（第4図5）

富士電機工場敷地内より出土した壺型土器である。口径は16.1cm、器高は26cm、底径は5.1cm、厚さは1cm前後である。胎土は淡褐色で、若干の微礫が混入しており、焼成は良好である。胴部から底部付近にかけて煤煙が付着している。

### 石器（第4図）

筑摩地区出土の大形蛤刃磨製石斧である。完形品で、全長が25cm、先端部の幅が8.5cm、中間の厚さが5cm、重量が1.8kgありこの地域でも最大のものであろう。頭部には打撃を加えたものとみられる痕がある。

### 縄轆（第4図 7～9）

7は、腰に稜をもった浅い皿で、高台は幅の広いわゆる蛇の目高台である。胎土は灰黄色で焼成は比較的硬く良好である。釉薬は淡緑釉が全面に施され、美しい光沢がある。内外両面に三ツ目トチンの痕がある。本品は、これまで平出遺跡出土遺物としてしらしていたが、本県中央道遺跡調査団の笹沢浩氏より、県ヶ丘高校敷地内の出土であるとの御教示をいただいた。現在は平出遺跡考古博物館所蔵である。

8は、元信州大学敷地内（現県の森）出土の段皿である。胎土は灰黒色、緻密で焼成は良好であ

る。釉薬は濃緑釉が全面に施されており、内面の一部がやや銀化している。日本民俗資料館所蔵である。

9は松商学園出土の濃い緑のつやのあるもので、内部に段をもつもので、胎土は良好、焼成堅密で、淡灰色であり、釉にはムラがある。

第5図は、松商学園敷地内出土で現在、同校考古資料室に保管されている遺物である。

#### 土器類（第5図 12, 14~17）

12は、小型の皿に高台を付けたような感じのものである。色調は全体に淡褐色を呈し焼成、胎土とともに、良好である。高台は、上部に比して大きく、径は4.8cm、高さは1.2cm上部の径は、10.5cm、器高は2.8cmである。

14は、赤色塗装のある碗型土器である。胎土の色は褐色で、焼成とともに良好である。底部は糸切りで、内面に赤色がよく残り、ていねいにみがかれている。

15は、ほぼ完形の小型丸底壺である。色調は、全体に淡褐色を呈し、外面はていねいにみがかれ、底部付近にスヌが付着している。焼成、胎土ともに良好である。

16・17は、高壺である。現存は脚部のみである。16は、全体に厚手で、重量感があり、あらいつくりである。脚部に一部、ヘラ削りの痕を残している。色調は、茶褐色で、胎土は、厚く、サンドイッチ状に、灰色土をはさんでいる。壺部は、内面全体に黒色であったと思われ、壺底部の黒色が現存する。

17は、全体に光沢があり、ていねいにみがかれている。色調は、茶褐色を呈し胎土は、サンドイッチ状に灰色土をはさんでいる。

#### 灰釉陶器（第5図 13）

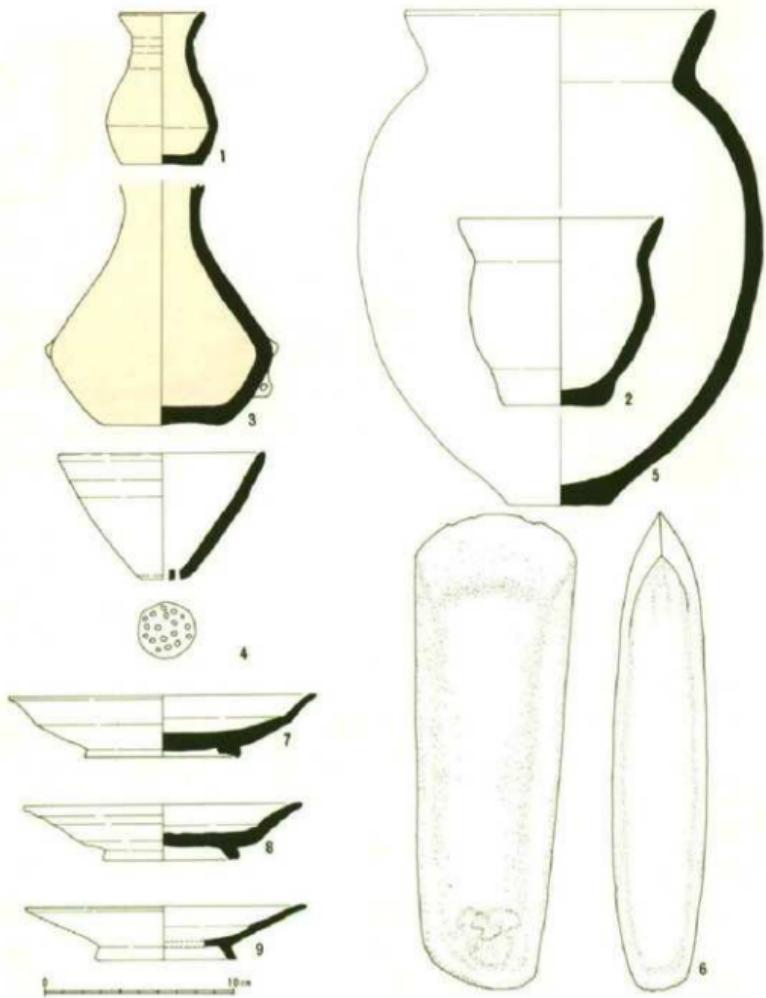
碗型の灰釉陶器で、釉薬は多少むらがあり内面の底部付近と外面の下半分は無釉である。口縁の径は、12.6cm、高台径は、6.7cm、厚さは口縁付近3mm前後、底部付近は5mm前後である。胎土、焼成とともに、かたく緻密で良好である。高台は、付高台で、本体との接着面は、未調整で、あらいつくりである。

#### 古鏡（第5図 18）

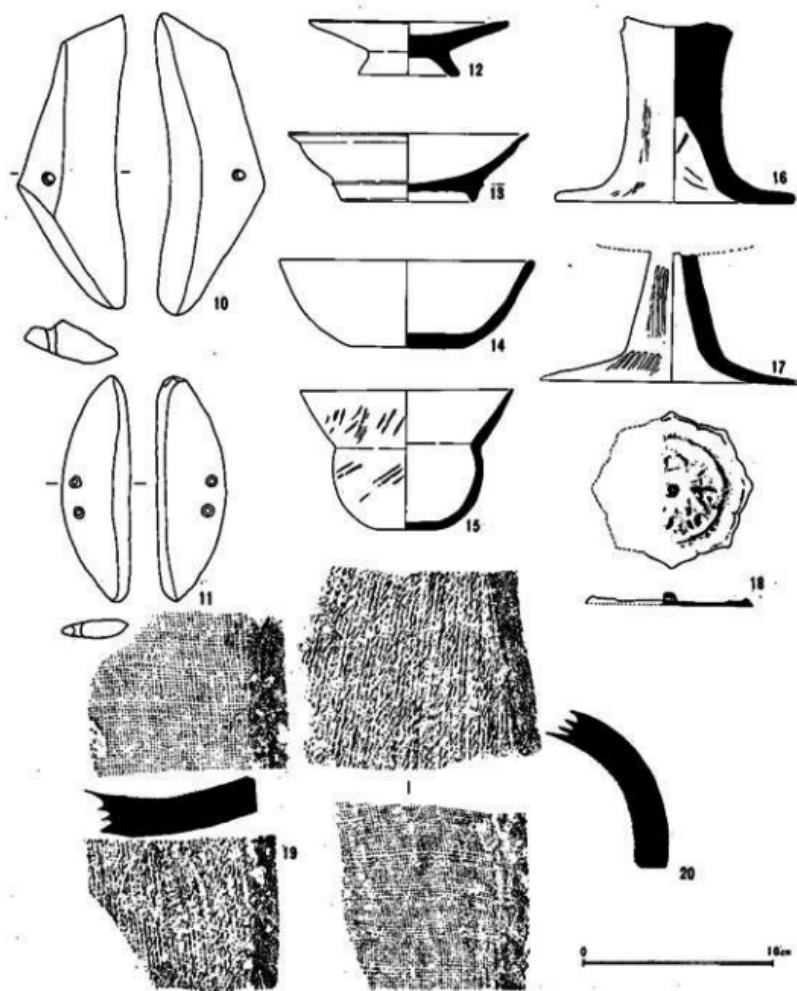
この鏡は、松商学園敷地の墳丘から出土した瑞花双鳥八稜鏡で、現存は約半面である。周縁は、巾約8mm前後で外区と内区は、八花形の圈帯で区切られている。单鈕の周囲に20個ほどの凸部を鋲出し、花部の中心をつくっている。内区には、四羽の飛鳥と、草の模様を描いている。表面は、銹はなく、質は良好である。

#### 石器（第5図 10・11）

10は、長さ15.3cm、幅5.3cmの大型の石包丁である。石質は粘板岩で自然面を利用しておらず、表面には、石質の文様がきれいに出ている。一穴である。11は、10より小型で長さ11.8cm、幅3.6cmである。全体的に薄手であるが、刃の付近が厚くなっている。石質は粘板岩で2穴である。



第4図 周辺遺跡出土遺物実測図1(1:3)



第5図 周辺遺跡出土遺物実測図(2) (1:3)

### 布目瓦（第5図 19・20）

第5図19は、県ヶ丘高校敷地南側出土、20は松本工業高校敷地より表採の布目瓦で、19は女瓦、20は男丸瓦である。内面凹部の布目、外面凸部のたたき縄目文、篦状工具による2面づくり側面化粧調整等、19～20共に成形方法は同作業であるが、模骨のみ、19は円形カーブがゆるやかで、20は鋭い。布目は共に稍や細かく、全容から推測して同一窯とも感じられる。

19は側面縁部の布目痕から見て、恐らく1枚づくりと考えられる。器厚は1.5cmを計測し、胎土に石英粒、小石を含み、焼成は普通で、色調は明るい赤褐色を呈し、2次焼成を受け、内面は黄褐色を呈する。出土状況はフェンス取付け基礎工事中に発見された為、深さ及び包含層は不明。20は胎土に石英粒、小石を含み、焼成は断面サンド・ウィッチ状を呈する。焼成不良で、稍や軟質である。色調は外面は2次焼成の為黒灰色を呈し、内面は稍やうすい赤褐色を呈し、器厚は前部2.06cm、後部1.7cmを計測した。

（熊谷康治）

### 3 県遺跡－県ヶ丘高等学校地点－

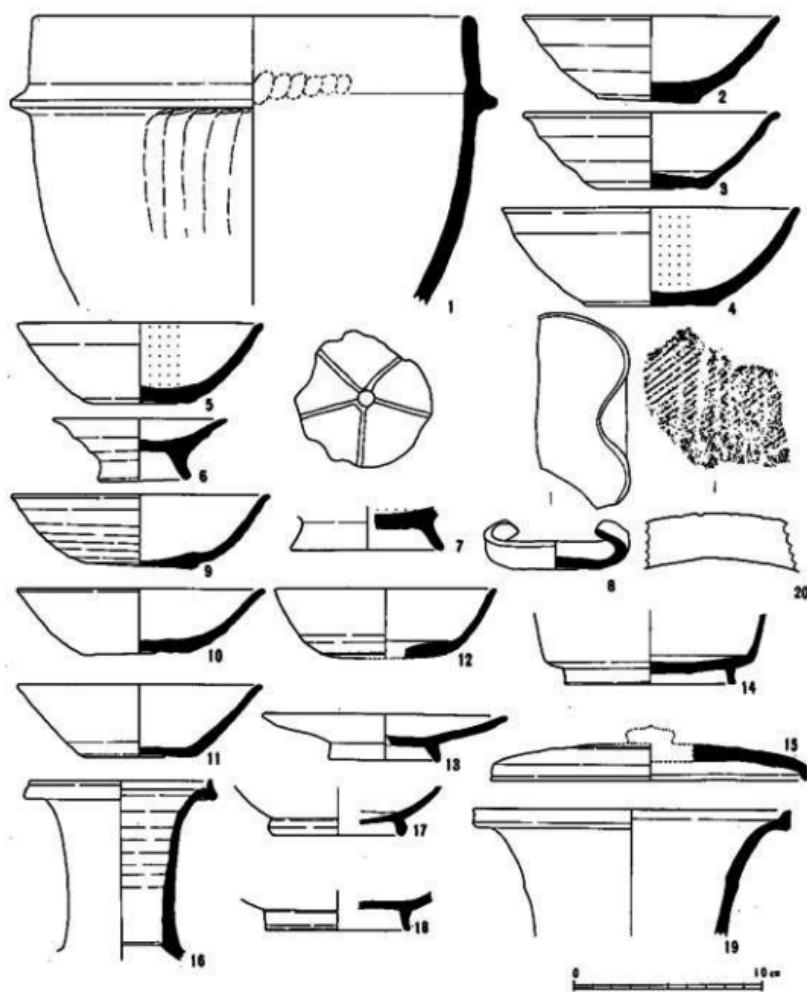
この遺跡は過去において桐原健氏によって発表されている。これは昭和32年以前に出土したものであるため、それ以降20年以上たった現在では、多くの遺物が工事などによって出土している。それらは県ヶ丘高等学校風土研究部の先輩によって採集され保管されてきている。特にこれらは昭和33年の土師器片、須恵器片を中心に100余片採集されている。また、昭和52年家庭科教室棟建設に際して土師器、須恵器、灰釉陶器などが採集されている。これらの一部については先日発表したが改めて発表したい。

本遺跡では土師器甕・鉢釜・壺・耳皿、須恵器壺・蓋・長頸瓶・甕、灰釉陶器皿・碗・広口瓶、綠釉陶器皿、布目瓦等出土している。以下昭和33年以後の出土遺物を中心にみていく。

#### 土師器（第6図 1～8）

鉢釜、壺、耳皿があり壺は高台が付くものと付かないもの、内黒処理されているものとされていないものに分類できる。

1は鉢釜で、ほぼ垂直に開いた口縁をしている。口縁から5cm下の所に約1cmの鉢を付している。鉢付着部分の内面は指でおさえ、外面は鉢より下はへらで縦方向に削っている。胎土は砂粒が目立ち、焼成は良好で暗褐色を呈している。口径は23.2cmである。2・3は高台がなく内黒処理のされていない壺である。2は口縁に向って大きく開き厚く感じられる。右回転のロクロナデがなされ底部は回転糸切りである。胎土は砂粒が多く、焼成はあまり良くない。明褐色を呈する。口径13.5cm底径5.3cm器高4.4cmを有する。3は口縁に向って大きく開き口唇は外反している。右回転のロクロナデがなされ、底部は回転糸切りである。胎土は砂粒が少量含まれ、焼成は良好である。淡褐色を呈する。口径13.3cm底径5.7cm器高4.0cmを有する。4、5は高台がなく内黒処理されたものである。4は湾曲しながら大きく開いている。右回転ロクロによるナデが行われており、底部は回転糸



第6図 県ヶ丘高等学校地点出土遺物実測図 (1:3)

切りである。胎土は砂粒が目立ち焼成は良好であり淡褐色を呈する。口径15.5cm、底径6.8cm、器高5.1cmである。5は口縁に向って大きく開いており右回転のロクロナデが行なわれており、底部は回転糸切りである。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好である。淡褐色を呈する。口径12.8cm、底径5.0cm、器高4.2cmである。6は高台を有し内黒処理のほどこされていない坏である。坏部は浅く大きく開き、外反した高めの高台を付けている。内面は丁寧で外面は雑なロクロナデを行っている。胎土は砂粒が少量含まれ焼成は良好である。淡褐色を呈する。口径9.2cm、高台径4.7cm、器高3.3cmを有する。7は高台を有し内黒処理のされているものである。高台は大きく開いている。右回転ロクロにより整形され底部は回転糸切りの後高台を張り付けている。また焼成の後径10mmほどの孔が底部に開けられ、それを中心に放射状に5本の暗文がほどこされている。この土器の意味はいろいろ考えられるが耳に関する信仰的なものがあるいは鉗鍼車に使用されたものか、いろいろ考えられる。胎土、焼成とも良好である。高台径は8.3cmを有する。8は耳皿で、浅い皿を作った後強く折返している。右回転のロクロにより整形されており底部は回転糸切りである。胎土、焼成とも良好である。淡褐色を呈している。口径11.9cm、底径4.8cm、最大高2.6cmである。

#### 須恵器（第6図 9～16）

坏、蓋、長頸瓶がある。

9～12は高台を有さない坏である。9は底部から大きく開いており、右回転のロクロによって整形されており、ミズヒキ痕が明瞭である。底部は回転糸切りである。胎土は少量の砂粒を含み焼成は良好である。青灰色を呈している。口径13.6cm、底径5.7cm、器高3.8cmである。10、11は大きく開き口唇がわずかに外反している。右回転のロクロにより整形されており、底部は回転糸切りである。10は胎土は良好であるが還元不足で暗茶褐色を呈している。口径13.0cm、底径5.8cm、器高3.4cmである。11は胎土に砂粒が少量含まれており、焼成は良好であり青灰色を呈している。口径12.8cm、底径6.0cm、器高3.8cmである。12は底部が丸みをもっており口縁は軽く外反している。丁寧なロクロナデを行い底部は回転ヘラ切りである。胎土、焼成とも良好で青灰色を呈している。口径11.7cm、底径6.6cm、器高3.6cmである。13、14は高台を有するもので、13は浅く大きく開いている。右回転のロクロにより整形され底部は回転糸切りの後高台を付けている。胎土は砂粒が目立ち、焼成は良好で暗灰色を呈す。口径12.8cm、高台径5.8cm、器高2.4cmである。14は高台がほぼ垂直に立ち上がっている。左回転の丁寧なロクロナデを行っている。底部は回転糸切りの後、外周を回転ヘラ削りをして高台を付けている。胎土はわずか砂粒を含んでおり焼成は良好である。青灰色を呈する。高台径9.0cmである。15は蓋で、背が低くかえりは外反気味である。天井部は右回転の回転ヘラ削りを行っている。胎土、焼成は良好で青灰色を呈している。口径は16.5cmである。16は長頸瓶の頸部破片である。細めのやや外反した頸で、口唇は強く折り返している。胎土は砂粒を少量含み焼成は良好である。青灰色を呈している。口径9.6cmである。

#### 灰釉陶器（第6図 17～19）

碗、広口瓶がある。

17、18は碗の底部破片である。17は内湾した高台を有しており、丁寧なロクロナデによって整形されており、底部は回転糸切りの後高台を付けている。内面に朱が付着しているのは注目される。胎土、焼成良好で乳白色を呈している、白色の釉をつけている。高台径 6.9 cm である。18はほぼ垂直な高台を付けており、丁寧なロクロナデによって整形されている。底部は回転ヘラ削りの後高台を付けている。内面に重ね焼の痕跡が残っている。胎土、焼成良好で乳白色を呈している。高台径 7.6 cm である。19は広口瓶の頸部破片である。大きく開き端部は折り返しており、丁寧なロクロナデを行っている。胎土、焼成良好で乳白色を呈している。口径は 16.7 cm である。

#### 布目瓦（第6図 20）

20は布目瓦で外面はタタキが残っている。胎土は砂粒が少量含まれており、焼成は良好である。

以上本遺跡の未発表の主な遺物を紹介したが、奈良時代から平安時代の遺物が中心であり、特に平安時代の遺物が多数を占めている。また内面に朱の付着した灰釉陶器、布目瓦、綠釉陶器等注意しなければいけない遺物も出土している。これらの遺物は正式調査されたものではなく、工事の際に採集したものである。よってどのような遺構が眠っているか謎である。今後注意していかなければならないと思う。

（篠宮 正）

註1 桐原健「長野県松本県ヶ丘遺跡出土土器の様相」（『信濃』第9巻5号）昭和32年

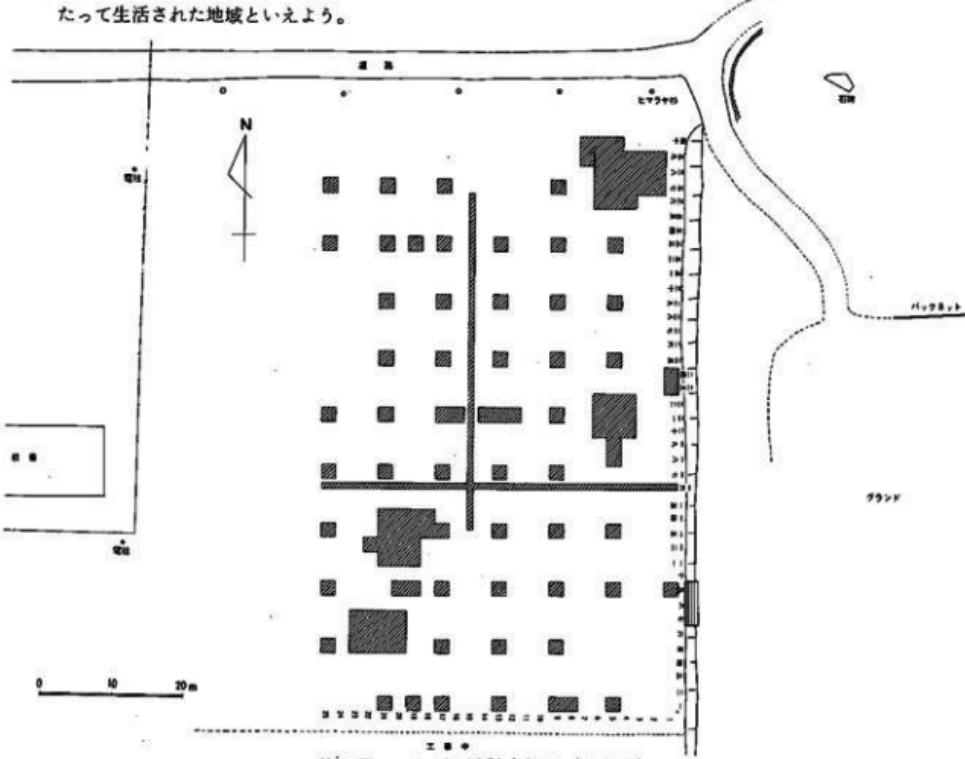
註2 篠宮正「県ヶ丘遺跡出土の土器について」（『風研考古ジャーナル』第5号）昭和54年

### 第3章 遺構と遺物

今回の発掘調査地点は旧松本高等学校創建当時学生ホールや小屋のあった場所であり、その後も教室が建てられた地点である。市の公園造成計画では池として掘り込まれる地点を中心として東西50m、南北80mの範囲にわたって $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを設定した。(第7図)

地層は校舎建設およびその後の廃材処理のため搅乱されており、遺物の出土はあっても遺構の検出は困難をきわめた。その中でも遺構として確認できたものは、中央東よりの5-20を中心とする弥生・土師の住居址・その北側6-39を中心とした弥生時代の住居址、22-6を中心に土師時代の住居址。他に21-13周辺の疊敷遺構等があり、また、遺跡中央に十文字に地層調査のためのトレチを入れた。

全体としてみれば弥生時代・土師時代を中心で、その後の中世遺物も散見しているので長期にわたって生活された地域といえよう。



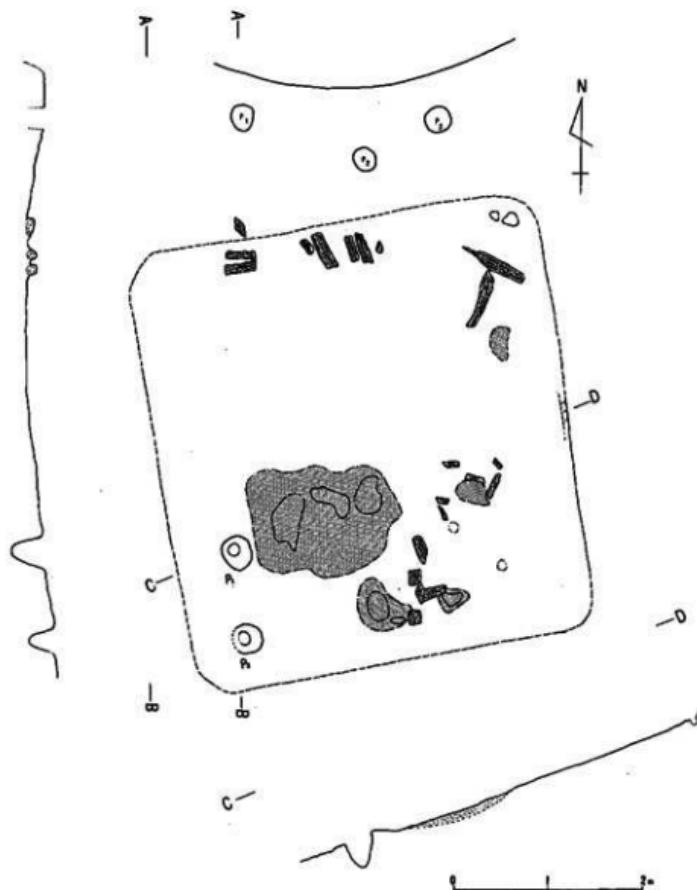
第7図 あがた遺跡全体図 (1/800)

## 第1節 弥生時代の遺構と遺物

### 1 第1号住居址（第8図・図版2）

#### 遺構

本址は5-38・39、6-38・39及び5・6-37の一部にかけて発見された住居址である。今回の県の森発掘調査区域の最北東隅部に位置していた。然しながら本址は、後世の搅乱がひどく、検出



第8図 弥生第1号住居址実測図（1:60）

されたプランもはなはだ不鮮明な隅九方形、堅穴住居址であった。

平面プランは東西約4.4m、南北約4.6mを計測する。主軸は入口部が未検出の為、不明であった。掘り込みは、地表下75cm、黄褐色土を切り込んで構築されたものと想定される。壁側面の立ち上がりは傾斜を呈し、壁高については、破壊及び削平もあって、平面的にとらえる事は不可能であった。周溝は、一部それらしき残存部があったが、不鮮明で明確には検出出来なかった。

床面は6-38を中心として検出された。貼り床が施されて、長期間居住による踏み固めの形跡が強く残っていて、堅緻であった。然しながら、貼り床を除く床面は軟弱であり、判然としない不鮮明土とを併せもっていた。床面にはほぼ全面にわたって、焼土が拡がっており、南側床面上に厚く最大焼土塊の一つは、その拡がり径約30cm、厚さ10cm強で、凸状を呈し、周囲の黄褐色土床面は強い火力を受けて焼き縮っていた。中央部から北側壁に向って南北に並行、東西に八の字状に最大径15cm~20cmを計測する棒、樅、檜、及び広葉樹類の炭化材が散布し、更に南東部焼土塊周辺にも炭化材が散乱検出されている。これらの所見から、本址は火災にあったものと思われる。尚この貼り床面下、約40cmの処で黄色砂土を伴う礫層に達する。

住居址内部施設としての炉、貯蔵穴等は精査するも検出されなかった。ピットは南壁面近く焼土塊に添って30cmの間隔を持つ径15cm×20cm、深さ-23cm、径18cm×15cm、深さ-34cmを計測するP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が検出された。P<sub>1</sub>は更に後述する一括集積石器群の直下に若干かかり、ピット内蔵黒褐色土上部より、両面研磨痕のあるフレーク（第16図47）が出土した。尚このピットは後述する本址の性格から想定して、工作に関係したものと思われる。

本址住居址内出土遺物は、二群に大別される特異な性格を具備して、かなり大量に出土した。

一群は土器で、本址中央部及び北側に集中的に出土した。土器は黒褐色土（覆土）よりの出土であり、床面直上、床面付近レベルに行くほど破片も大きくなり、平面的な拡がりを見せてている。6-38・39、5-38を中心として、大破片が散在していた。土器セットは弥生中期の變形土器が主体で、他に壺形土器、鉢形土器、高杯、及び台付變形土器、片口形赤色塗彩土器、瓶形土器等であった。尚本址の時期決定は、床面に密着して出土したほぼ完形の台付變形土器（第9図12）を中心として、櫛描き文、謂ゆる櫛状歯を有する施文具によって器面に波状条線文を施文した土器群（百瀬式）をもってあてる。

二群は石器で、特に西南部壁面より80cm位住居址内に位置した地点に一括して集中的に重なり合って径20cm、厚さ5cmにわたって、床面に密着して出土した。一括集積石器群の出土状態は実に壯観であった。精査から推察して、或るいは皮袋、その他のいれものに貯蔵されてあったかも知れない。いずれにしろ直接火を受けない状態に置かれていたものと思われる。弥生セットを具備し、弥生特有の扁平片刃石斧を含めて磨製石器、磨製石斧、磨製石庖丁、砥石、フレークで、完成品、未製品が38点に及んだが未製品が大部分で、その中には表面に研磨の擦痕のあるものが数点含まれていたが、他は打ち欠いて割った板状の打製成形で、ほとんどが三角形状の磨製石器の未製品であり、

又それ等石器の研磨工作具であると思われる粗、細粒砂岩が各1点、計2点の砥石が、特に最上段に位置して検出された。(第18図)更にその周辺覆土より未製品板状打製成形石器片数点が出土している。又径15cm×13cm大の3面擦磨痕及び打痕が残る台石及び2コの磨石が床面、一括集積石器群の付近に発見された。更に北東隅部には擦磨痕が3面に残る台石径12.8cm×11.7cmが円山礫を伴なって出土した。他に蔽き石(ハンマー)も出土している。その他、穿孔つき完形、破損磨製石器が検出されている。

以上本址の石器の出土状態から所見して、本址は並みの住居址とは思われない。アトリエ、即ち石器製造工房址ではなかったかと思われる。原石、石屑等の出土はみなかったが、恐らく打製成形は屋外で行なわれたか、若しくは石質の多様性から推察して、石器形成フレークの状態で搬入されたのかも知れない。更に周辺近く出土した粗製手捏土器と思われる第10図14の祭祀的な小形土器との関係も重要な意味を持つものと考えられる。然しながら、日常生活雑器セットを完備した大量の土器の出土はどのように解釈したら良いのだろうか?要するに単なる工房址とは考えられなく、農業生産増大に伴う分業化へのプロセス上の初期一様式を示すものと思われる。又、検出された南側の厚い焼土塊も地床炉と考えるには稍や浅すぎる嫌いがあり、やはり石器工作に關係する暖、及び明り、若しくは火床と考えたほうが、無理がないものと思われる。更に本址の内部施設は貧弱であると思われるが、弥生中期には屋外炉付設の例も少なくないので一概にはいい切れないと。

本址の覆土からは古墳時代前期の古式土師(口縁部破片)2点が混在出土した。他に本址上面覆土より、土師、須恵器片が出土したが、前述の通り搅乱が著しいので、資料カットし、ここに記述のみとした。

#### 本址近接遺構

本址の北側(5・6-40)に黄色砂土を掘り込んだ(明かに本址より深い掘り込みで、本址より時期的に若干古いと思われる)3コのピットと思われる落ち込み径25cm×28cm、径23cm×25cm、径29cm×27cmのP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>を外側に伴う円形に近い壁の一部が発見されたが、ピットは未精査の為深さは不明である。遺物の検出が少なく、取り上げた資料はない。ピットの配列、円形壁面から考え合わせ、大形住居址の隅丸方形部分か、若しくは弥生中期初現の円形の張り出し貯蔵庫収納部分か、或るいは円形住居址等の壁面の残存部と思われるが、定かでなく、それ以外の弥生遺構の可能性もあり、とにもかくにも未精査の為、不明の遺構であり、今後の精査に期待したい。

### 遺物

#### (1)土器(第9~12図1~67図版3, 4)

本遺跡出土の弥生土器は、住居址の床面及び覆土より大量の土器片として、集中的に出土した。然るに小破片が大部分で、完形及び復元土器は僅か5点に過ぎなかった。為に資料性に乏しく、報

告資料として取り上げた土器は少ない。

出土土器は、弥生中期末葉（百瀬式）に比定されると思われる櫛描き条線文及び赤色塗彩土器が主体で、他に若干の弥生中期中葉・弥生後期初頭に編年されると思われる土器片が検出されている。上面覆土より、古墳時代前期に比定されると思われる古式土師2片、更に土師時代の布目瓦が1片出土している。以下形態、施文の組み合せ別に類別して記述したい。なお図版3、4の遺物ナンバーは実測・拓本図ナンバーと同一にしてある。

## I 壺形土器

### 第1類

謂ゆる大洞A'系の磨消繩文、変形工字文の亜種、及び箒描き条痕文土器群

第12図拓影55は、斜繩文に磨消し変形工字文が施文されている頸部破片で胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、色調は暗褐色を呈する。焼成時の酸素不足による煤煙痕が見える。第12図拓影62は横方向刷毛目調整をしたのち、2条の平行する箒描き蛇行沈線を垂下させている頸部破片と思われる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。

### 第2類

櫛描き波状文、簾状文、箒描き横位沈線及び地文細文との組み合せ土器群

#### A群

第9図6は、細頸壺の頸部破片で、頸部施文帯に約1cm間隔の箒描き沈線を4段に区画してめぐらし、上段2段と3段との間隔内には、1条の山形文、1段と2段との間隔内には、1つの刺突を施した円形浮文を貼り付け、口縁部は恐らくラッパ状に拡がるか、若しくは立ち上って翼面を形成するものと思われる謂ゆる押捺繩文、横位波線、刺突を付した円形浮文との組み合せ頸部收約施文様式、百瀬式の特徴を具備した器形と思われるもので、胎土は水簾精選生地と思われ、焼成も良好で、色調は黄褐色を呈する。第12図拓影53は、斜行繩文に磨消手法により5条の横位沈線を平行に区画施文されている頸部破片で、恐らく6と同様式を示すものと思われる内面緻密な研磨土器で、色調は黄褐色を呈する。焼成時の酸素不足による煤煙痕が残されている。

#### B群

第9図1は、口唇部に刻み目を施した稍や外反ぎみの垂直口縁で、外側は無文帯とし、横方向の刷毛目調整痕が残り、頸部施文帯は7本歯の櫛描き簾状文をめぐらし、肩から胴部にかけて、櫛描き斜状文を全面に余すなく充填させている。体部は緩かな丸みを持ち、胴中央部の最大径に至る。内面は横方向及び斜行刷毛目調整ののち、箒ナデ研磨が行なわれている。胎土に砂粒、岩片を含み焼成時の酸素不足煤煙痕を残し、焼成は普通で、色調は黄褐色を呈する。胴内外面に2次焼成を受け煤煙炭化物が付着している。第9図5は、押え巾3.5cmの大きな櫛描き簾状文をめぐらした頸部施文帯と口縁部を区画する1条の太い沈線がめぐらされている広口壺の頸部破片で、胎土に僅

かながら砂粒を含み、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。

### 第3類

#### 櫛描き縦直線、及び櫛描き波状文土器群

第9図2は、接合難解な破片が多く、現時点では接合出来得たもののみを図示した胴部破片である。6本齒の櫛状施文具で、余す処なく全面に波状文を充填させている。最大径部分で恐らく球形を呈するものと思われる。内外面ともに横方向刷毛目調整は良い仕上げで、胎土は水簾精選生地で、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。尚この土器は2類の範疇に入れるべきものかも知れない。第9図4は、扁平球形で、最大径を下腹部より稍や上部に位置し、胴部施文帯を胴中央部に集約させている。2条1組の刺突を2段に区画してめぐらし、その間隔内に上段の刺突に平行して1条、更にその下部中央部に平行する2条の横描き直線を横位にめぐらし、その線上に重ねるように2条の波状文を添わせて、更に仕上げとして上段の波線に方形状に4個の刺突を施した円形浮文を貼り付けた簡素な美を企画したレイアウトは余りにも稚拙な施文技術（不安定な回転台使用の為か）によってその目的を達していない。外面の横方向刷毛目調整が顕著で、胎土に僅かながら砂粒を含み、焼成は良好で、内面には2次焼成の糊状炭化物が付着している。色調は黄褐色を呈している。第12図拓影58は、櫛描き直線文帯を巾広くめぐらし、それを等間隔に縦走する櫛描き直線文を垂下させている丁字文、典型的な後期初頭土器であり、千曲川水系箱清水式様式であるが、間隔の大小によって先行尾崎式の細分も行なわれている。以上頸部施文帯を有する頸部破片と思われるが、小破片の為確定かない。焼成及び胎土ともに良好で、色調は赤褐色を呈する。更にこの様式は東海地方豊橋市瓜郷遺跡下層第1類細頸壺の頸部施文帯にみられ、弥生中期に比定されている。

## II 変形土器

### 第1類

第11図7は、内外面ともに横方向・斜行刷毛目調整を施こし、更に胴外面に篦描きによる綾衫状の交叉条痕文を引っ搔くような手法で施文を行ない、くの字状に外反する口唇部には細かな刻み目が列点状に施こされている。水簾精選の胎土で、焼成も堅く緻密で、最大径が口縁部にあり、胴張りのなだらかな茶褐色土器である。第10図14は、高さ7.8cmの小形変形土器で、石器集中一括出土周辺床面出土土器で、復元資料である。稚拙な造りで、手捏土器と思われる。篦及び指頭によって調整されている。最大径は口縁部で、胴上部の張り出しあるかたく、胎土、焼成ともに良好であるが祭祀的な香りのする土器で、色調は赤褐色を呈する。底部内面には炭化物が付着し、焼成時の酸素不足煤煙痕が残っている。

第12図拓影61は、台付変形土器の頸部から口縁部にかけての破片で、丸みを帯びたくの字状に外反する口縁部は無文で、頸部から胴部にかけて半截竹管状工具による垂下する多条痕文が刻まれ、4箇の刺突が施こされた円形浮文が貼付されている。胎土は水簾精選の生地で、焼成は良好で、内

外面ともに研磨され、色調は黄褐色を呈する。

## 第2類

### A群

第10図12は、台付變形土器で、外向、外弯した口縁部より下胴部にかけて全面に地文として斜繩文を押捺し、口縁部端までに及ぶ4本歯の櫛描き波状文を稍や緩い振巾でめぐらし、頸部より下胴部の繩文帯に大洞A'の磨消し変形工字文の繩文手法を踏襲した下方開き重ね四角形（謂ゆるコの字重ね）文様を篦描きで、6面に区画して施文し、珠形下胴部の無文帯を画する動きは、繩文中期の伝統が連綿として維続し、亀ヶ岡文化に固執する何らかの要因によって生み出された北原式に併行する地元造りの精製土器で、水簸精選生地の胎土であるが、僅かに砂粒を含み、焼成は堅く焼き締っているが、焼成時の酸素不足煤煙痕が残り（台脚部）他は赤褐色を呈している。高さ12cm、口径12.5cm、器厚0.4cmを測り、ほぼ完形品である。脚部と堷部との接合部は、くの字形を呈し、堷体部の稜線は内側にカーブしながら開き、最大径は口縁部である。第10図13は、12と同形態であり、大きさも同じである。強いて相違点を求めれば、口縁部は外向、内弯、体部の胴張り及び脚部と堷部との接合部のくの字形が球形を呈している。外面ともに横方向篦研磨が丁寧に施こされている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好であるが、2次焼成を受け、灰褐色を呈している。然し僅かに脚部の一部分に在来の赤褐色が残されている無文土器である。第11図拓影30は、外反、内弯を呈する台付變形土器の口縁部破片で、口縁部外側は一面に斜繩文を押捺し、頸部施文帯は細かな振巾による波状文が描かれている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、色調は2次焼成を受け、暗褐色を呈する。第10図8は、胴部全面に篦描きによる綾杉文が充填されている。頸部施文帯は綾杉文を切って、5本歯の櫛状施文具で振巾の乱れた深い彫りの波状文がめぐらされ、鋭くくの字状に外反した水平口唇部には或いは刻み目が施こされていたのかも知れないが風化が著しく定かでない。最大径は口縁部で、胴部の張りは少なく、稍や垂直ぎみで、胎土に僅かながら砂粒を含み、焼成は良好で、明るい赤褐色を呈する。第11図拓影25は、外反する口唇部から口縁部外側にかけて斜繩文を押捺し、1.5cmの無文帯を挟んで頸部施文帯は6条の櫛描き廉状文をめぐらした口縁部破片である。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、2次焼成を受け、色調は暗褐色を呈する。

### B群

第10図9は、緩かな外反、内弯を呈する口唇部には刻み目が施こされ、口縁部外側には口縁部に接して6本歯の櫛描き波状文を1cm内外の無文帯を画して2段にめぐらし、更に肩から胴上部にかけて櫛描き綾杉状交叉条線を施文し、下胴部は無文帯とし、縦方向篦研磨をち密に施こしている。内面は横方向刷毛目調整が丁寧に行なわれ、胎土に砂粒・石片を含み、焼成は稍や不良で、器面には焼成時の酸素不足煤煙痕を残し、内面は2次焼成を受けて、煤状炭化物が付着している。色調は茶褐色を呈する土器で、最大径は口縁部で、胴部は張りの弱い土器で、一部分のみ当初の明るい赤褐色をとどめている床面密着出土土器である。第10図10は、稍や丸みを持ったくの字状に外反

する口縁部の外側は、篦状工具による深い刺突が列点状に斜めに施こされ、頸部施文帯は櫛描きによる8条の簾状文がめぐらされ、体部全面に斜行篦調整ののち、絞杉状に櫛描き交叉条線文で充填されている。内面は刷毛目調整が横方向に施こされている。最大径は胴上部で、なだらかな内窓カーブを描き乍ら下降しているものと思われる。胎土に砂粒を含み、焼成時の酸素不足煤煙痕を残して稍や不良の焼成土器で、色調は黄褐色を呈する。第10図11は、くの字状に外反する口唇部に刻み目を施こし、口縁部外面は無文で、頸部施文帯は6条の櫛描き簾状文をめぐらし、体部全面に横方向・斜向刷毛目調整を施したのち、6本歯の櫛描き波状文を胴上部に2段に分けて施文し、それ以下は無造作に重ねて施文を繰り返しているものと思われる。正面中央部に2段とも同じ位置に波状文の断点が顕著に見える。最大径は胴中央部で、ゆるやかな円形稜線を見せる胴部である。内面は横方向篦研磨で、胎土は水簸精選生地で、焼成は緻密で良く焼き締って、色調は茶褐色を呈し、下胴部は2次焼成を受けている。第10図15は、台付變形土器の口縁部破片で、口縁部は低く、外向、外窓を示し、口縁部は無文で、頸部施文帯は頸部から胴部にかけて櫛描き波状文が施文されている。胎土に砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は暗褐色を呈する。第10図16・17は、ともに台付變形土器の台脚部破片で、胎土に砂粒を含むが焼成、調整は良い仕上げで、内外面ともに研磨されている。色調は16は赤褐色、17は黄褐色を呈する。第11図拓影26・27・28・29・30、第12図32・34は台付變形土器の口縁部破片で、26・27は口縁部外側に波状文施文、28・29は無文で、口唇部に篦刺突の刻み目が施こされている。30・32は櫛描き直線が施こされている。34は無文である。胎土、焼成はいづれも普通であるが、26・29は胎土に砂粒を含み、酸性土生地の為、器面がザラザラしている。色調は26・28・29は黄褐色、27・32は赤褐色、30・34は暗褐色を呈して、総て2次焼成を受けている。

### III 鉢形土器

#### 第1類

第11図拓影24は、無文の口縁部に頸部より胴部全面にかけて、回転による横位の網文を充填し、内面は丁寧な篦研磨土器である。胎土は水簸精選の生地で、焼成も密に焼き締まり、色調は灰褐色を呈し、強い2次焼成を受けている。

#### 第2類

##### B群

第10図18は、内外面ともに横方向刷毛目調整ののち、外面は縦方向に篦研磨された堅緻な無文土器で、内面は横方向篦研磨が行なわれ、底部から胴部にかけての緩かな立ち上がりは優美であるが、胴上部を欠く為、器形を知る事は出来ない。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で、焼成時の酸素不足煤煙痕が残り、色調は黄褐色を呈する。第11図19は、瓶形土器で、下胴部への立ち上がりは直線的にゆるく開き、底部は平坦で、径1.5cmの孔が穿かれている。内面壁は篦研磨が施こされた底部破

片である。胎土は水簾精選生地で、焼成時の酸素不足煤煙痕を残し、全体的に灰黄色を呈している。第11図拓影31は稍や内弯する刻み目を施した口縁部破片で、施文はなく無文で、強い2次焼成を受け、器面がザラザラしている。焼成はやや不良で、内面は箒研磨土器である。色調は黒褐色を呈する。第12図拓影52は、頸部施文帯に7条の櫛描き箒状文をめぐらし、胴部は櫛描き斜行条線で充填される。内面は横ナデ箒研磨で、胎土に砂粒を含み、焼成は不良で、色調は全体的に黒褐色で、一部分のみ黄褐色を残している。

#### IV 赤色塗彩土器（片口形土器）

##### 第2類

###### B群

第11図20は、平底、底部より、内側にカーブしながら珠形状に大きく開きながら口縁部に至ると思われる。口唇部に継を持ち、内外面ともに横方向刷毛目調整のうち、斜行箒研磨が施され、その上に朱（丹）を塗色したものと思われるが、埋土の2次作用及び2次焼成等により、塗彩が剥離して、处处にその痕跡をとどめているに過ぎない。胎土、焼成とともに良好で、底部外面に煤煙状炭化物が付着している。尚この土器は復元土器であるが、片口部分は欠陥しているので、明確ではない。第12図64は壺形土器の最大径部分の胴部破片で、内面に強い2次焼成を受け、塗彩が剥げ、器面がザラザラして、随處に塗彩が残存している。その他資料カットした赤色塗彩土器片は30数点を数えた。その中には2箇1組の口縁部外側の縦凸帶状突起が見られた。

#### V 高坏形土器

##### 第2類

###### B群

第11図21は、高坏の台脚底部の破片である。調整は堅固な造りにマッチして丁寧に行われているが、胎土に砂粒を含み、器面がザラザラしている。底部はややゆるく、くの字状を呈している。色調は明るい赤褐色を呈して焼成は普通である。第11図67は高坏の坏頸部から口縁部への破片で、恐らく水平口縁を呈していたものと思われる赤色塗彩土器である。

#### VI 器形不明土器

##### 第1類

第12図51は、全面押捺繩文で、内面は箒研磨が見え、胎土は水簾精選生地で、焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。第12図59・63は、磨消し繩文、変形工字文謂ゆる大洞A'様式の亞種で、内面は箒研磨で、59は胎土、焼成とともに良好で、色調は黄褐色を呈する。63は胎土に砂粒を含み、2次焼成を受け、色調は黄褐色を呈する。

## 第2類

### A群

第12図54は、重ね山形文が2段に区画され、区画間隔内には細縞文が充填されている。内面は蒐研磨され、胎土、焼成とも良好で、色調は黄褐色を呈する。第12図56は、コの字重ね様沈線が描かれている。胎土に砂粒を含み、焼成は良好であるが、2次焼成を受けて、色調は黒褐色を呈する。

### 第3類

第12図60は、櫛描き縦直線文土器で、胎土、焼成とも良好で、色調は黄褐色を呈する。

## Ⅳ 底部

第12図35・36・38・45・49・50は、斜行角度の大きな立ち上がりを見せる底部破片で、壺形土器と思われる。第12図37・39・41・45・46・47・48は、直斜状及び外向、内湾を示す立ち上がりを見せる底部破片で、甕形及び鉢形土器と思われるものである。37・43・47は水簸精選胎土で、後は総て、砂粒を含む胎土である。44・49の焼成不良以外は焼成良好である。37・46は黄褐色を呈し、後は2次焼成を受けて暗褐色を呈する。特に44・49は器面がザラザラしている。底部は総て無文で、網代、木の葉、布目の出土を見ない。49・50は赤色塗彩底部である。径最大は16cm、最少は5.5cmを計測した。

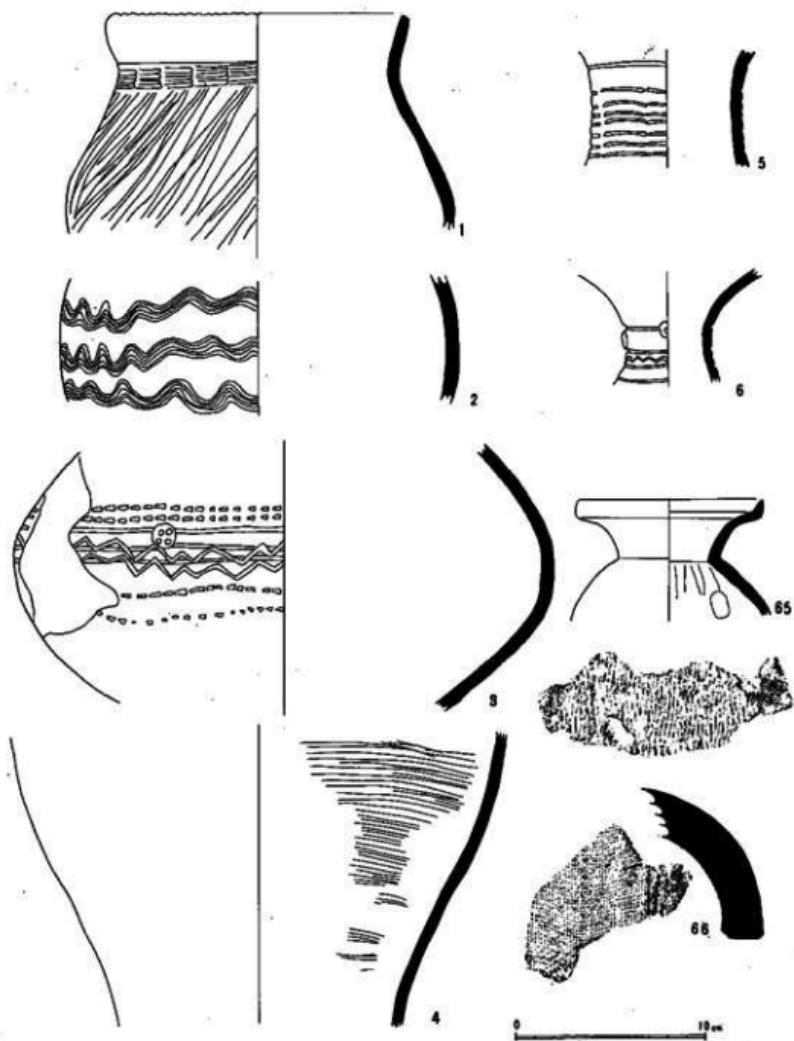
## Ⅴ 土師器

第11図23は、和泉式に比定されると思われる古式土師壺形土器の口縁部破片で、複合口縁端の斜め上ソギで、謂ゆる東海地方のバレス・スタイルの形態を有するものと思われる。胎土に砂粒、石片、石英を含み、焼成は一部に酸素不足煤煙痕を残して、良好で、明るい赤褐色を呈する。貴重な資料であると思われる。

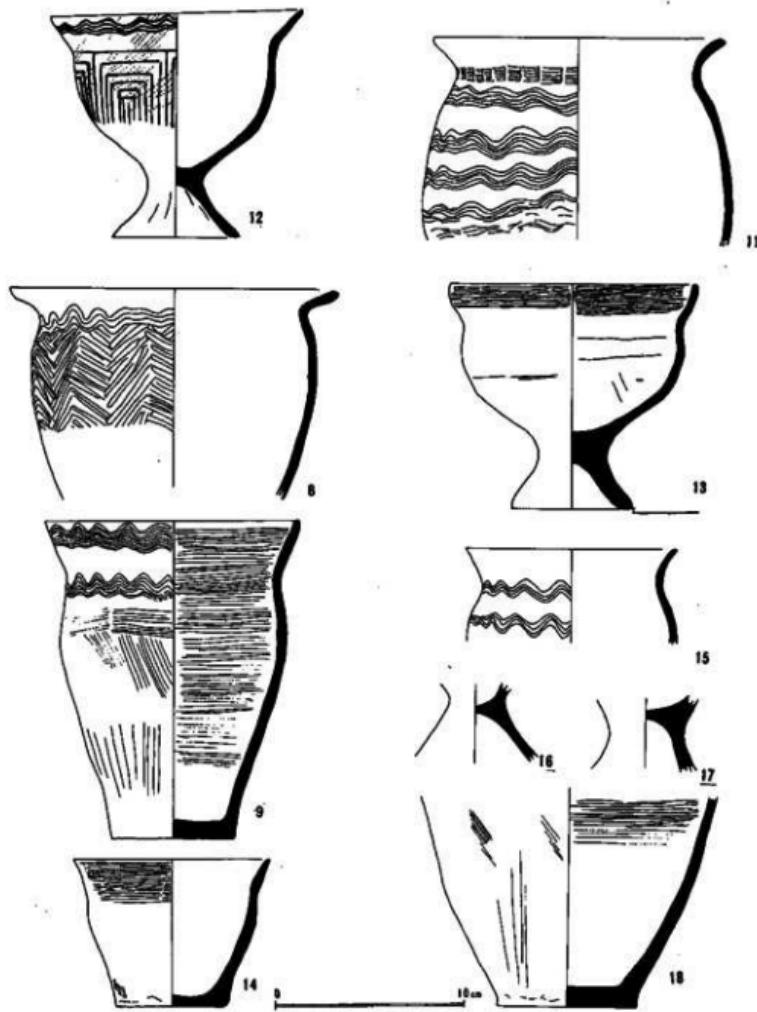
第9図65は、壺形土器の肩から口縁部にかけての破片で第11図23と同時期と想定される。強く張った肩部が特徴で、くの字状に鋭く屈曲した頸部に、やや垂直に立ち上がる二重口縁を有している。口縁内部はしばってあり、整形は不良で指圧痕がある。胎土には小砾を含み、色調は明るい赤褐色である。

## 布目瓦（第9図66）

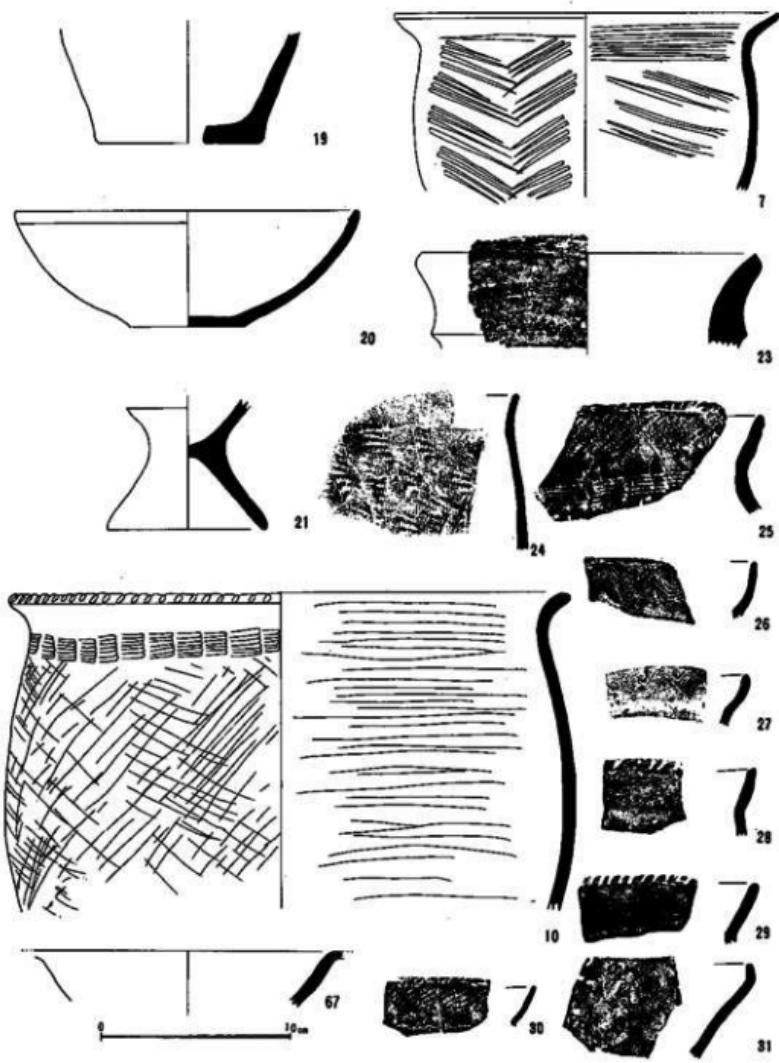
66は、布目男丸瓦で、表面凸面に繩目文、裏面凹面に稍や細かい布目痕が残されている右側面縁部残存の小破片であるが、後部に向って稍や狭まってゆくように思える。恐らく行基式と想定される。成形工程は、半円形の模骨に粘土の付着を防ぐ為に麻の布をかぶせその上に粘土板を巻きつけ、更に繩目を附した、又は繩を巻きつけた板及び棒で叩きしめたものと思われる。縁部成形は2面づくり範化粧調整で、後部は無段であったと考えられる。時期は土師時代のものと思われ、胎土に石



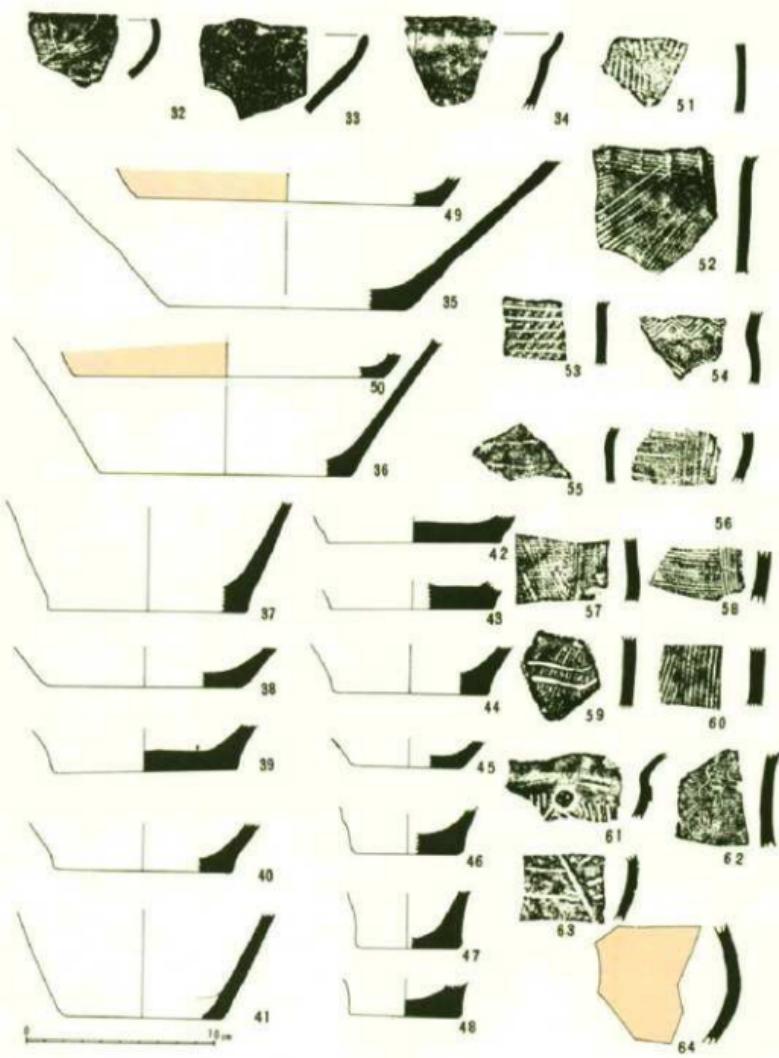
第9図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(1) (1:3)



第10図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(2) (1:3)



第11図 弥生第1号住居址出土遺物拓本実測図(3) (1:3)



第12図 弥生第1号住居址出土遺物拓本実測図(4) (1:3)

英粒、小石を含み、焼成は普通で、色調は赤褐色を呈し、2次焼成を受けている。

以上私達は本遺跡の出土土器の整理及び報告書作成作業を行ったが、冒頭で述べた如く完形、並びに施文レイアウトが判明する土器片が少なく、充分なる解明が出来なかった事は誠に遺憾であった。本文に対する先輩諸氏の適切なるご教授を切にお希いしたい。

参考文献 豊橋市史

(2) 石器 (第13~17図1~53図版7)

本遺跡出土の弥生式石器は、床面、覆土を含めて、総数47点をかぞえ、単独出土とまとまって出土したものとに、2大別される。石器の種類と数は下記の通りである。磨製石斧（ノミ型）1点、（扁平片刃）3点、磨製石鎌（完形、破損を合せて）2点、（未製器）16点、石包丁2点、砥石2点、フレーク21点、台石4点、蔽き石2点である。尚大きさ等、計測値は、別表の通りである。

I 住居址内より単独出土したもの

a 磨製石斧（扁平片刃）(第13図1)

第13図1は、本址の覆土より出土したもので、第1号住居址に付随するものである。刃部の長さは7mmで、自然面が残されている。石質は蛇紋岩で、刃部の角をまるくおとし、刃こぼれはない。

b 磨製石鎌（完形・破損・未成品）(第13図2~7)

2は、ほぼ完成品と思われる。基部、及び穿孔の一部を残して、大半を破損している。表面には斜行研磨調整痕が残され、両面よりの抉りの手法での穿孔が、割れ口、断面より顕著に観察出来る。恐らく仕上げ研磨中のものと思われ、形態も稍や大形磨製石鎌と思われる。3は完成品であるが、尖端部を欠く。割れ口は新しく、発見時に欠けたものかも知れない。形態は長三角形を呈し、基部に浅い抉りの無茎形態で、2.5mmの穿孔は、2と同一手法で、基部近く、稍や片側寄りに貫通されている。石質は2・3ともに硅化された堅敏な砂岩である。

4~7とともに打製成形終了段階のもので、いずれも、長三角形形状を呈している。石質は4・7は、硅岩、5・6は頁岩である。4~7とともに板状に剥離されたものである。

c フレーク (第13図8)

8は、縄文期のサム・スクレイバー的な、両面剥離で、横位にやや弯曲し、剥離面は鋭い。石質はチャートである。

II 一括出土したもの

本址床面、西南部壁面より40cm内側の床面と同レベルの地点から、径約20cm、厚さ5cmに涉って、完形及び未製品の石器が重なり合って検出された。その一括出土石器の総数は38点の多きを数えた。

a 磨製石斧（第13図9～11）

9は、ノミ型で刃部の長さ8mmの完形品である。基部に自然面を残し、1と同様に刃部の角をまるくおとしている。研磨方向は斜行研磨で、石質は粘板岩で、刃こぼれの使用痕が見える。

10は、扁平片刃で、両側面に角度をつける為の斜行研磨り抉りを施こし、その面に使用痕の擦痕が残されている。刃部の長さは1cmで、刃こぼれが見える。石質は堅緻な翡翠質蛇文岩で、9と同様刃部の角をまるくおとしている。11は、長期間使用したものと思われ、側面及び全面隨所に割れ損傷があり、更に擦痕が著しい。刃部の長さも8mmと思えるが、磨耗の為稜線が定かでない。石質は蛇紋岩である。

b 磨製石鎌（未製品）（第13図、第14図13～23）

12は、研磨成形の第1段階にはいったものと思われるもので、両面の尖端部及び側面よりに斜行研磨痕が見える。13～23は打製成形の終った板状剝離片の未製品であり、12～23はこの群の最終仕上段階では長三角形の形態を呈するものと思われる。石質は12は硅岩、13・14・18～21・23は頁岩、15～17は硅質砂岩、22はチャートである。尚23は長さ8cmの長大径なるも、ここでは一応磨製石鎌の範疇に入れたものである。

c 石庖丁（第15図24・25）

24は打製成形が終了し、研磨成形の緒についたものと思われるもので、両面に隨所に斜行研磨が施こされている。ただし、両側面剝離面は鋭い刃部を形成し、この状態でも打製石庖丁として使用可能であるけれども、石庖丁通例の穿孔は見えず、片側面に刃つぶしが行なわれていない。やはり未製品であろう。石質は硅岩である。25は打製成形終了の板状剝離片の未製品である。24と同様両側面剝離面は鋭い刃部を形成している。石質は頁岩である。

d 砥石（第15図26・27）

26は磨り痕の無い5面使用の砥石で、斜行研磨手法をものがたっている。石質は粒度細の砂岩である。27は6面使用で、石質は粒度粗の砂岩で、26・27ともに個々に異なる用途が定まっていたものと思われ、26は仕上げ用かも知れない。

e フレーク（第15～16図28～46）

細片及び資料としての記述に乏しいと思われる所以省略したい。唯ちなみに37と38及び42と43は接合した。石質については、別表を参照されたい。

### III ピット出土のフレイク（第16図47）

上記一括集積石器群端部底面下にピットが検出され、その上層土より両面斜行研磨の頁岩製のフレイクが出土した。

#### IV 製造用石器

他に自然礫を利用しての石器製造・加工に用いられたと思われる製造用具石器6点が出土している。台石及び蔽き石で、床面直上に扁平な広い面を下として、安定した状態で検出された。50~52は一括集積石器群の周辺より出土して居り、48~49は北東部隅部より検出されたものである。

##### a 台石（第17図48~51）

48は、加工台として使用されたものと思われ、使用面が傾斜し、垂直柱状面には摺り磨痕が認められる。石質はグリーンタフ（緑色凝灰岩）である。49は、上部頂点の三角形状の円礫で、3面に摺り磨痕があり、最長擦り磨痕面が12cmを計測した台石で、石質は安山岩である。50は、円形であるが底部の坐りは良く、上面中央部に浅い凹みが認められ、側面の一部垂直面に摺り磨痕があり、尚片面一部に焼痕が残されている。石質は安山岩である。51は、扁平円礫で、安定した坐りに、上部中央部に50と同様の打痕の浅い凹みが残され、一面に摺り磨痕が認められ、横体三角形状の側面基部には縦に数条の擦り凹線が認められる。或いは蔽き石としても利用されたかも知れない。片側側面に強い焼痕が残されている。石質は安山岩である。

##### b 蔽き石（第17図52・53）

52は、片側に蔽き打痕を残しており、握り良い円形状で、横摺り打痕の痕跡と思われるものが認められる。石質は安山岩である。53は、握り抜状を呈し、軽く柔い流紋岩質安山岩で、蔽き石としての最良の条件を具備している。片側底部面に径2.5cm、深さ0.4cmに及ぶ強い蔽打痕が認められる。僅かに焼痕が見られる。

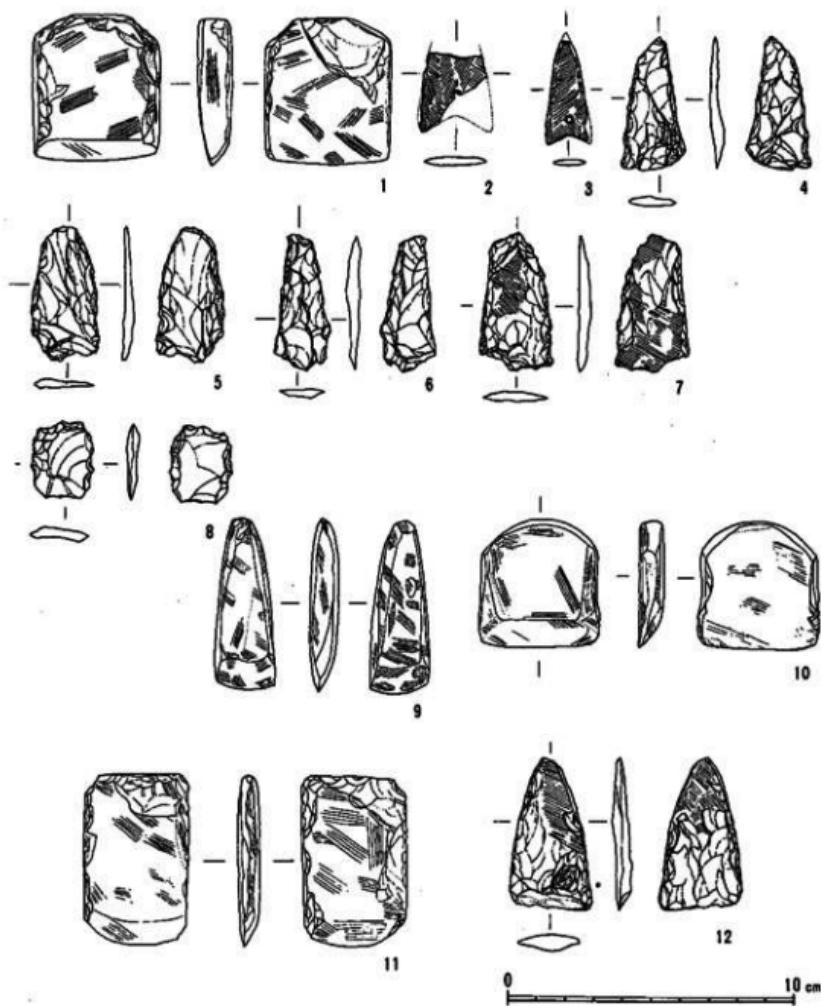
これ等の石器は恐らく小型石器の加工に用いられたものと考えられ、本址、住居址内での石器製造を裏付ける遺物であると思われる。

遺物整理の段階で川久保清仁氏の助言を得た。特に本文に記して御礼を申し上げたい。

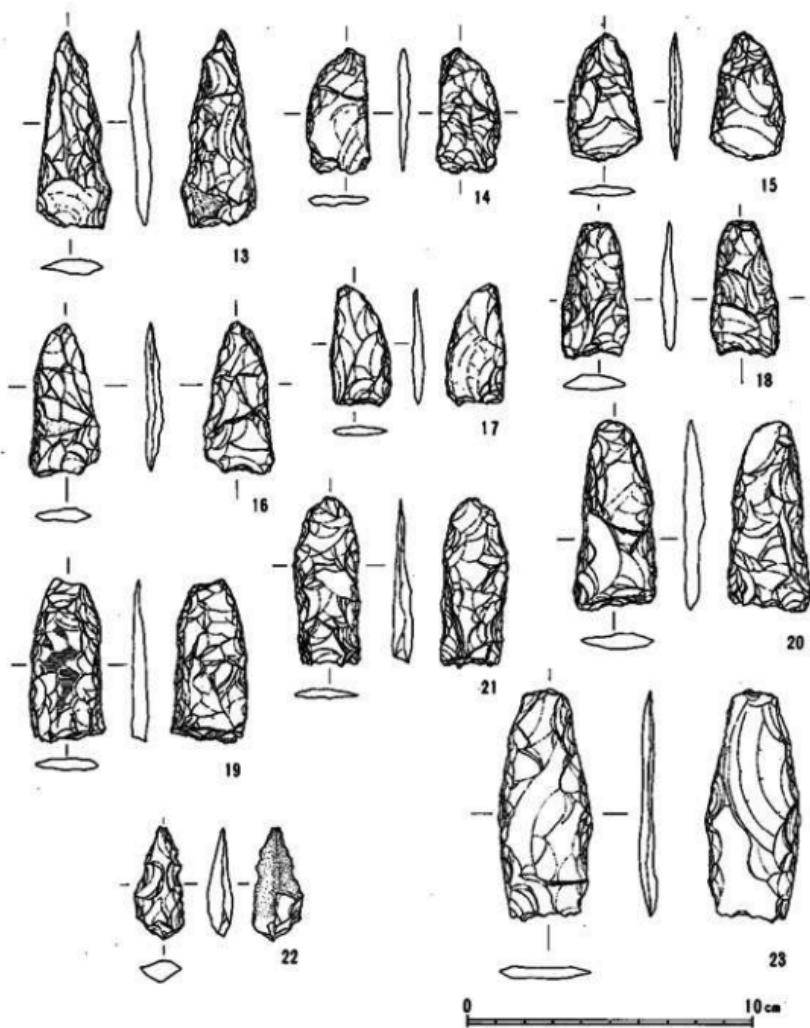
#### （3）一括集積石器群出土状態（第18図・図版5・6）

石器群は、弥生第1号住居址の床面精査中に、西南部壁面より約40cm内側、最大焼土塊西北の縁寄りに発見された。平面は径30cmの括りを持ち、断面は最深部-5cmのゆるやかな「V」の字状を呈し、黒褐色土の落ち込み、即ち、上面は床面より4mm浮き浅い凹みに重なり合って検出されたが、齊一性はみられず、置かれたと云う状態ではなく、なにかいれものに、はいっていたと考えられる様相であった。この事は、本住居址が火災にあったにもかゝわらず石器群に焼痕が認められない事と合い通するものと思われる。尚周辺近く第10図14の手捏土器及び、第17図48~53の台石、蔽き石が検出されているが、これ等も石器群との関連性を想定される状況を呈していた。

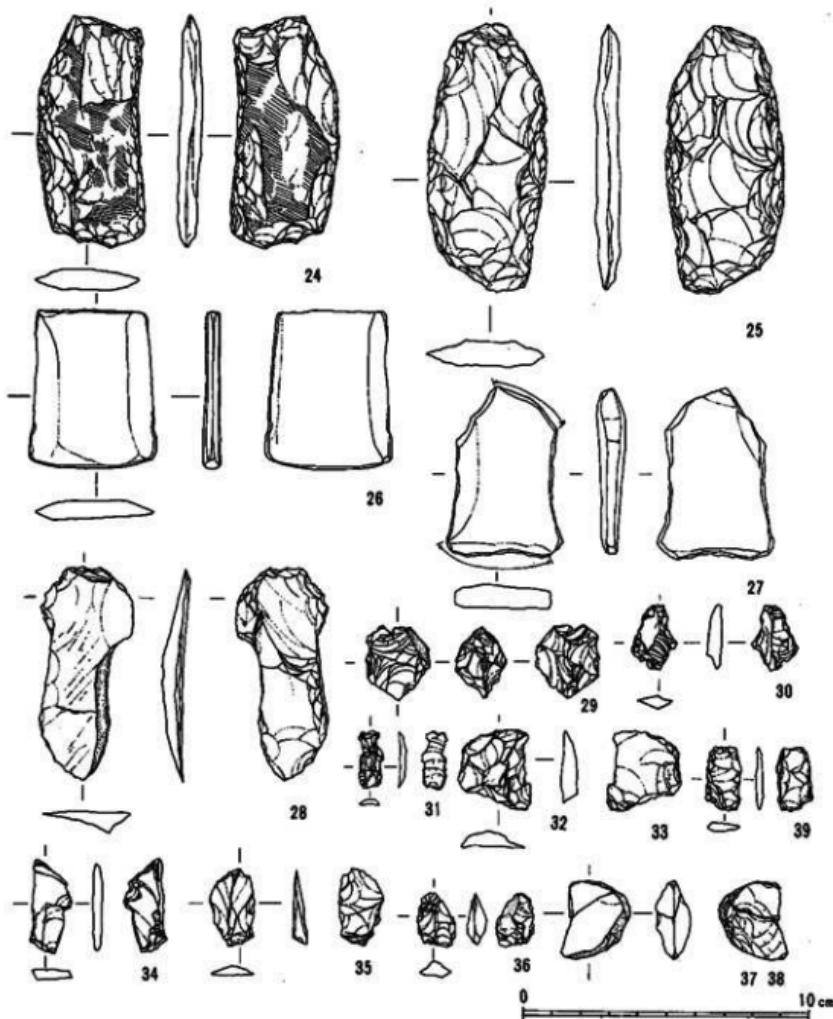
石器群の集積状態は、第13図11の磨製石斧（扁平片刃）石質蛇紋岩を除いては、石庖丁、砥石、磨製石斧等の完形品は上部に集中して、検出されている。完形品以外の打製成形のみの未完成品石器は、フレークを挟みながら混在していたが、上部よりの取り上げ順15~21迄は石礫片が連続



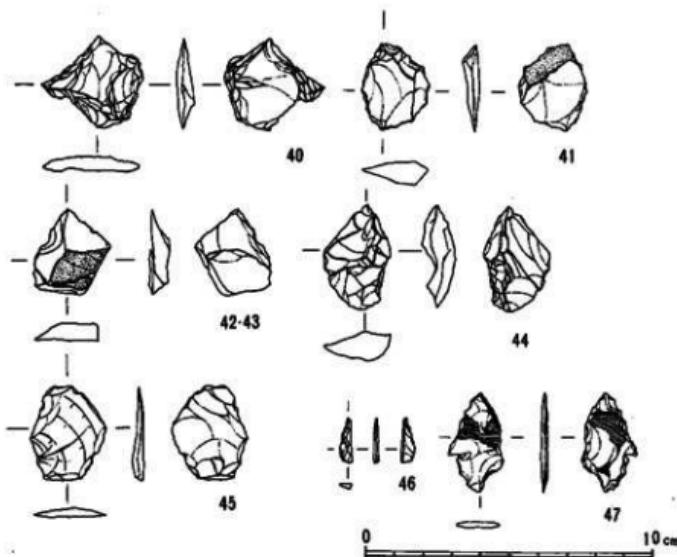
第13図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(5)(1:2)



第14図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(6) (1 : 2)



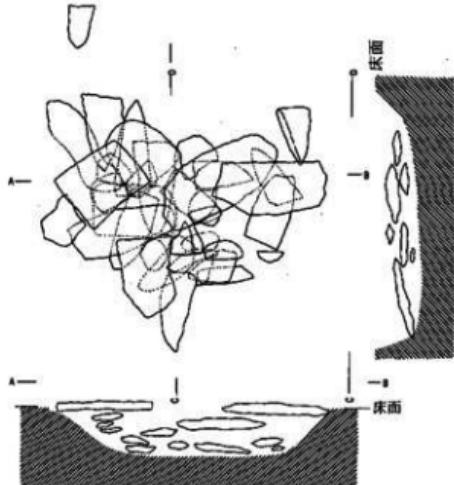
第15図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(7) (1 : 2)



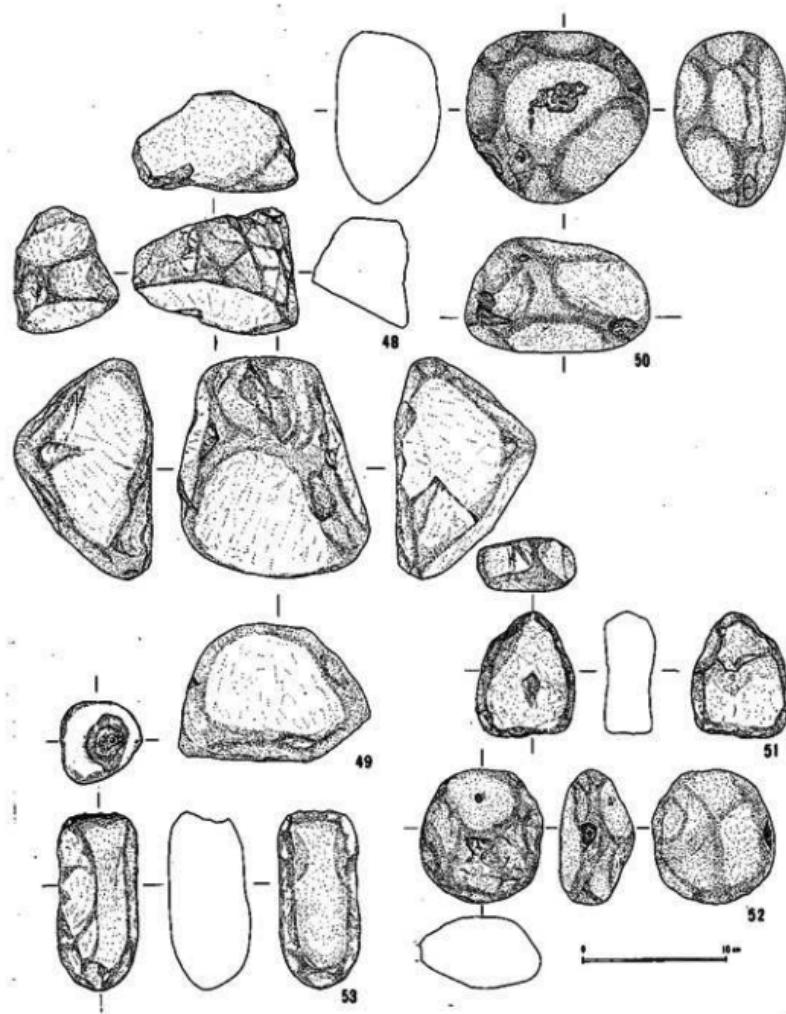
第16図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(8) (1 : 2)

して重なっており、特に15~17は同石質、珪質砂岩が重なって検出された。出土した石器群の総数は37点の多量に涉っているが、内訳は弥生第1号住居址出土土器の項に記述したので、本項では割愛したい。尚石器群の西部縁は、両面に研磨痕が認められるフレーク1点を含有するPに若干かかっていた。

以上本址石器群の実態把握については完全かつ明確ではなかったけれども、松本平の弥生中期末の石器の在り方、生産及び製作工程、初期農業生産に於ける交易即ち生産物の移動による未完成石器の搬入、搬出、社会的分業化による集団内での石器製作を研究する上での貴重な資料の出土を見たものと思われる。



第17図 弥生第1号住居址石器出土状況 (1 : 4)



第18図 弥生第1号住居址出土遺物実測図(9) (1:4)

表2 弥生第1号住居址出土石器一覧

番号	器名	出土状況	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	扁平片刃	単独	蛇文岩	5.00	4.45	1.20	55.92	完
2	石鎌	単独	硅化された砂岩	1.80	3.25	0.25	1.69	完
3	石鎌	単独	硅化された砂岩	3.50	1.45	0.20	1.36	
4	石鎌	単独	硅岩	4.55	2.30	0.50	4.37	
5	石鎌	単独	頁岩	4.55	2.30	0.40	3.98	
6	石鎌	単独	頁岩	4.60	1.90	0.45	3.43	
7	石鎌	単独	硅岩	4.60	2.60	0.40	6.14	
8	フレーク	単独	チャート	2.60	2.15	0.40	3.02	
9	磨製石斧	一括	粘板岩	6.00	2.15	1.05	25.53	完
10	扁平片刃	一括	ヒスイ質蛇文岩	4.40	4.30	0.90	35.57	完
11	扁平片刃	一括	蛇文岩	5.80	3.70	0.80	34.63	完
12	磨製石鎌	一括	硅岩	5.20	2.80	0.60	10.35	
13	磨製石鎌	一括	頁岩	6.60	2.60	0.60	11.41	
14	磨製石鎌	一括	頁岩	4.20	2.10	0.40	4.09	
15	磨製石鎌	一括	硅質砂岩	4.35	2.55	0.40	5.83	
16	磨製石鎌	一括	硅質砂岩	5.05	2.45	0.50	6.87	
17	磨製石鎌	一括	硅質砂岩	4.05	2.05	0.40	4.01	
18	磨製石鎌	一括	頁岩	4.50	2.50	0.55	6.82	
19	磨製石鎌	一括	頁岩	5.50	2.55	0.60	10.93	
20	磨製石鎌	一括	頁岩	6.50	2.85	0.60	12.87	
21	磨製石鎌	一括	頁岩	5.85	2.30	0.65	10.47	
22	磨製石鎌	一括	チャート	3.90	1.80	0.80	5.29	
23	磨製石鎌	一括	頁岩	8.00	3.25	0.55	17.19	
24	石包丁	一括	硅岩	7.80	3.65	0.75	32.55	
25	石包丁	一括	頁岩	9.00	4.10	0.80	42.5	完
26	砥石	一括	砂岩	5.40	4.40	0.65	26.28	
27	砥石	一括	砂岩	5.75	3.95	1.05	31.40	完
28	フレーク	一括	硅岩	7.20	3.20	1.70	17.67	
29	フレーク	一括	黒曜石				6.23	
30	フレーク	一括	黒曜石				1.08	
31	フレーク	一括	黒曜石				0.45	
32	フレーク		黒曜石				0.05	
33	フレーク		チャート				3.90	
34	フレーク		チャート				1.95	
35	フレーク		チャート				1.87	
36	フレーク		チャート				1.57	
37	フレーク		頁岩				5.25	38と接合
38	フレーク		頁岩				1.66	37と接合
39	フレーク	一括	頁岩				0.96	
40	フレーク	一括	硅岩				5.13	
41	フレーク	一括	硅岩				4.05	
42	フレーク	一括	粘板岩				2.69	43と接合
43	フレーク	一括	粘板岩				3.23	42と接合
44	フレーク	一括	硅岩				6.47	
45	フレーク	一括	頁岩				2.75	
46	フレーク	一括	頁岩				0.19	
47	フレーク	ピット	頁岩				1.47	

番号	器名	出土状況	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
48	台石	単独	グリントフ	11.2	8.6	6.9	735	
49	台石	単独	安山岩	15.1	13	9.7	2325	
50	台石	単独	安山岩	12.8	11.7	70	1410	
51	台石	単独	安山岩	8.5	6.8	3.2	315	
52	蔽石	単独	安山岩	9.1	8.4	5.1	495	
53	蔽石	単独	安山岩	12.3	5.3	5.2	510	

(三村豊、山越正義、浅輪俊行、白居直之、丸山正一郎)

## 2 第2号住居址 (第19図~第21図・図版8)

### 遺構

本址は発掘地域の東端近くで、5-20を中心とした10グリットで、河川の氾濫による堆積物のため遺構の全貌を知ることはできなかったが、部分的には焼土の確認もあったため遺物の多量に出土したレベルを第2号住居址としてとりあげた。

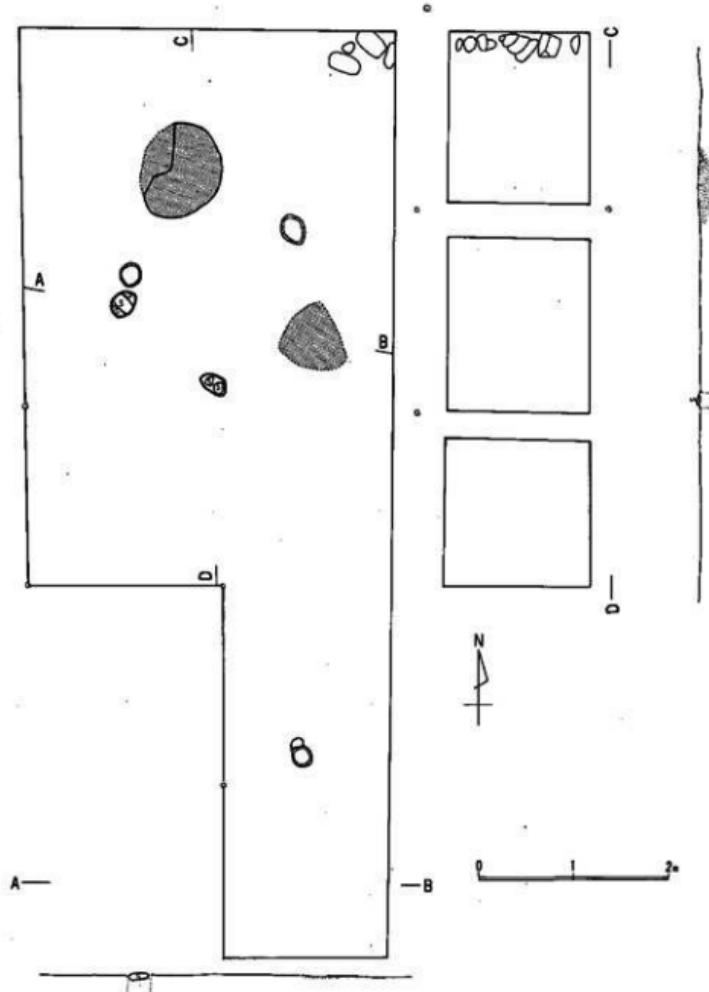
本址は地表より約1m下部にあり、地層は上より表土(黄土)10cm、礫層15cm、砂礫層28cm、砂層20cmの各厚さをもち、以下黒褐色の粘土っぽい土層に至っている。第3層までは非常にかたく遺物も少なかったが、第4層の砂層に至って土師器、壺、高壺等が単独出土した。土師器は特に南寄りグリットから多く出土した。その出土レベルがほとんど同一であり、このレベルで一つの生活面があったのではないかと思われたが、遺構の検出はできなかった。

弥生時代の遺物は砂層に続く黒褐色粘土層より出土し、このレベルにおいて、焼土、炭化物、ビット等が検出されているので、第2号住居址床面と推定した。床面は色調、堅さ等で識別を試みたが、上記土層のため判明しがたく、結局その輪郭を把握できなかった。炭化物の範囲は50×60cmの三角形状にわたり、その厚さは5mmにもみたなかった。-95cmよりは大甕が三つに重って出土し、他に小形土器片等は同レベル又はその上部より出土した。ビットは4ヶ所あったが、そのうち30×20、30×18cmの二つのビットには礫が入っており、先のビットの礫の下からは別項で述べているイヌドクサが発見された。またこのビットの北東1mあまりの位置には50cmの円形で、深さ10cmのレンズ状の焼土があったが河川の氾濫による砂だまりに続いて、北側は砂利層が深く落ちこんでいた。北東部の第二層下部には10~30cm大の礫が東に浅くなりながら続いており、あたかも建造物等の基壇のようにみえたが、上面礫層の混乱もあるため確認はできなかった。

### 遺物

出土遺物は5-19-20から多く出土し、そのほとんどが弥生式土器である。しかし完形土器はな

く、二三のものを除けば小破片である。時期的には中期後半の百瀬式に類似するものであり、完形のものもないが、施文によって分類記述したい。なお図版9の上段が本址出土の遺物でナンバーは実測、拓本図のナンバーと同一である。



第19図　弥生第2号住居址実測図（1：60）

(1) 土器 (第20図1~31)

a 条痕文のあるもの (第20図1~5)

1は5本の櫛状施文具で綾杉状の条痕文を描いた小型の壺胴部で、内外面とも灰褐色で、内面は横なでの蒐磨きを行い、下部はやや黒ずんでいる。2は地文にうすい条痕文に太目の粗い条痕を深くひいている。色調は茶褐色で、外面は一部黒化している。3は壺の頸部近くで、上端に譲状文をひきその下は条痕文である。茶褐色で外面黒ずんでいる。4は綾杉状の条痕文で左側を先に引き、統いて右上より引き下している。内面横ナデ痕有り。壺胴部と思われる。内外とも色調は黒ずんだ茶褐色である。5は内弯する鉢型に近い器形で細い櫛状施文具で不統一に条痕を引いているもので、器壁は二枚をはり合せたかのように薄くはがれている。色調は内外とも薄い茶色である。胎土はいずれも細かく焼成もよい。

b 波状文のあるもの (第20図6~9)

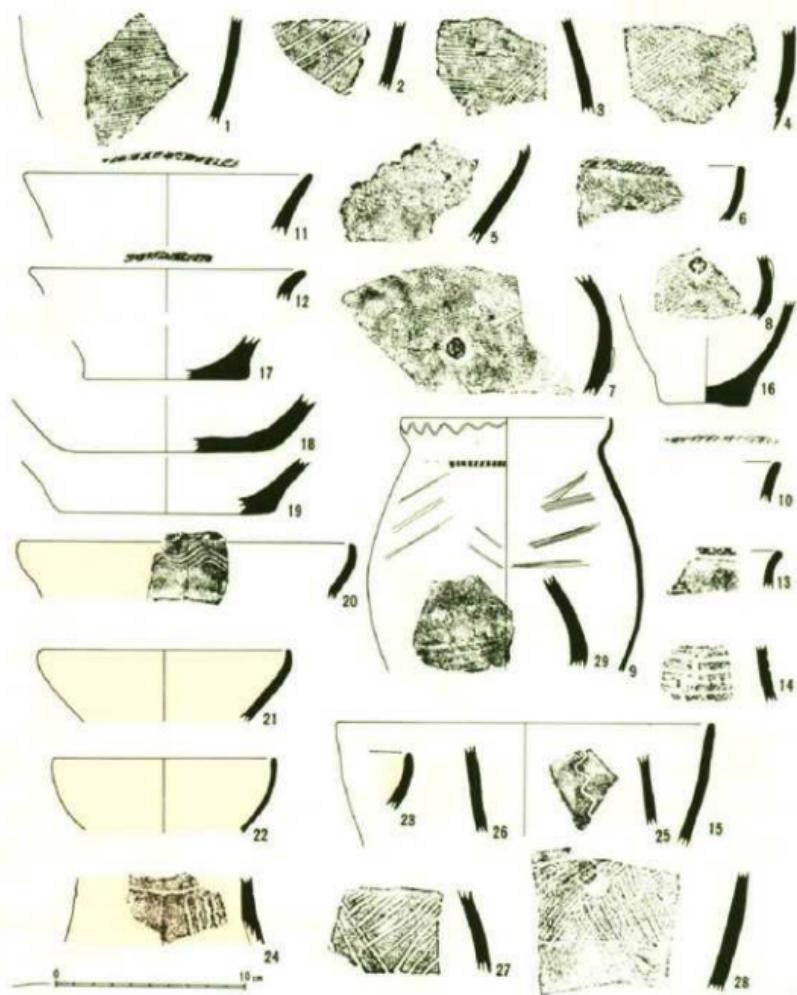
6は口径約24cmの壺形土器の口縁部である。口唇には外側に繩文を施し、その下部に5本の櫛状施文具で波状文を左から右へ引きまわしている。色調は灰褐色である。7・8は共に波状文の壺型土器の胴部でボタン状貼付文がある。7は直径推定17cmで6本の櫛状施文具で1~2cm幅巾の波状を描き、下部は磨消している。ボタン状貼付文は内弯する曲線に貼付けられ、長径1.1cmで7点の刺突がある。内部は3mm程度のヘラ巾で横に細かい調整痕がびっしりとついている。8も7と同様施文でボタン状貼付文は6穴であるが、波状のピッチはやや小さく、器形もやや小振りである。共に灰茶色の柔らかな焼成である。9は本址で最大の壺型土器で口径19.2cm、推定高さ31cmであるが、底部は接合できない。つよく内弯する口縁に波状文をめぐらせ、なで肩に二連の刺突文を施し、頸部以下は粗い条痕文を施している。色調は明るい茶色で柔らかな感じである。

c 繩文の施されたもの (第20図10~14)

10~13はいずれも口唇に繩文を施したもので、口唇以下は無文である。器形は壺型で10は推定口径22cm、11は15.4cm、12は14.6cmである。12以外は茶色で、12は黒味を帯びた茶色である。胎土焼成はいずれもよい。13は口唇がめくれて小さな段になり、無文の下は櫛目文が横走するらしい。推定口径24cmの壺らしい。色調は赤褐色、胎土は良く、焼成はやわらかである。14は長頸壺の頸部で推定径9.8cmで、地文の繩文の上に3mm太さの施文具で、押し引きと沈線をめぐらせてている。外面赤褐色、内面灰黑色のやや柔らかな感じの土器である。

d 無文のもの (第20図15~19)

15は口径20cm、やや深い碗型を呈する口縁部で無文である。外面は横ナデが強く残り、凹凸がはげしい。外面灰茶色、内面明るい灰茶色で胎土焼成とともによい。16は壺型土器の底部で底径4.8cmで無文である。色調は内面赤褐色、外面は黄茶色に部分的に黒化している。17~19はいずれも壺の底部で17と19はやや底でくびれ、18はゆっくりと立ち上っている。いずれも底は無文である。



第20図　弥生第2号住居址出土遺物拓本実測図(1:3)  
(9のみ約1/5)

e 朱彩を施したもの (第20・21図20-31)

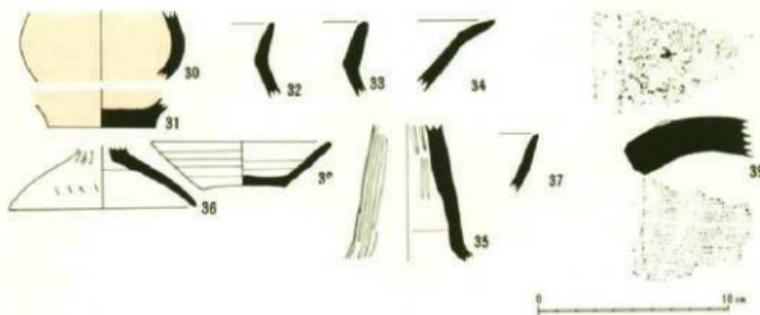
20は口唇に粗い刻み目をもち、口縁に5条の櫛状施文具でゆったりとした波状を描き、頸部には廉状文がめぐらしい。器形は口径18cm臺型土器である。胎土は僅かに砂粒を含み、焼成は良い。色調は灰茶色で波状沈線内に朱が残っている。21は外面は朱彩がはげているが、内面は朱彩の残る径13.5cmの碗型土器である。内面に二条の細い沈線が残る。これらの胎土はいづれも精選されており焼成はよい。22も碗型の口径12cmの無文土器で、朱彩は朱よりも褐色を呈する。薄手の堅緻で内面にヨコナデが残る。内外とも下部は黒色になっている。23も碗型で内弯する朱彩の美しい口縁部で、推定口径20cmである。24は壺の頸部と思われる部分で現径19.5cmである。二本の横帶する沈線の下は細かい間隔で蛇行する沈線を垂下している。内外に朱彩痕が残り、内面は白茶、外面は茶色の胎土はやや砂粒が混じる。25は外面のみ朱彩の縦に沈線と波状文を引いている。内面には斜行する調整痕がある。器形は小破片のため定かでない。26は壺の胴部近くらしく部分的に縦文に横走する沈線を数条めぐらせている。推定径28cm、内外とも剥離部分が多い。27は壺の頸部より胴部に至る部分と思われるが、斜行する太い沈線に直交するように沈線を施している。胎土焼成ともよい。28は胴部下半と思われるが、外面に淡く朱彩を施している。無文の中に巾4cm余りの施文部分を設け、その中は三角形を組み合せたように沈線を施している。内面は暗赤褐色で輪積手法を残す。胎土には微砂粒を含み焼成はややよわい。29は壺胴部下半で推定径26.6cm、内外とも縦横にヘラナでの痕を残す。朱彩は外面のみで、内面は暗赤褐色で部分的に円形に剥離している。30は8.5cmの最大径をもつ小壺胴部で、内外に朱彩が施されている。胎土焼成ともよい。31は無文の底部で、底径5.6cmで内外朱彩されているが、外面の朱に対して、内面はにぶい赤褐色である。底面0.6cm上で外方につよく広がる。胎土は緻密で焼成もよい。

f 土師器 (第21図32~38)

32~34共に碗状の器形を呈すると思われるものの口縁部で、34は大きく外反するもので、32は径約24cm、33は約22cmを測る。共に胎土焼成がよく緻密であり、よくヘラみがきがなされている。35は高壺胴部で、緻密な胎土に内外共にヘラみがきがなされ、坏部に接続される上部は紋ってある。明るい赤褐色を呈する。36は高壺底部で、底径10cmである。35の高壺とはかなり形態も異なり、小型である。内外ヘラみがきの明茶色を呈する。これらはいづれも古式に属するものである。37はえぼし状の斐の口縁部で、櫛目文である。38は口径9.6cmの薄い壺で外面はロクロ整形痕を四段残している。底は糾切で胎土焼成はやわらかく、明茶赤色を呈する。

G 布目瓦 (第21図39)

39は布目瓦で厚さは1.8cm、端は上下とも稜をとり、内面の布目は1cmあたり6本と粗い。上面縄目は器形と平行してつけられ、一部に土が焼けついている。胎土は白散粒が入っており、色調は紫茶、内面茶褐色、断面には細かい穴がある。



第21図 弥生第2号住居址、土師第2号住居址出土遺物拓本実測図2) (1:3)

## 第2節 土師時代の遺構と遺物

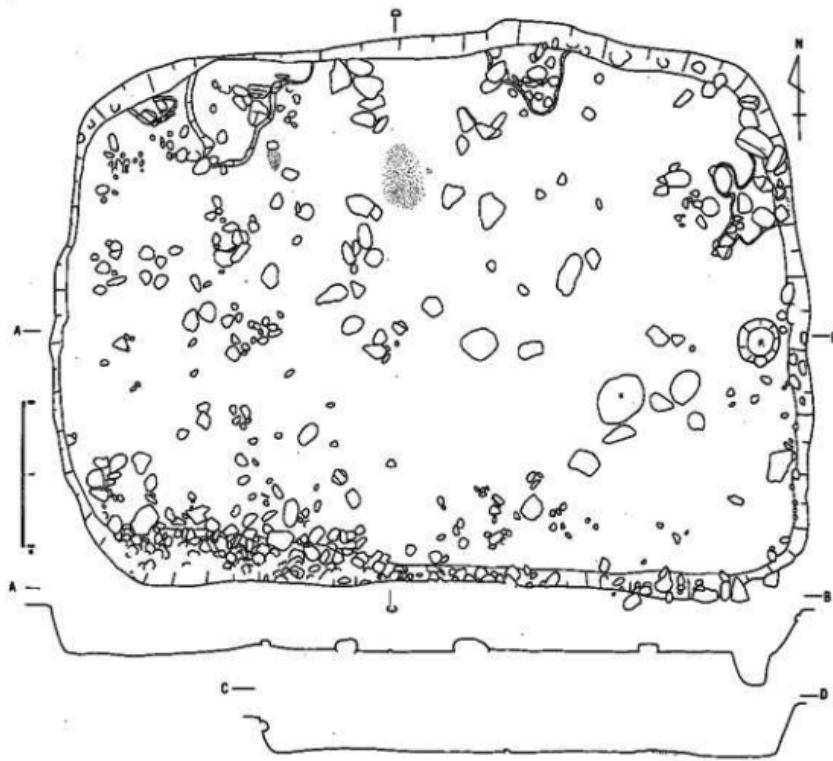
### (1) 第1号住居址 (第22~29図、図版10~13)

#### 遺構

1号住居址は、発掘調査に先立ち設定された20~23各トレンチの、各5~7区にわたり所属し検出される。検出にいたるまでの過程は、一口にいって容易なものではなく、技術的な面で苦労を伴なった。と言うのは、本址の壁穴を形成する周壁が、同じ黒色土内の構築であったためである。結果的には方形の壁穴プランを示した本址も、当初はその上面輪郭線をあらい出すのに、1日の中でも朝方の陽光の弱い、地に水気を帯びている時間帯を選んで精査され、微妙な色合いの相違をさぐりあてながらの検出であった。

本址検出までの過程で、旧松本高等学校の建造物施設の礎石のはしりとみられるものが、20~5の-15cm面に出現した。これは巾約45cm前後で、東西方向に直線状に長くのびる見通しであった。又、22~6の北面部より、同7区にかけても、旧松本高等学校の建造物施設の基礎と思われる基石(集石)があり、その堆積は約12cm前後を示していた。これらの列石、礎石等の用材は、いずれも角のとれた自然石で、23×14×15~18×16×8cm程度のものが使用されていた。上記の如く本址の上面には、一部、近代の施設物の礎石が重複し、僅かながらの破壊を及ぼしていた。

本址各区のベルトセクションによれば、20~22-5・6では、第1層、0~-27~-30cm、埋立土、礎を含み固い。第2層、-27~-30~-47cm、暗褐色土、小礎含有、遺物含有やや多し。以上で床面に達するが、覆土中及び床面上より、多量の遺物が検出される。主なる遺物として、土師器、須恵器、灰釉陶器の各破片が量的に多く、特殊なものとして、釘子、布目瓦、砥石、釘等があげられる。



第22図 土師第1号住居址実測図 (1 : 80)

住居址は、西壁部がやや明確さを欠くくらいがあったが、発掘所見では、ほぼその輪郭線をあらいで出すことが可能となる。竪穴の長方形プランを示す規模は、東西方向約500cm、南北方向約415cmであり、壁高は、南壁約24.5cm、西壁約32cm、北壁約36cm、東壁約32cmであった。床面は平坦で固い仕上げであり、東壁中央部に接して、ピットが1箇所存在する。このピットは円形を示し、その上面径は39.2cm、下面径は29.2cmとなり、深さは21cmであった。又、床面に、10数個の河原石が散在したが、その石の大きさは、21×28~42×56cm程度であった。これらの石が何に使われたかは不明である。又、竪は東壁中央やや北寄りにあり、破壊されていて全貌を知ることはできなかったが、河原石を利用しており、焚き口に僅かに焼土があり、両側と奥に焼けた石があった。

#### 遺物

##### (1)土器 (第23図1~24、第24図25~48)

1号住居址出土遺物の中、土器類は、ぼう大な量に及んだ。それらは土師器、須恵器、灰釉陶器

類の破片が殆んどで、完形を示すものは何故か皆無であった。他に砥石、釧子、釘、瓦等若干の遺物があげられるが、それらは、床面や竈、焼土内より出土したものと、址内上層の覆土中より出土したものとに大別できる。報告にあたっては、以下両者を区分して、明らかにしたい。

### 第1号住居址床面出土遺物（第23図1～24、第24図25～48、第29図130）

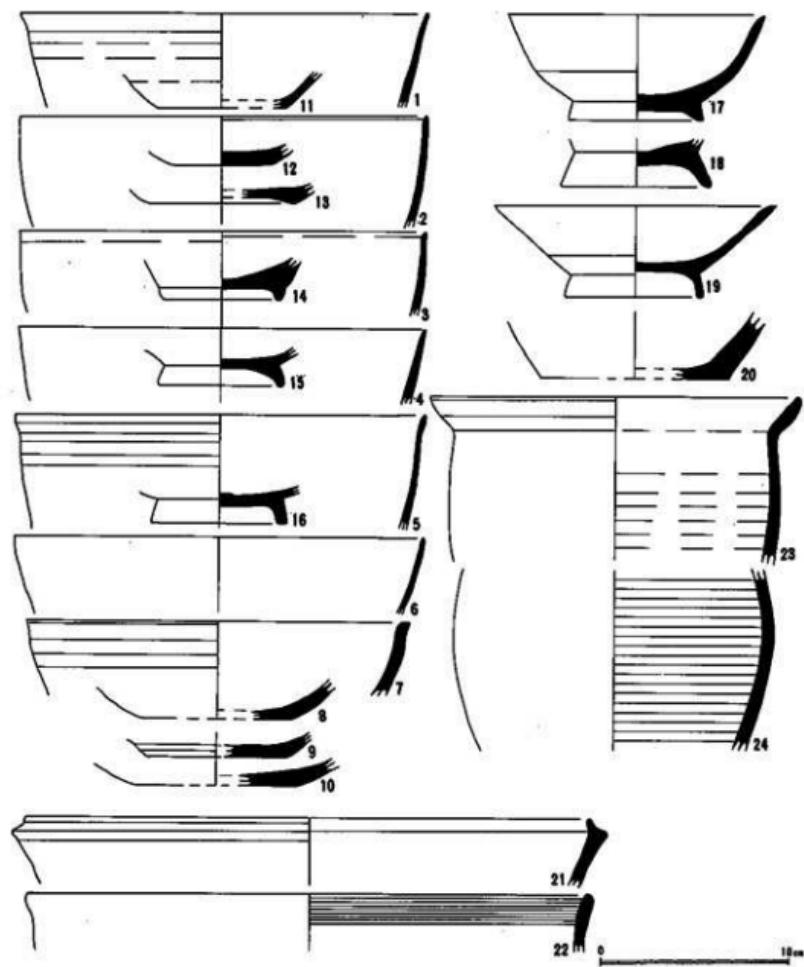
1号住居址床面出土遺物で、活用された資料は1～48、130の、いずれも土器類である。この中、焼土内出土の23、竈内出土の24～28が含まれている。土器は土師器、須恵器、灰釉陶器が挙げられるが、記述にあたっては種類別にこれを取りあげ、更に器種別に細分して、その特徴等にふれてみたい。

#### 土師器（第23、24図1～27、36～44、第29図130）

土師器は、壺、碗、甕、鉢、壺、鋤釜等々の各器種があげられる。

1. 壺類は1～12、26が含まれる。この中1～7は口縁部破片で、6、7を除きいずれも内面黒色（以下、内黒という）土器であり、口径は21.6cmを数える。1は器壁が薄いが焼成よく、外面は茶褐色となり、口縁で一旦縮まった後、その端部は外反する。外面にはロクロ整形痕が残る。2、3は口縁がやや内凹気味を示し、胴部にゆるやかなまるみがある。4は底部より口唇に向い器の立ちあがりが直行する器形を示し、5は口縁部で集約した後、ゆるやかに外反しながら立ち上る。6～7は共に内外褐色で、6は口径21.6cm、器厚はうすく、焼成はよい。7は口径20.2cmを数え、やや厚手の器厚をしており、口唇上に0.5cmの面取りがある。8～12は壺の底部であるが、その中、8、9は内黒土器であり、底部に糸切りの跡がみられる。8は底径8cm、9は7.2cmを数え、共に底部より外傾の度を強めて器は開く。10～12は内外褐色であり、10は底径8.2cmで器面調整はよく、立ちあがりをゆるくして開く。11、12は、共に糸切の跡を底部に残しており、11は器壁うすく、底径6.6cmであるが、器の立ちあがりはやや急である。12はやや厚い底部であるが、底径は5.6cmとなり、その立ち上がりからしても、小形な土器を感じさせる。26は、竈内出土の内黒の壺の口縁部破片であり、口径は21.4cmとなる。2、3とはほぼ器形を同じくするものである。

2. 瓶形を示す土器13～19をまとめた。いずれも高台を付し、17、19は、図上復元可能の土器となる。この中13～15、17は内黒土器16は内外黒色土器、18、19は内外褐色土器である。又、13～16、19までは、糸切後の付高台手法がとられる。13は、その底部に僅かな盛り上がりをみせる巾広い高台が付され、底径は7.6cm。14は高台の外側下端部が削られて細まり、底径は6.6cmで器は急な立ち上がりを示す。15～19は高台が長くなり、その端部がいずれも外へ張り出して、ふんばる形となる。15は高台の下端部が丸みをもち、底径は6.6cm。16は、高台の下端当面が台形をなし、腰が横に開く器形を示し、底径は7.2cmでゆきとどいた仕上げがなされている。17は図上復元により、その全体をうかがい知る資料である。口径は14cm、底径7.2cm、高さ5.6cmを記録する内黒土器であ



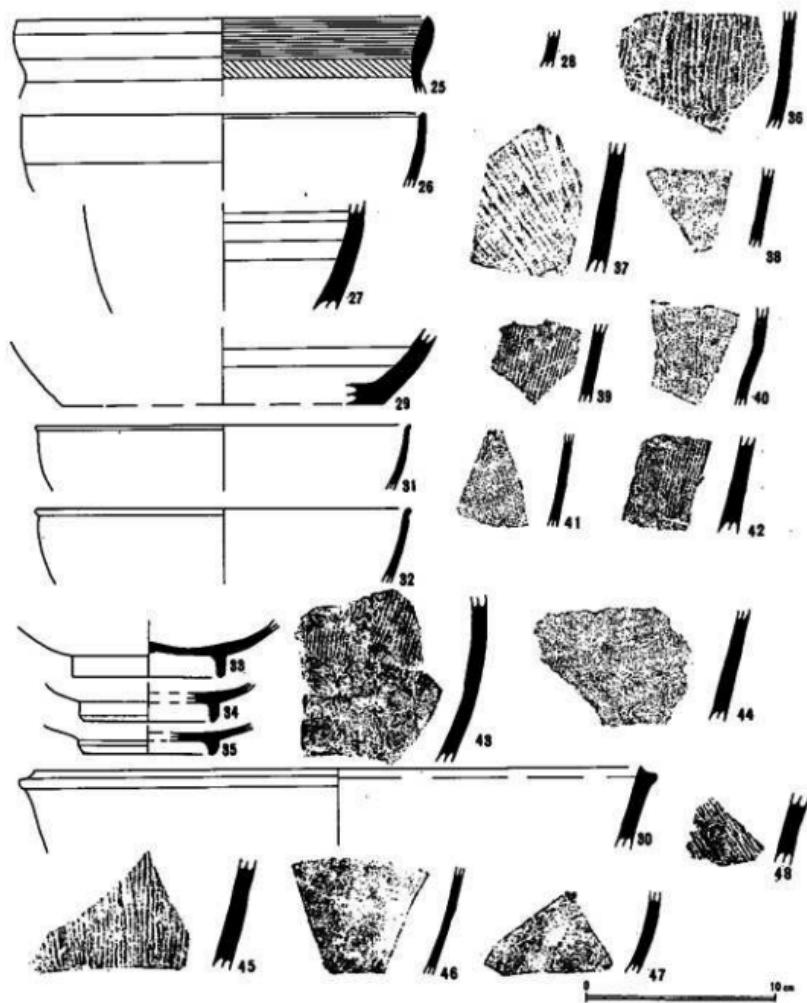
第23図 土師第1号住居址出土遺物実測図(1) (1:3)

る。高台はその下部がやや張り出す形となり、底部の器肉厚く、安定感がある。高台内はヘラにより調整しているが、仕上げはあまり良くない。胴部にふくらみがあり、口縁は無理のないゆるやかな仕上げとなっている。内部の底には、黒地に更に暗文があるが、中央部には直径1.3cm程の小さな円形をおき、これを中心として整然としない。0.4cm巾程度の放射線が日照形に12本、雰然とひかれている。18は、高台の脚部が約2cmも長くなる特徴があり、内外共ヘラ調整している。底径は8.8cmとやや大きいが、立ちあがりは急な気配をみせる。19は内外褐色で、やはり図上復元による完形を示す。口径は15cm、底径は7.4cm、高さ4.8cmを数えている。この土器は17とは趣を大分異にし、全体から受ける感じは対照的である。高台は外へ張り出するものの、細長い方形を呈しており、又、器の立ち上がりは、高台際より口縁に向って、よどみなく直線状に張り出し開口している。17がおだやかなら、19は、きつい感じである。

3. 土師器の甕、鉢、壺、銚釜として、20~25、27、36~44、130をまとめた。20は砂粒を含む甕の底部で、底径は10cmと小さく、外面褐色、内面は暗黒色となる。21は、鉢形土器の口縁部破片である。内外褐色で焼成はよく、胎土に砂粒を含む。口唇部のつくりに特徴があり、底部に向い直行する器形を示し、口径は30cmである。22は甕の口縁部破片で、口径は30cmと大形である。内外褐色で器の内側の口唇直下には、整った櫛目文が横走する。23は、1号住居址の焼土内出土の、唯一の活用土器である。口縁より胴部にいたる甕の破片で、口径は19.6cmである。頸部で締った後、そのまま底部へさがる器形で、器の内面にはロクロ痕が残る。24は甕の胴部破片である。胴部の最大巾は17cmで中位を示している。25は口径21.8cmの、やや大形となる甕の口縁部破片である。外器面の短かい頸部には、やや巾広い凹帯がめぐり、内面には横走あるいは斜行する櫛目文が残る。27は小形壺形土器の、底部に近い破片と思われる。器厚は0.8~1cmでやや厚く、内黒の内面にロクロ痕が走る。36~44は、いずれも土師器甕の胴部にあたる破片である。縦方向の条痕及至は櫛目状の沈線が施される。36~39、44は内外が茶褐色となり、焼成はよい。36は器厚0.5cm、37は0.9cmで、共に条痕が不揃いで太い。38~41は器厚が0.5cmと薄くなり、それぞれ櫛目状の整った沈線が、外器面に残される。40、41は内外共暗黒色を呈する。42~44は器厚0.8cm前後を示し、内面は暗黒色、外面は褐色となる。42、43は縦方向の櫛目文となるが、44は横位の櫛目文と斜行する短かい不揃な沈線が交叉する。又、43の内壁には炭化した食物の滓が附着している。130は銚釜で内外黄褐色となり、覆土より出土した129とは趣を異にし、口径26cmで口縁は底部より直線的に立ち上がる。銚上の巾も長くのび、胴部はやや深くなるのではないかと思われる。内外にきめ細かなロクロ調整のはしづが残る。銚の部分は129より太く大形となりどっしりしている。

#### 須恵器（第24図28~30、45~48）

須恵器は28~30、45~48が活用資料である。いずれも青灰色を呈しており、甕、壺の類の破片である。28、45、48は大形甕の胴部破片である。28は器厚0.5cmで整った格子目状の叩目文を表に残



第24図 土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(2)(1:3)

しており、45は条線状の叩目が縦方向に走るが、叩きしめの木目が長く使われたためか、条線に直交する木目がうすくつけられる。48の表にも縦方向の叩きしめによる条痕が残る。29は壺の底部破片とみられるもので、底径は17cmである。器厚は0.8~1cmと厚く、外面に焼成時の灰かぶりの跡をのこす。30は鉢形土器の口縁部及至は広口の大形壺の口縁部破片と思われるもので、口唇部のつくりに特徴があり、21の土師器鉢と同様の技法がうかがえる。器の内外共調整をよくしている。46、47は壺の胴部破片と思われるものである。46は器厚0.4cmで、内面は青灰色をとるもの、外面には二度焼の火熱を受けて赤褐色となっている。47は器厚0.5cm、内外青灰色で器の外面に斜行する短かい叩目痕が浅く残る。

#### 灰釉陶器（第24図31~35）

床面出土の灰釉陶器は31~35が採用される。いずれも壺形を示し灰白色を呈する。31、32は共に口縁部破片で、口径は19.6cm、器厚0.3cmとうす手づくりである。胴部にやわらかな丸みをもつが、口唇外側直下をくぼませて、特徴ある縁どりを残す。内面に白釉がかけられる。33~35は壺の底部で、いずれもヘラ切り後の付高台となっている。然し高台のつくりは、それぞれ垂直におりるもの、その断面は相異し、33は細長く方形をなし、底径8cm。34は高台外側の下部が斜めにそがれ、35は更に外側面がけずられて半月形を呈し、その先端が細まる。共に底径7.4cmで、高台際より器は横に張り出しの度を強めて立ち上がる。

#### 第1号住居址覆土内出土遺物（第25~28図1~117, 119, 120, 第29図121~129, 131~133）

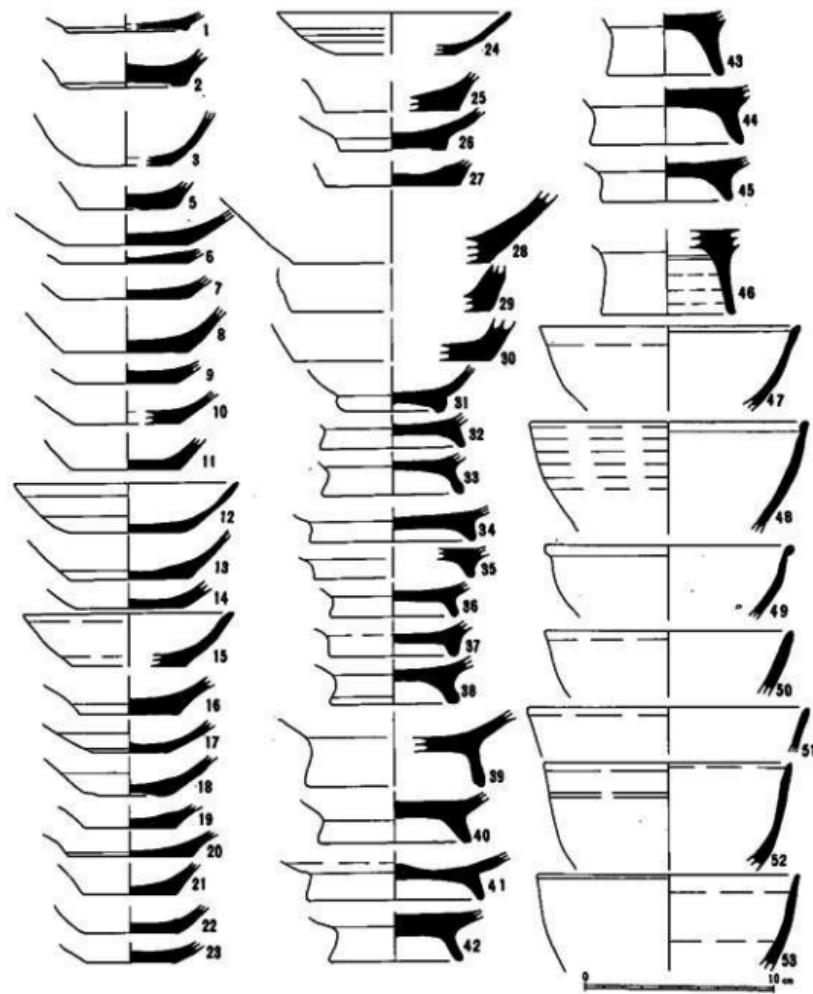
1号住居址覆土内出土遺物は多量に及んだが、それらの中、報告書に活用された資料は計134点に及ぶ。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器の各破片が主体をしめ、その他に釣子1、布目瓦1、砥石1、鉄釘4、鉄片2が挙げられる。これらにつき一連番号を附し、種別に分類整理して、以下、報告にかえたい。

#### 土師器（第25, 26図1~63, 第26図65, 66, 第29図129, 131, 132）

土師器は1~63・65・66・129・131・132が該当する。この中、壺類が最も多く大部分をしめ、甌鉢、鉢釜が僅かに存在する。

1. 壺類1~27・31~55・131・132を取扱う。完形品はなく、図上復元により、僅かに全体の器形を察知し得るものもあるが、すべて破片である。これらは口縁部、底部を示すものばかりであり、内外褐色となるもの、いわゆる内黒となるもの、平底や高台となるものなどあり、器形、色調等に重点をおいて分類し、その特徴など明らかにしたい。

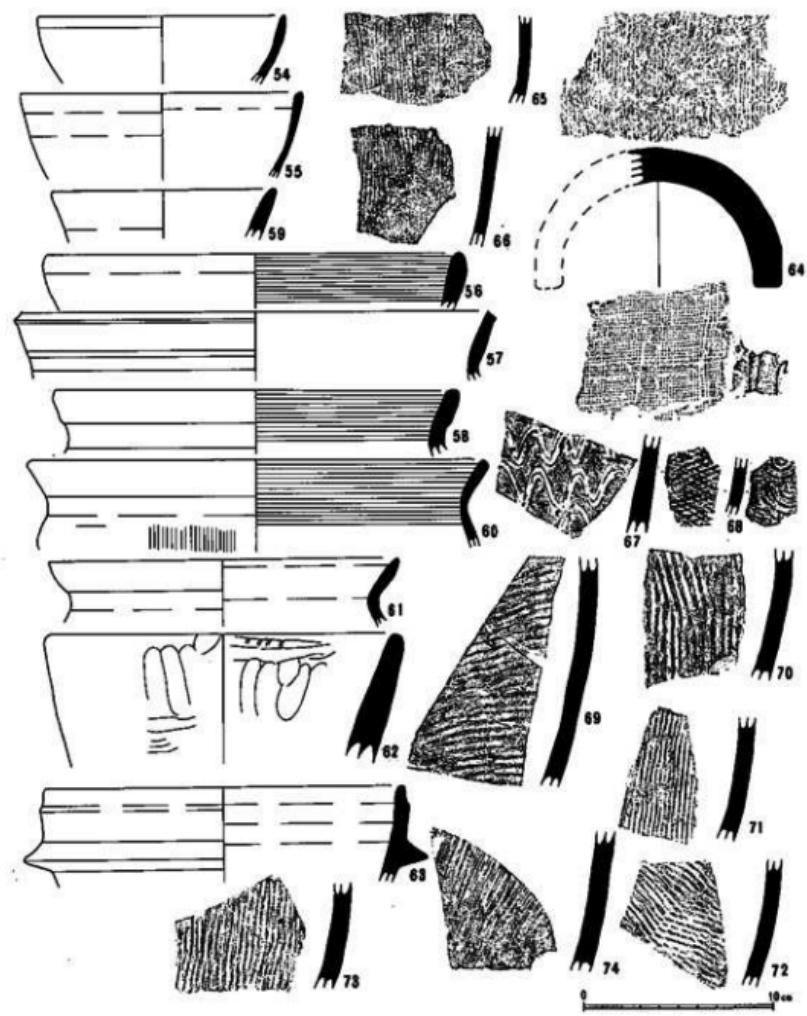
a類、壺の平底となるものをまとめた。1~27・131・132が含まれる。この中、1は内外共黒色、



第25図 土師第1号住居址出土遺物実測図(3) (1:3)

2～11・131は、いわゆる内黒となるものであり、12～27・132は内外共褐色となる類である。16・26のヘラ調整となるものを除き、いずれも糸切の跡を残す。総じて小形となるのが特色でもある。1は内外黒色となる唯一の資料であり、底径6.6cmで、器厚0.3cmのうす手となり、外傾の度を強めて器は開く。2は底径6.6cm、底部に糸切後のヘラ調整が残る。3は底径5cm、器厚0.3cmの小形づくりである。4は底部が肉厚で、切高台的となり、底径は5.2cm、器の立ち上がりが急で小形づくり、内側に調整痕が残る。5は底径6.6cm、器は開口の度を広めて開く、壁面調整は至極よい。6～8共、底径は6.6cmであり、6・8の内黒は色がうすく、7は濃い。9～11は、共に底径が5.6cm、立ち上がりの度は強弱なく中位である。12は図上復元により、全体の知れるものである。口径は11.9cm、底径5.8cm、高さ2.7cmの小形坏で、糸切の痕を明確に残す。13の底径は6.4cm、内部のヘラ調整をよくしており、腰に僅かな反りがある。14は底径5.5cm、15は口径11.2cm、底径6cm、高さ2.8cmを数え、仕上げはよい。16は底径5.2cmで器形そのものは、13・15に類するものであろう。17は底径4cm、器厚0.4cmで小形づくりとなる。18は底径5cmで、底部の調整はよくない。19は底径4.8cm、20は6.6cm、21は5cmとなるが、いずれも腰に反りがある。22～24は12とはほぼ同様の器形を示し、底部より直接ゆるやかなはり出しをみせて口縁にいたる。総じて小形づくりで底径は22が4.7cm、23が4.8cm、24が6.4cmで、いずれも壁面調整はよく、23・24は特に明るい赤褐色となる。24は図上復元により口径は12.5cm、底径は6.4cm、高さ2.2cmと浅い。25は底径7cm、底が部厚で底部より急な立ち上りを示し、26は底部のつくりに特徴があり、松本周辺ではやや珍らしい、蛇の目高台風を形成している。底径は5.6cmである。27は底径7.2cmで、底部に糸切り内部にヘラ調整の後を残す。131は胎土に砂粒を含み、底径5.6cmを数える。切高台的な平底の底部には、糸切の跡が残る。132は小形坏で、図上復元により口径は9.4cm、底径5cm、高さ2.7cmを数える。

b類、甕、鉢、壺、壺、釣釜等を一括する。28～30・56～63・65・66・129が含まれ、比較的数量は少くない。28・29は、共に底径が10.4cm、外面褐色、内面は黒色である。器厚は厚く、28は底部より外傾の度を強くして開き、29は直ちに立ち上る器形を示すが、小～中位の壺形土器となるものであろう。いずれも胎土に砂粒を含む。30は底径10.4cm、内外暗褐色を呈し、29と同様の器形を示す壺とみられる。56は壺形土器の口縁部破片である。口径22cm、内面には横走する櫛目文が残る。頸部でしまり胴部にはり出す形を示す。57は口径24.6cm、口唇部のつくりに特徴があり、壺形を示す土器とみられ、外反する口唇の外側を斜めに切っている。58・60・61は56と同様、壺形を示す土器の口縁部破片とみられるものである。共に、短い口頸部で縦り、胴部へゆるやかに張り出す器形となる。58・60の内面には、整った櫛目文が横走している。口径は58が21.4cm、60は24cm、61は18.4cmを記し、焼成のよい赤褐色系をとる。59は小形壺形土器の口縁部破片で、口径は12cmとなる。黄褐色を呈し、壁調整はよい。62は前記の56・58・60・61とは異なる器形の壺形土器とみられるものである。口径19cmと中位であるが、器厚は1～1.5cmと厚く、重量感のある器体を想像させる。口頸部が長く、体部に向けて直行する形を示している。器の内外面に調整痕が残る粗成土器である。



第26図 土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(4) (1:3)

63・129は数たくない鉄釜土器の破片である。63は口径19cmを記録し、鉄は約1.5cm位の張り出しどなっていて、その最大張り出し部より口縁までは、3.8cmの立ち上がりを示す。内外暗褐色を呈している。129は、内面黒色、外面は鉄上が黒塗り、鉄下は暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口縁は内湾の度を強めて立ち上がる。口径は28.6cmを数えるものの、鉄下の胴部はあまり深くなく、底部に向けて比較的浅く集約する模様である。内外にロクロ痕が多く残る。65・66は共に壺の胴部破片で、器厚は0.5cmとなる。外壁面に縱方向の比較的整った櫛目文が残る。内外黒褐色となる。

c類、土師器坏の底部が高台となる31~46をまとめた。この中、31は内外黒色となり、32~38は内黒となるものであり、39~46は、内外褐色を呈するものである。高台について前二者と後者を比較したとき、その脚部が前二者よりも後者の方が高まる傾向を示しているので、これらを分類し、明らかにしたい。

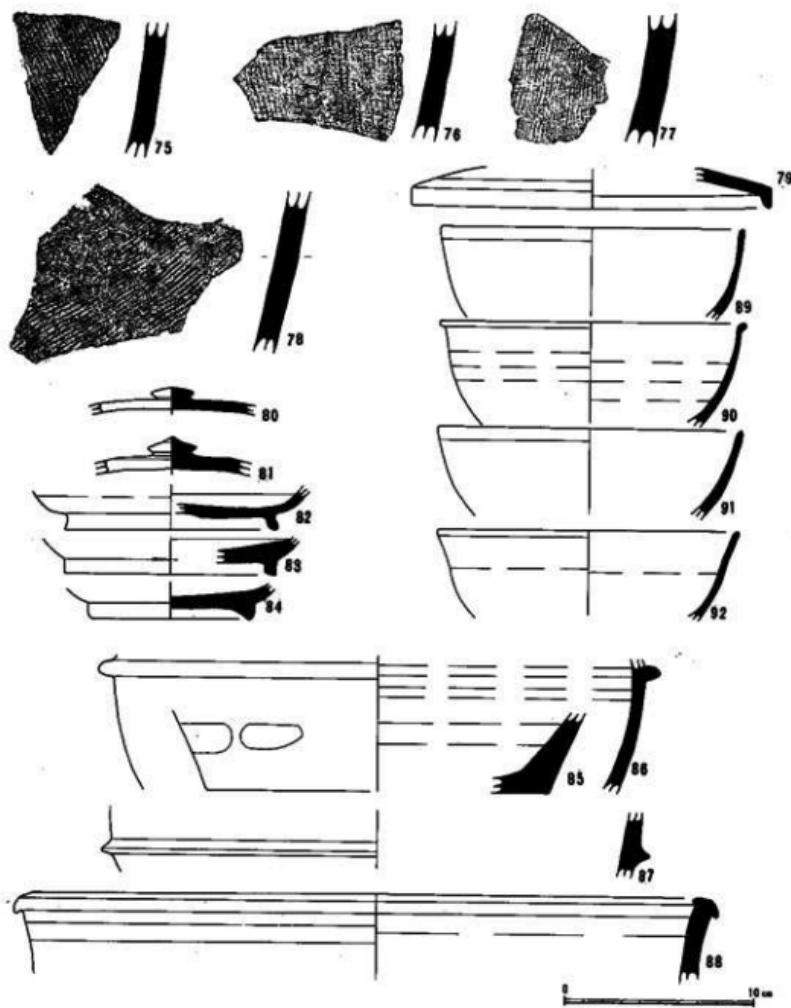
(1) 31は内外黒色となる唯一の資料である。高台外側断面は、内側へ半月状に削りとられ内湾し、内側へ細まりながら、その先端が結ばれる。高台内には糸切の跡をのこし、付高台の内周つけ根をロクロ回転による調整をなしている。内面底部には花模様の暗文がある。底径は5.5cmで、高台際より器はゆるやかに開きながら内湾するが、その器形からすれば、あるいは碗を示すものかも知れない。

(2) 32~38が含まれる。高台のあり方が31とは全く相違し、その断面が外へふんばる形を示している。又、高台の脚の高さは0.6~1.2cmである。いずれも内黒土器であり、外面は茶褐色系色調となる。32は底径7.5cmで、糸切後の付高台となり、内部には暗文がある。壁調整は至極よい作である。33は底径7.5cmで、高台の張り出しが強く、34・35・37は高台の外側をほぼ垂直におろし、高台の内側を斜めに削りとる技法がみられる。34は糸切後の付高台となり、35と共に底径は8.6cmである。36~38は底径が6.8cmとなり、37・38は糸切後の付高台である。

(3) 高台をもつ坏の底部で、39~46が該当する。総体的な特色は、内外褐色を呈し、高台際より器はいすれも横に強く開いて(1)、(2)より、大形となる気配をみせる。又、高台の脚部が(2)よりも更に外へはり出し、高くなつて1.2~3.5cmを記録する。39~42は糸切後の付高台となり、43・44は付高台内部をヘラ調整している。39は底径9.4cm、高台の高さ1.9cmで仕上げはよい。40は底径8cm、41は9.4cmで共に内底にヘラ調整の痕をのこし、42は底径6.4cmで色調は40~42共やや暗い感じである。43は底径6cm、高台の高さ2.4cmの付高台となり、46は底径7cm、高台の高さ3.5cmと異常な程脚部がのびる。この両者は高台の外反度がすくなく、同じ器形を示すものである。44は底径8cm、45は7cmで調整は概してよい。

d類、土師器坏の口縁部となるもの47~55をまとめた。この中、47~51は内黒土器、52~55は内外褐色となる土器である。これらを区別し、その特徴を記す。

(1) 内黒土器を取扱う。47は口径13.8cmで、内部に余程注意しなければわからない、薄い放射線状の暗文がみえる。口径は13.8cm、口唇内側が軽くそがれる。48は口径14.8cm、胎土に砂粒を含



第27図 土師第1号住居址出土遺物拓本実測図(5) (1:3)

み、外器面にはロクロ整形痕が残る。49は口径13cm、口唇直下の外器面を削り、意識的な縁どりをめぐらしている。50は口径13cm、器厚0.5cmとやや厚く、51は口径14.8cm、器厚0.2cmとうすく、内外が黒色となるが、小破片のため全体が黒色となるかは不明である。47~50が胴部にふくらみをもつが、51は底部に向い直行する如くである。

(2) 色調が内外褐色となるものである。52は口径13cm、53は13.8cmで、共に器形は胴部にまるみをもって深く立ちあがる。54は口径13cmで、立ちあがりは比較的浅く、55は口径14.8cmで、やや深くなるが、ロクロ整形調整をよくしている。

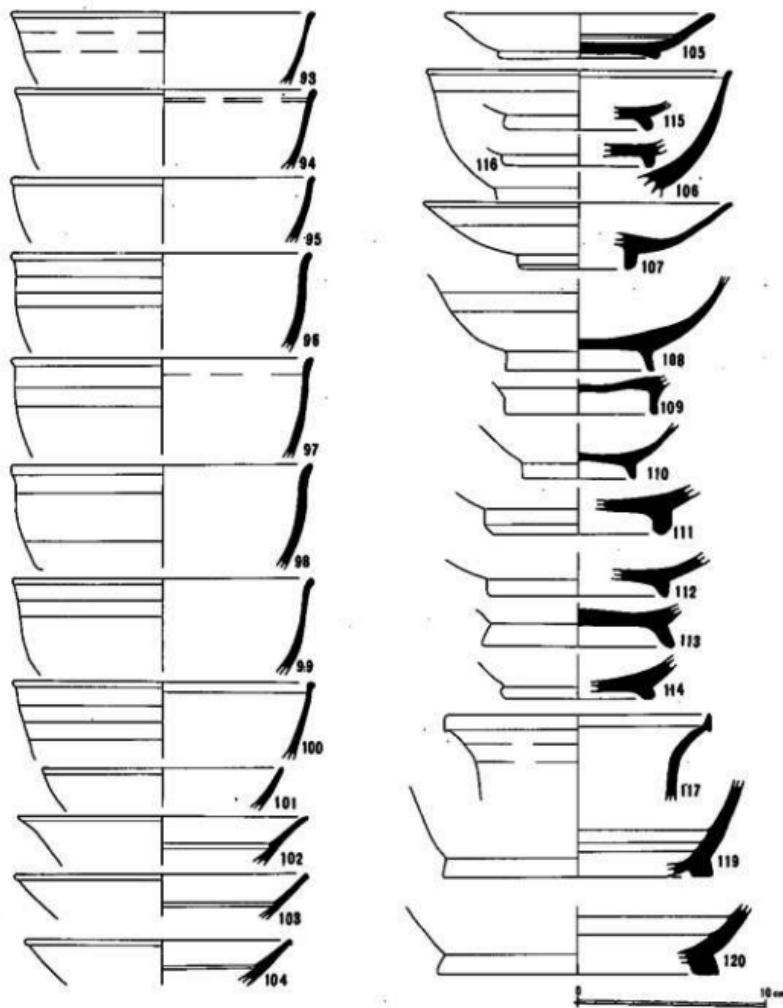
#### 須恵器 (第26・27図67~88・第29図133)

須恵器の活用資料は67~88である。器の種類は甕、壺、坏蓋、坏等で完形品ではなく、破片のみである。その殆んどが青灰色系をとるが、一部に灰白色をとるものもある。

(1) 67・133は壺形となるものである。67は頸部辺の破片で、意識的な大きな波状文を横位に、すくなくとも三条施している。一波毎に手描きしたので、他の胴部の叩きしめによる文様とは全くその趣を異なる。内面には指頭による押圧痕が、ところどころに残り、内外壁共、全面にうすい釉がかかる。器厚約1cm、胎土に砂粒を含む。133は大形壺の口縁部で、口径は31cmを数える。口唇部のつくりに特徴があり、内外にロクロ整形痕がはしる。

(2) 79~84は坏類に属するものである。この内79~81は坏蓋であり、82~84は坏の底部である。いずれも青灰色となるが、80の上面には灰かぶりがあり、84は灰白色に近い。79は坏蓋の縁部破片で、その端部は外側が垂直におりて1cmとなり、内側は斜めにふくらみをもって立ちあがる。口径は19cmである。80・81は共に坏蓋のつまみの部分であり、80は器厚が0.5cm、つまみの直径は2.3cmで、中央部がやや高くなるつくりである。81は、器厚0.7cm、つまみの直径は2.8cmとなり、その頂部がやや尖り宝珠状となる。82は胎土に砂粒を含み、底径は11.2cmで、高台の端部が外反してふんばりをみせる。83は底径11.2cmで、高台が垂直におり、台形をなすものの、その踏面は平坦でなく、やや内そぎとなる。84は底径8.6cmを数え、糸切後の付高台が断面内窓を示し、底部高台のあり方をそれぞれ異にしている。82・83は器の内外に、84は内部にロクロによる細かな整形痕の走りを残している。

(3) 壺形土器をまとめる。68~78・85・88が含まれる。この中、68~78は甕の胴部破片で、器壁に叩目痕等を残す類である。68は器厚0.5cmと須恵器の中にあっては比較的うすく、外器面に整った斜格子文を、内面には同心円文を残している。器の叩きしめを良くし、施文効果も意図している様に思われる。69・70と共に灰白色を呈する。69・70は共に器厚0.8cm、胎土に砂粒を含み、外面に太い条痕を残す。71・72は器厚0.7cmであり、71は細く、72は中位の条痕が内面に付される。73は器厚0.8cm、中位の条痕が明瞭で、その外面は自然釉で覆われ光沢をもつ。74は器厚0.9cmで、中位の条痕叩目をし、75・76・78は器厚1cmと厚くなり、77は1.3cmと更にその厚さを増す。



第28図 土師第1号住居址出土遺物実測図(6) (1:3)

いずれも外器面に、75・77・78は条痕に直交する浅い細い密な木目が交叉し、格子状を呈しており、76は整った格子目状となり、その表面は自然釉がうすくかかる。

85は器厚0.8cm、底径18cmの底部で、器はその基部より、やや急な直線状の立ち上がりを示して開く。外反に指圧痕が浅く残り、内外に細かなハケ目のはしりをとどめる。88は器厚0.9cm、口唇部のつくりに特徴があり、その口径は35cmと大きく開口している。器の内面に灰かぶりがあり、外面はうすい釉が全面を覆い青黒色となる。

(4) 胸部に鈎状の隆帯をめぐらすものをまとめた。86・87が含まれる。いずれも隆帯下の外周直径は28cmとなり、器厚0.6～0.7cmで、隆帯部は1.2～1.5cmとなる。86の外面は青黒色となり、うすい釉に覆われる。

#### 灰釉陶器（第27～29図89～121、第29図135）

灰釉陶器も完形品ではなく、いずれも破片ばかりで、器種としては坏類を主として、他に皿、段皿、瓶、甕、壺などが微量検出される。

(1) 坏類としては89～100の口縁部と106・108・116の高台付の底部となるものが含まれる。

a、底部を欠く口縁部となるものは、いずれも胸部がゆるやかにふくらむ曲線を示し立ちあがる。口唇部のつくりに大別2種があり、89・91・92・94は口唇がすなおに立ち上ったまま集約する如くであり、90・93・95～100は、口唇を僅かに外反させ、その外面直下を浅く削って、小さな縁どりを意図的に残している。器厚は0.3～0.4cmを示すもの多く、口径は89～100がそれぞれ16cmと統一的である。又、いずれもうすい釉がかけられているが、中でも95～99は、口縁部の内外に白い釉薬が意識的にかけられており、100にのみ紫緑の釉が施されている。

b、坏の底部資料としては、大別3分類が可能かと思われる。その1は111・116の如く、高台が垂直におりるもの、その踏面が両側から削ずられてまるみを帯びるもの、その2は108・113～115の如く高台が外へはり出して、踏んぱりをみせる類である。109などもこれに類するものと思われる。その3は110・112の如く、高台を垂直におろし、高台内側を斜めに削る類である。106は底部の殆んどを欠いていて、全体を知ることはできないが、口径は16cm、底径は約8.8cm、高さは約7cmを記すものと思われる。器の外面には白釉、内面には淡緑釉がかけられている。108は底径7.8cmで、口縁半を僅かに欠き、内外面に光沢のない白釉がかけられている。その他の底径は109が8cm、110が6cm、111が10cm、112が9.5cm、113が10cm、114～116が8cmを記録する。又、106・108～112・115・116は淡い青灰色の地色となるが、113・114は白色の陶土が用いられている。

(2) 皿として101・107、及び段皿102～105、135をまとめる。皿は2例で、101は口径12.4cm、器厚0.4cmで内外面に白釉がかけられる。107は図上復元により、全体をうかがい知るもので、口径は16.4cmとなり、底径6.4cm、高さ3.5cmを記録する。器の外面には白釉が、内面には淡緑釉がかけられる。

段皿は5例を数える。102は腰部より器が外反しながら開口する器形を示し、他の4例とは趣を異にする。器厚0.4cm、口径15.4cmで102と同様に白灰釉がかけられる。104は器厚0.4cm、口径14.2cm、段上の縁帶に淡綠釉を施している。105は図上復元で全体像を知ることのできるものである。器厚0.7cm、口径14.2cm、糸切後の付高台であり、その底径は6.4cmを数える。低い形ばかりの高台がめぐる。高さは2.4cmと浅い。103～105の器は、いずれも底部より直線的に開口する。135も図上復元により全体を知るものであり、その口径は14.5cm、高台がありその径は7.4cm、高さは2.9cmを記録する。有段部から口縁にかけ、その内外に透明の釉薬がかけられる。

(3) 瓶、壺等をまとめる。117～121が含まれる。117は広口瓶の口縁部とみられるものであり、その口径は14cmである。内面には自然の灰釉がかかる。118は胴部に鈎状の隆帯がめぐり、その上、隆帯上につまみの加飾がなされる特徴ある土器である。胴部径は26cm、器厚0.5cmを示している。119・120は共に臺形土器の底部である。高台はほぼ台形に太く短かくおり、ややふんばりをみせる。底径は119が14cm、120が14.5cm、器厚は共に0.5cm、又、いずれも内外に淡綠釉が残る。器は高台際より比較的急な立ち上がりをみせる。内面底部近くにロクロ痕のはしづがある。121は広口瓶の頸部取付より肩部にかけての破片である。頸部接合部の径は10cmであり、肩部表面はやや濃い緑の釉がかかる。内壁にロクロ痕が残る。

#### 緑釉陶器（第29図134）

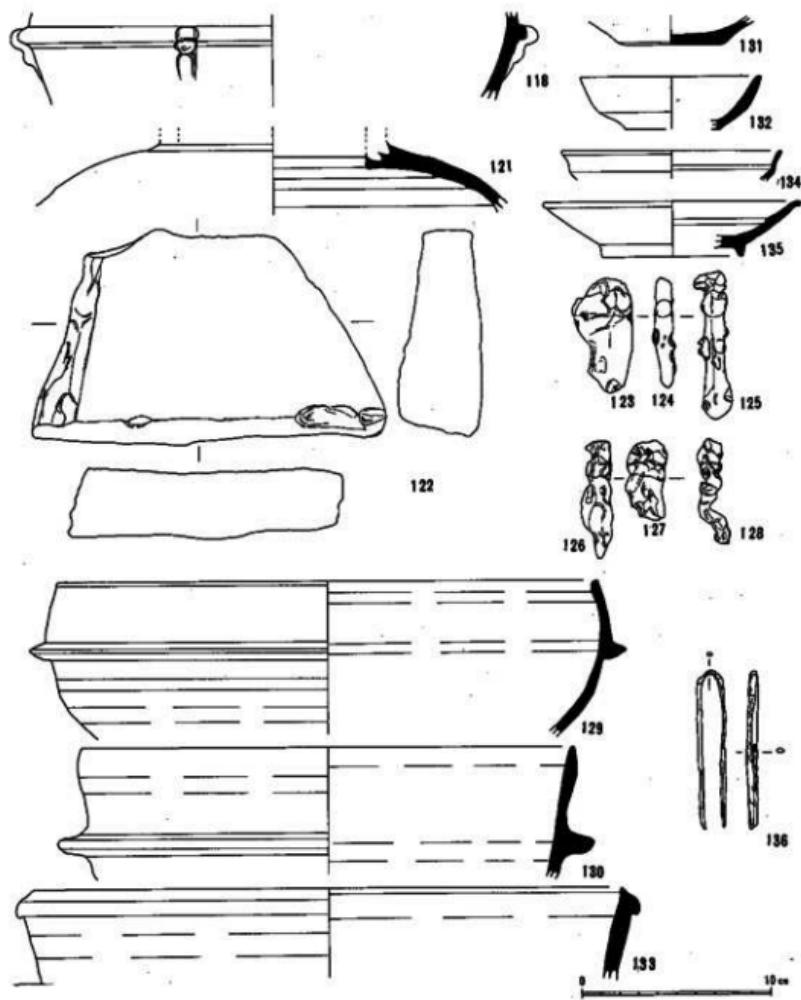
緑釉陶器片は2片の出土をみているが、活用土器は134の1例のみである。内外に緑釉の施された段皿の口縁部であり、その口径は11.4cmとやや小形である。他の緑釉も個体の異なる段皿片である。

#### 布目瓦（第26図64）

1号住居址覆土内からは、布目瓦が1点出土する。64が該当する。半月形の丸瓦の欠損品で、図上復元による外周の直径は約13cm、外面までの最高は約7.2cm、厚さは端部が1.5cm、頂部はややふくらんで1.9cmを数える。砂粒を含み、暗褐色を呈し、外面には縱方向の繩文が密に残され、内面には布目が明瞭で、1cm角内の布日本数は、6×6本である。

#### 礎石（第29図122）

1例のみで122が該当する。大きさは約18.8×11×4.5cmを数え、砂岩質の角張った偏平な石で、底石として活用された面は、広い平偏な1面と、周囲する側面の1箇所である。偏平な1面は磨かれて滑らかではあるが、多少起伏があり、細かな同方向にはしる直線状の筋が、やや深いもの4筋（いずれも長さ7cm位）と、浅い短いもの約10筋が刻まれている。周側面の1箇所にも磨面があり、滑らかとなるが、やはり起伏があり、同面に約4cmの直線状の筋が1本残る。以上の他、石は欠損



第29図 土師第1号住居址出土遺物実測図(7) (1:3)

部1箇所と、自然面で覆われる。

#### 鉄製品（第29図123～128）

鉄製品は都合6個を数える。この中、釘が4、鉄片が2である。123は断面カマボコ形を呈する鉄片で、大きさは長さ5.9×巾3×厚さ1.3cmである。124は直状の釘で断面は九形であり、長さ5.7×巾1×厚1cm。125・126は共に直状で断面は角形となり、角釘としての頭部もある。大きさは125が長さ7.9×巾1～1.4×厚1.3cm。126は長さ6.1×巾1～1.6×厚1.1cmである。127は鉄片で、長さ4.2×巾1.8×厚0.8cm。128は丸釘が曲ったもので、長さ5.4×巾0.5～1.3×厚0.5cmである。

#### 釦子（第29図136、図版口絵カラー）

本址のやや東南よりの床面の62×63cmの平板の花崗岩の上に、あたかも置かれた状態で出土したもので、地金は銅で金鍍金または金箔をほどこされたヘアーピン状のものである。長さは8.3cmで先端は僅かに腐蝕して短い。身巾は0.6cmで断面はカマボコ状である。頭部環状部は一番腐蝕がつよく、地金が細まっており、脚は僅かに内弯している。

釦子については二脚の場合は形態の類似により鏑ともみられ、本品の場合も同様であるが、類例をあげてみると、全国では奈良県北葛城郡忍海村柳辻古墳、秋津村今住古墳、大阪府富田林市須賀古墳、柏原市太平寺古墳、八尾市高安古墳群、三重県上野市久米山古墳、山口県萩市ジーコンボ古墳群、岡山県山手村寺山古墳等11例があるが、いずれも古墳よりの出土で、金又は金メッキされたものが、須賀、太平寺、ジーコンボ、寺山古墳より出土している。

鏑については郡馬県淹川村白山神社古墳、同多野郡藤岡町山林、同美久里村本郷、大分県臼杵市市山古墳等6例があげられている。<sup>(12)</sup>

この他、柏原市平尾山古墳群のかんざし、岩手県江刺市力石Ⅱ遺跡（平安時代）からは2本のビンセット状鉄製品が出土しており、埼玉県稻山古墳からは鏑子が出土している。<sup>(13)</sup> 尾張旭市長坂方6号古墳からは叉状鉄製品が、<sup>(14)</sup> 京都市中京区大徳寺町の右京三条三坊からは木製棺内から化粧道具一式が出土し、<sup>(15)</sup> 銅製毛抜が合子等と共にあった。<sup>(16)</sup>

県下では阿智村杉の木平B、中世3号路址、下伊那郡西春近の中世3号地下倉址より、茅野市判の木山東1号住居址、伊賀良酒尾前遺跡、伊那福島遺跡等より類品の出土が報じられている。<sup>(17)</sup>

（大久保 知巳）

#### 参考文献

(1)中村久四郎、森本六爾「日本上代文化の考究」

(2)佐藤正則「河内大平寺古墳群」—I. 古墳時代の釦子・鏑子について—

- (3)東大阪市立郷土博物館「図録、河内の古墳をたずねて」  
(4)西山要一氏（元興寺仏教民族研究所）の教示による。  
(5)埼玉県教育委員会「埼玉・稻荷山古墳」  
(6)尾張旭市教育委員会「尾張旭市、長坂第5号古墳、第6号古墳発掘調査概報」  
(7)京都府京都市埋蔵文化財研究所編「平安京跡発掘資料選」  
(8)中央道報告書「阿智村斜抗広場その1」「西春近」「茅野市・原村その2」「伊那福島」  
なお釧子の項については、奈良埋蔵文化財研究所の西村康氏、元興寺仏教民族研究所西山要一氏、  
京都市埋蔵文化財センター田辺昭三氏よりご教示をいただいた。

### 第3節 その他の遺構と遺物

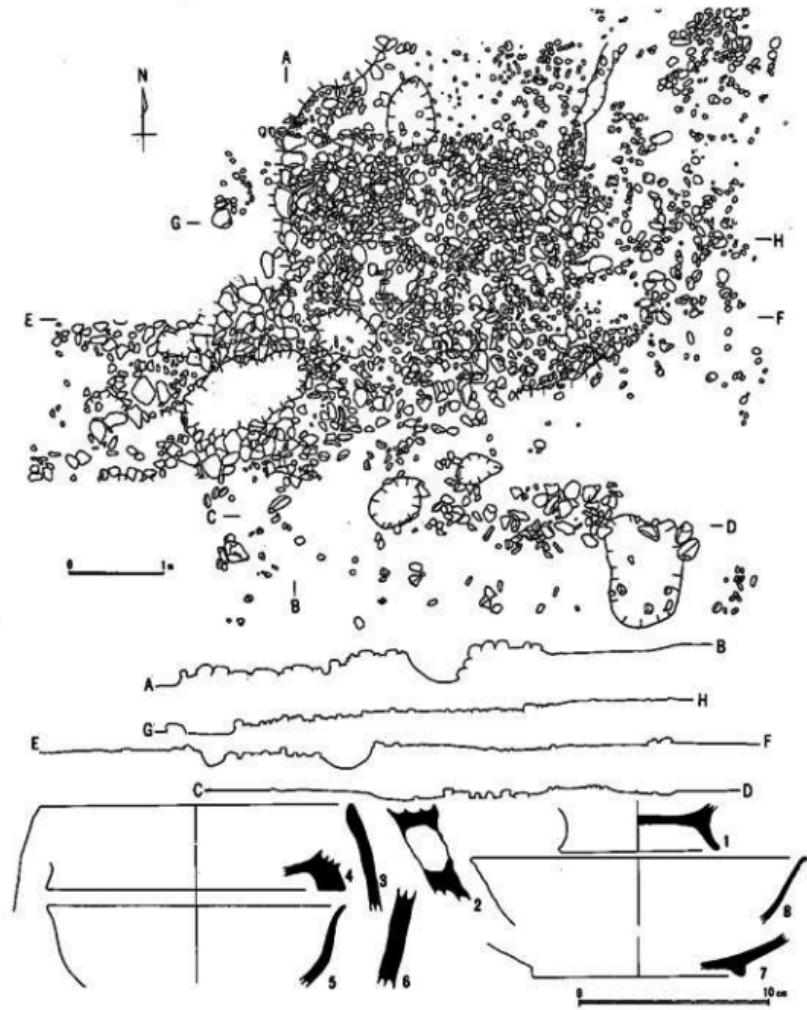
#### 1 碓敷遺構（第30図・図版14）

本址は発掘地域の西側に位置し、21-13を中心として36m<sup>2</sup>あまりにおよぶ範囲である。本址は表土除去後マイナス50cmの深さより人頭大の河原石がほぼ南北に1～2段に積み重ねられ、その東側には人頭大から拳大の礎が一面に続き、西側は砂利層となっていた。この礎の列が建物の土台、あるいは範囲を示すものかと推定して拡張を続けたが、東側に行くと礎もやや小さ目になり雑然としており、意味不明確となってしまった。更に北側には細い水路があり、それには土管が埋められており、旧制高等学校時代の“めぐら水道”であることが判明した。このように搅乱された遺構であるため、前述の列石については性格不明確のままであり、更に究明しようと列石の南を拡張したところ列石は終っており、大礎が3～4段に西南一北東の線で走っており、これまた人為的であることははっきりしながらも、その用途は不明である。礎面は南東から北西へ僅かに下る。

伴出遺物は他グリットに比して少なく、若干の土師、須恵器片が出土した程度である。

#### 遺物（第30図1～8、図版9、中段3、4）

1は付高台の土師坏で底径は8.5cm。高台のつけ方が悪く、外側には粘土の段がついている。底は糸切りで褐色を呈する。2も土師で台付窯の底部か。外面は4段にロクロ整形の段を残し、内側もロクロ調整の横に走る三本の条痕を残している。破片の割れ口に棒状のもので押えた窓があり、僅かに胎土が外にもり上っている。胎土には細粒砂を含む、明かるい茶色を呈する。3は無頭壺の口唇部分と思われ、口唇内面は厚くふくらみ、口唇より下部にわたって全面に細かく横走するヘラ磨き痕を残す。表面はやや凹凸があり、明茶色の緻密な土師器である。4・5は須恵器で4は窓底部の高台部分である。1.4cmの巾広い高台で僅かに凹む。内面には灰オリーブ色の釉がかかっている。5は碗型にちかい坏で、口唇はつよく外反している。薄手の外面に整形の三つの段が残る。ネ



第30図 碓敷造構実測図（1:60）及出土遺物実測図（1:3）

ズミ色で堅緻である。6・7は灰釉で6は、四角く割れた厚い破片で甕胴部かと思われる。内外ともロクロ整形で1.5cm巾の条痕をもつが、内面は指圧で行ったかと思われる。7は高台付环で、内外上部に釉があり、底には糸切、高台は付け高台である。8は中世陶器の环と思われる。口唇は丸く外反して、薄手で外面はロクロ整形の5mmの巾の段が重なっている。釉は灰緑色でうすくかかっている。

## 2 その他の遺構と遺物（第31図）

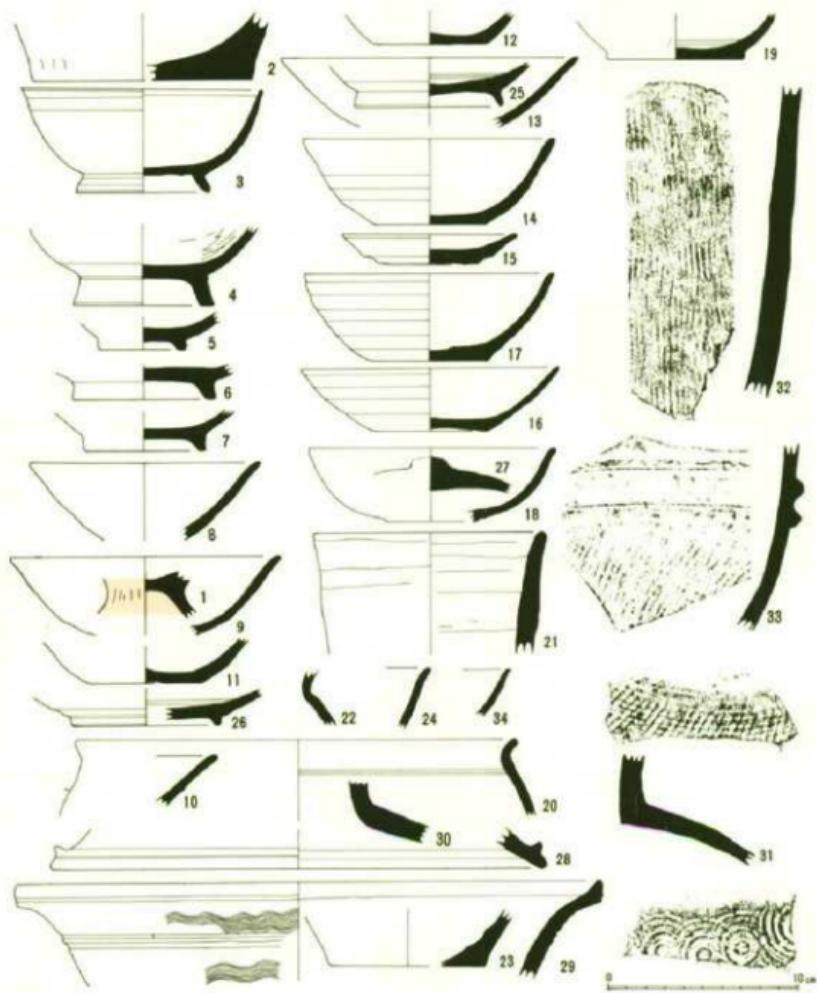
上記以外の遺構としては正確にとらえがたく13—9では石積が検出されたが、石炭ガラが同時に出土しており、ここではとりあげない。

19—9からは多量の内黒土器の出土をみたが遺構の検出はできなかった。その他搅乱層中より遺物が出土しているので、その主なものをとりあげたい。

### 遺物（第31図、図版9下段）

1・2は弥生式土器片で、1は小型の高环の胴部で内外とも朱釉である。2は甕底部で平底の底径11.6cmである。1は25—33、2は25—17—115cm出土。

3~23は土器で、3は口径12.8、底径7cmの高台付环の略完形である。外面ロクロなで、内面へラ磨き痕を残し、底部は回転へラけずりである。色調は内面は茶色で一部に黒色を呈し、外面は茶褐色で、胎土はやや砂粒を含む。17—5—35cmより出土。4は内黒の高台付环で、底径は7.5cm、高台の取付部分ははみ出しており、その腰部と、高台内側取付部分はへラけずりを行っている。13—9—55cmより出土。5は黒色土器で中央が僅かにもち上り、内面へラみがきで、付高台、底径は4.5cmで25—33出土。6は底径7.6cmの茶褐色を呈するもので13—5、—70cmより出土。7は内黒で付高台で底部は糸切である。明かるい灰茶色で胎土には砂粒を含む。8~14は内黒の环で10以外は外面上部まで黒色になっている。11の底は糸切で切り痕に胎土がはみ出ている。8・9は内面横ナゲがある。14は口径13.3cm底径5.8cm。糸切底で全体にやわらかな感じを与える器形である。外面整形の際の4段を有する。8~14全て19—9で、14が—47、それ以外は—25cmである。15~17は环で、15は口径9.2、底径4.8cmで浅い糸切底である。外面に二段を有し、明茶色で胎土焼成ともよい。13—5—70出土。16は口径13.5、底径6cm。外面三段を有し灰茶色で、内外とも一部に黒色を有す。17—5—45cm出土。17はやや深い环で6段のロクロ整形を残し、明赤褐色で細砂粒を含む。やわらかな焼成である。底は糸切だが切り方が下手で、内側底部に径1.3cmの円で僅かに低くなっている。18は灰色を呈する土器で底部が糸切が二重になっている。19—9出土。19も底部の糸切り後の処理をしていない灰白色を呈する环で、内部中央が高まる。胎土には小石を含む。17—5出土。20は壺口縁部で内面に刷毛目文がある。21—5出土。21は円筒形を呈するもので、機能的には何かわからないが類似品で岡田山伏塚では瓶が出土している。内面に5段を有する赤褐色の堅緻な焼成で



第31図 その他の遺構出土土器拓本実測図 (1 : 3)

ある。13—9—55出土。22は壺頸部で、外面くびれの下に段をもち、色調は内面赤褐色、外面灰褐色堅緻である。19—9出土。23は壺底部で平底の円面整形痕の二段を有する。赤褐色で胎土は粗い。底径8.4cm、19—9出土。

24—26は灰釉陶器で、24は壺内部に朱彩を施してある。内面白唇下に一本の沈線がある。19—9出土。25・26は高台付壺で25は付高台部分が整形不充分である。4—38出土。26は高台がやや丸みを帯びる。内面にロクロ整形時の削りこみを残す。25—13出土。27—33は須恵器で27は壺蓋であるが、つまみが僅かに欠損している。28も壺蓋で口縁部である。上に隆帶をめぐらしている。4—21—45cm出土。29は有頸壺の頸部で、口唇はくの字状に曲り、外側に二本の沈線。その下部に波状文と沈線をめぐらしている。青灰色で一部黒化している。9—17—30cm出土。30は壺の肩部で表に叩き目文、裏は同心円文を施す。推定径は肩部で29cmで、作成には胎土を三枚重ねにしたらしく、一部密着せずに空洞になっているところもある。20—7—28cm出土。31も壺頸部で頸下部で口径23cmで肩下部よりタタキ目がある。内面のタタキ目はボコボコとした感じで、頸は直立よりやや外反するらしい。外部の地色は黒茶色で灰色の灰が着き、内部は灰青色である。25—5出土。32は大壺胴部で推定径7.2cmで、外面は縦のタタキ目、内面は無文タタキ目である。器壁は内側に1.2~0.8cmの胎土を内外とも0.3cmのうわがけの胎土を重ねている。17—5—43cm出土。33は胴径32.4cmの壺で、胸部に二本の隆帶がめぐるが、地文は斜行するタタキ目文である。内面は凹凸がはげしい。灰色のやや柔らかい焼成で9—5—80cm出土である。

#### 縁輪（第31図）

34は縁輪で壺口縁で口径10.3cm。萌黄色で美しい。胎土は白茶色のやわらかなものである。口唇は小さく外反し、内面にロクロ整形の痕がある。25—13—58—84cm出土。

### 第4節 植 物

#### 遺跡出土のイヌドクサの成長について

本遺跡発掘に際して、5—18から5—20にかけ、3月28日、29日と—110cmから—90cm付近にかけて多量の草本科植物の炭化物が出土した。（図版15参照）これ等の植物が何であるかは、内部が失なわれ外皮だけになっているものが多く、一部内部の生々しい種子様のものが発掘されたが、発掘の際の傷のため、カビてしまい種の決定が困難であった。3月29日、5—20で—90cm付近にある遺跡面（弥生時代）に一部現われていた30cm程の石を持ち上げたところ、同一炭化物が—110cm付近に多量に存在した。それを、ビニール袋に入れ5月末迄机の下に種の決定ができないまま、他の炭質物などと一緒に放置し、再度整理しようと思い袋を見たところ、柔軟性を持っていた1本の遺

物から弱々しいながらも、楊子くらいの芽が伸びていた。早速鉢に植え成長させたところ、まぎれもなく、イヌドクサ（トクサ科）で、現在県の森付近には全くないものであることがわかった。イヌドクサは地表近くを浅く這う性質を持っているが決して地下深くもぐる性質はなく、出土地は、地層学的にみて全く逆転しておらず、また、他のものが炭化し皮だけになっていることからしても、古代のものであると断定できる。

では、どのようにして埋まり、現在に至ったかを推定してみると、先ず、当時薄川の近くにあった本遺跡付近に、6月初め頃洪水が起り、一度に埋没した。その後も洪水により土砂が堆積し現地表面が形成されたと考えられる。6月と推定した根拠は、前述した種子様のものと見たのは地下茎から出たばかりの新芽であり、現生のイヌドクサを野外で1年かけて観察した結果、炭化物と同様になるのはほゞ6月で、この時期に埋没し成長が止まり、炭化したものと推定される。芽を出した部分は、この地下茎であり、表面は炭化し、髓の付近のみ、からうじて生きていたことがわかった。発芽から1年たった現在ようやく、力がついてきたが、まだ一緒に出土した炭化物に較べると数分の一の大きさである。次に、なぜ千年程も生命を保ち得たかということであるが、堆積した土砂は、肥料分の少ない細砂であり適度の湿りと、一定した低温と、それに通気性があったためであると考えられる。

なお、このイヌドクサは、県の森公園に移植されることになった。

（森 義直）

## 第4章 考察

今次の調査は前記各章記述のごとく、あがた遺跡全域についての発掘調査でなく、その一部分に過ぎないので、あがた遺跡の全体の考察には成り得ない。しかし大正8年（1919）旧制松本高等学校が松本に招致され、この地がその校地にえらばれ、整地・地行がされる段階において、遺物の出土があり注目されていたこと。また昭和8年出版の『松本市史』上巻の編集段階、さらに昭和25年からはじめられた『東筑摩郡・松本市誌』の編集段階における考古班の調査、また長野県教育委員会の埋蔵文化財の分布調査、信濃史料刊行会の『考古総覧』の調査等において、この地を中心に、その南方の松商学園高等学校敷地、東北部の県ヶ丘高等学校敷地、また西方の埋橋・清水の市街地にかけて、古代遺跡が分布していることは周知の事実であった。

しかし、直接この地域が発掘調査の対象とされたのは今回が初めてであった。即ちこの地域は県（あがた）の地名が示すように、古代における筑摩の県の中心地と推定されているからである。またここには江戸時代にも、埋橋村三社の筆頭である県大明神（祭神大國主命）をまつる神社が鎮座した場所でもある。この地の出土遺物の著名なものは校舎建築時に出土した平安時代の綠釉の段皿で、当時は綠釉陶器の研究が進まない時であったので、日本で三枚の一つとして話題を投げたものである。県宝に指定されている史跡平出遺跡から出土の綠釉の水瓶、また松本市城山遺跡、松本市岡田・松岡その他から出土の皿、碗等、その後多くの綠釉の陶器の出土をみているが、奈良時代末・平安時代にかけてのこの種の陶器の出土する遺跡であった。綠釉陶器を焼く窯は、いまだ本県においては発見されて居らず、すべて美濃・近江・畿内とされているが、これは灰釉陶器の皿・壺・瓶・鉢も同様であることは等しく研究者の認めるところである。大正8年（1919）の段階において、当遺跡からは、前記綠釉の段皿とともに灰釉陶器の皿及び灰釉陶器の破片が数多く出土して研究者の注目をあびた。奈良・平安期に比定すべきこれらの陶器に、更に同期の土師器を伴出していることも既に知られている。

即ち古墳最盛期の頃に古墳内から出土する須恵器の皿・壺・壺・高杯などを焼く登り窯は、この遺跡の附近では、市内本郷・岡田・それに続く、南安曇郡豊科町の上川手田沢の山中、東筑摩郡四賀村の齊田原等100基に余る発掘例があることから、この地方からの出土は少くないが、それに次いで、綠釉・灰釉の出土は稀であったが、綠釉段皿がいち早く発見されたことは当該の古代史を探る上に大変重要なことであった。ついで昭和25年（1950）塩尻市宗賀の平出遺跡の調査において、長野県宝に指定されている綠釉の水瓶（水注）と皿の底部破片、個体100余を数える灰釉の皿とは、新たに奈良・平安期における中央の文化の移入を語る重要な資料であった。

当地において表面採集や、工事の際発見される遺物の分布からみても1000m四方に及ぶ広い遺跡地帯、しかも「あがた」の地名、「あがたのみや」の存在はこの地に何か古代の重要な施設があっ

たことを示している。古代「筑摩の県」の関係遺物とするには綠釉・灰釉の陶器は新しすぎるので、にわかにそれを推定できないが、県設置の時代に次ぐ、奈良・平安期の遺物の豊富な出土は、さかのばってより昔の歴史を想定するに必要な資料でもあった。筆者が今次調査に期待をもったのは、ひとつには綠釉・灰釉の陶器、同時代の土師器を分布する、この遺跡の実態を少しでも明かにしたいこと、他のひとつは、奈良時代以前の筑摩の県時代の遺跡を証明する手がかりを得たいということであった。調査の結果は前記各章報告のとおりであるが、調査範囲が狭小であったことと、現在までに人為的・自然的に環境が古代と変わっていることによって結果としては、それ程顕著な効果をあげたとはいえない。しかし調査の形式において、考古学的な発掘調査のみに頼らず、始めから自然関係・地名関係・歴史関係の分担委員を決め、調査団を編成し、総合調査の形式を取ったことと、専門学者以外の考古学的研究に入ろうとする市民有志の人々を発掘補助員として採用し、松本市教育委員会が企画する「あがたの森公民館」の考古学講座を併行して行ったことである。

なお、遺物の考察・遺跡地現状の視察等については、それぞれ専門家の視察を乞い、意見を聞き慎重を期したことを附記しておく。

さて第一の点は土師時代堅穴が2ヶ所、その他礎敷造構が発見されたに止まり、特別なものは発見されなかつたが、遺物のひとつとして金銅鏡子の発見があり、特異なことといえる。これは前記報告のごとく小形のものであるが、装身具にふさわしい立派な青銅の材質に鍍金したもので、内側にはなお鍍金部が美しく残っていた。出土事例を挙げると、東京国立博物館藏のものは銀製で、長さ6寸4分、奈良県南葛飾郡忍海村船田出土とのみあり、国学院大学考古学資料室のものは鉄製で埼玉県内の古墳出土のものと大きさは、ほぼ同様である。この遺物については毛抜説もあり、後考を要するが、金銅製であることを重視したい。即ち綠釉の段皿に比すべき高級のものである。

綠釉の皿で附記すべきことは、国の重要文化財に指定されている群馬県前橋市総社出土の8件の綠釉陶器の中に、高台付段皿2面があることである。これら一連の陶器は平出遺跡出土の水瓶と同型の水注（文化庁のいう）と、深皿碗3面、皿4面であるが、釉の発色は割合明るく、県の森出土の皿程暗くはない。寸法は段皿は大は14.7cm、小は13.4cmである。この一連の遺物は、総社町山王の山王庵寺跡の跡跡200m余の地点から、銅鏡・土師碗（深皿）とともに出土したものである。信濃中部の綠釉陶器と関係深いことは平出遺跡出土の水瓶（器高23cm）、総社出土のものは（器高24.5cm）である。信濃と上野（群馬県）を結ぶ東山道の路線上に同様の遺物を出す遺跡があることは興味深い。県の森が信濃の国府庁に近いことは、附近に惣社があること、同期の遺跡が県のこの森の地帯を中心にあること、前橋市の山王遺跡が同じく上野の国府庁に近い総社町にあることと共に通である。これらの点からみてもこの遺跡が信濃国府庁の附近に発見されたもので、この時代の重要な遺跡の一部であることは想定にかたくない。

他の「筑摩の県」に關係する遺跡としての考察は、もと県神社（県の宮）の社地（旧制松本高等学校建設の際、南方校地外に移転）に近く発見された弥生時代の堅穴から、同時代の土器・石器が、

前記報文のごとく採取されたことを重視したい。當時進行していた「あがたの森」の公園造成工事の都合で、この堅穴の全面発掘や、その周辺をなお広く発掘することによって遺跡の本体はなお正確につかめたであろうが、今回はこれに止まるを得なかった。しかし、土師時代遺構の下にこのような遺構が、特に県神社の旧社地に接近して発見されたことは意義深いことであった。松本市附近の弥生時代の遺跡に本格的な大規模な調査が進められていない現在、ある指標を与えたものである。今後の調査に期待したい。「筑摩の県」の存在したことは、文献史料の上では明確ではないが先年発掘された史跡弘法山古墳出土の土器が、弥生後期の土器とそれすれの古式土師器であったことにかんがみ、この古墳が造成された基盤の究明がされなければならないが、この古墳に先行したまたその後に尾を引く、この遺跡の一部が弥生・土師の複合遺跡であり、なお散布遺物により中世室町期にも及んでいることを知り得たことに意義を認めたい。

今次調査において、調査団の組織を構成している、調査委員の方々、また補助員として学習しながら参加された一般有志の方々、また調査団の本部、遺物処理の場所を提供されたあがたの森公民館の手塚館長、ほか職員各位の御厚志に深謝の意を表する。なお調査主任神沢昌二郎氏は調査期間中はもとより、報告書執筆・報告書刊行の段階において連夜の作業を続けてその職務を果してきたことについてその労を多とし深謝したい。

(原 嘉藤)

# 図 版





▲ 調査の晴れやか

## 名かたの森と「素人発掘」



▲ 公園化の前に、さかへに植樹作業。左は、さかへの第一回の植樹

胸躍らせて  
古代との対面

▲ 不思議なほど…



▲ 調査の晴れやか



## 異色の大衆発掘 松本の歴史跡

**生きた歴史を学習**

小糸田の調査報告

成人学校「教室」の一環

人材養成もねらう

この記事は、高麗寺川遊子によるもので、1978年1月12日付夕刊に掲載されました。

本文内容は、主に「異色の大衆発掘」と題された記事で、松本の歴史跡における大衆的な考古学的活動について述べています。この活動は、成人学校の「教室」の一環として行われ、人材養成の目的も持つことが強調されています。調査報告として、小糸田の調査結果が示されています。

昭和35年3月13日(木曜日)

800313 NO. 1

あかた古代ニュース

ロコモコ

卷之三

た風教育は、市子のめでたくんが人間理解

あがに直時調査團は四式レ  
飛行開始

公私信にありて、馬がに遠路駕程の當面の  
事項を記入せしむる。

からあたしの心の底にさういふと/or

アラモードにて発表した。

とおもてす。しかし解せんじゅひつから

ものでついにスコットが皆とみりきは  
からはフルハントドロイドだ。

以上は、下の図にあります。

卷之三

今回は旅人子弟の所産を貰ひました。

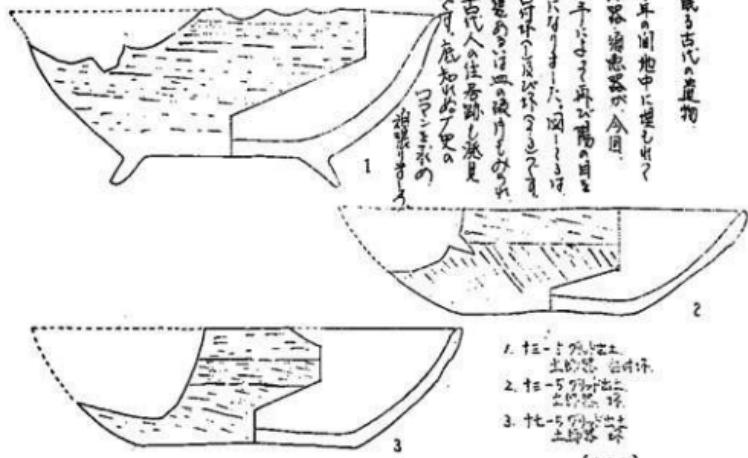
ページ数: 174 頁の目。人以上で繰り、ア

十一

卷之三

卷之三

地中に眠る古代の遺物

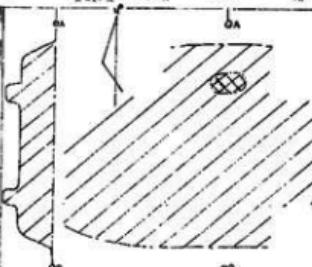


あかた古代ニユース

土師器類も器片など

卷之三

新嘉坡十勝  
新嘉坡一勝

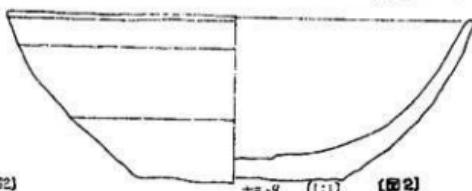


(圖1)二十七二十六年會昌四年正月 [3:200]

〔附註〕(1) 次の如きは、  
二に於ける事例で、同様の事象を  
二口式成形として、  
二口式成形は、半音程と呼ぶ  
事、即ち二口式と呼ぶ事  
である。



加 3



(四2)

(图2)

あかた古代ニュース

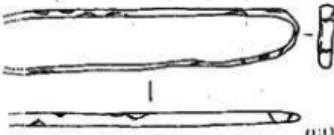
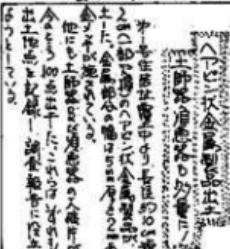
第1号住居登検出する

昭和十九年五月

三月十六日道萬成師面に丁寧に  
書狀一通爲之サア一二尋

## あがた古代ニュース No.3

昭和55年3月20日(木)



## 中国ハビシ社

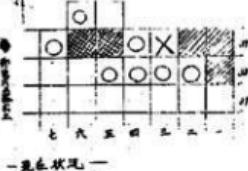
人ほ羨う  
ううううう  
ううううう

アリ弥生式土器出土  
遺構復元は時間の問題



1. 1-38 994P  
-85-AD 296L - 橫幅橫板文

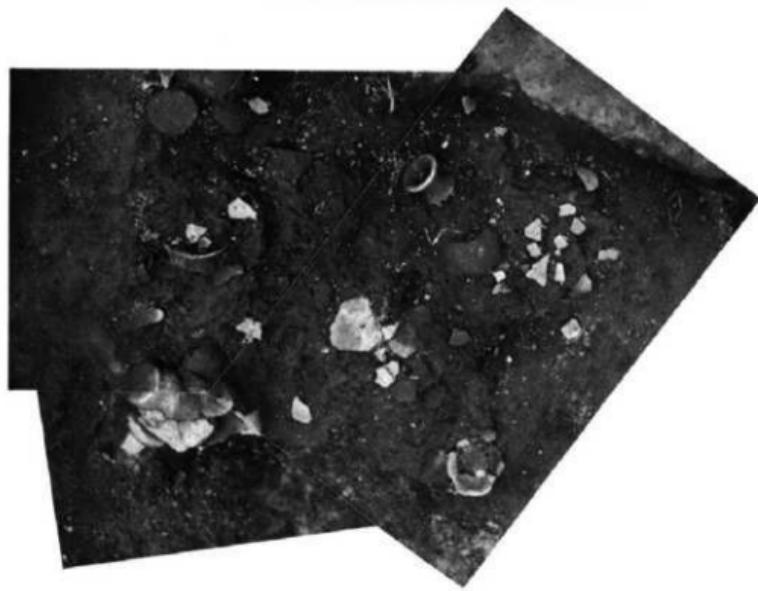
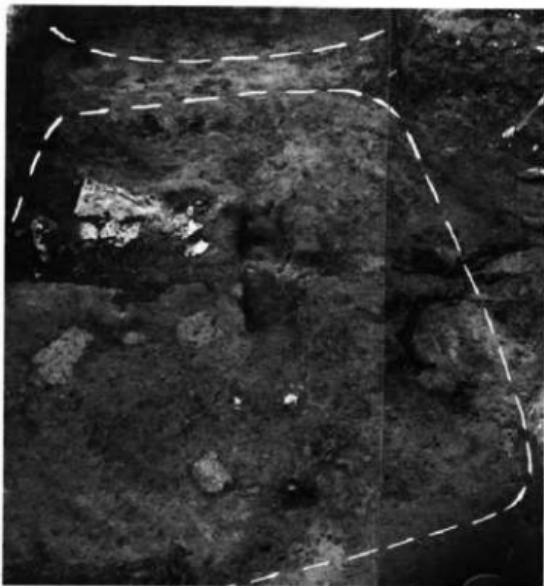
2 6-29 1945  
-45 29 2.5



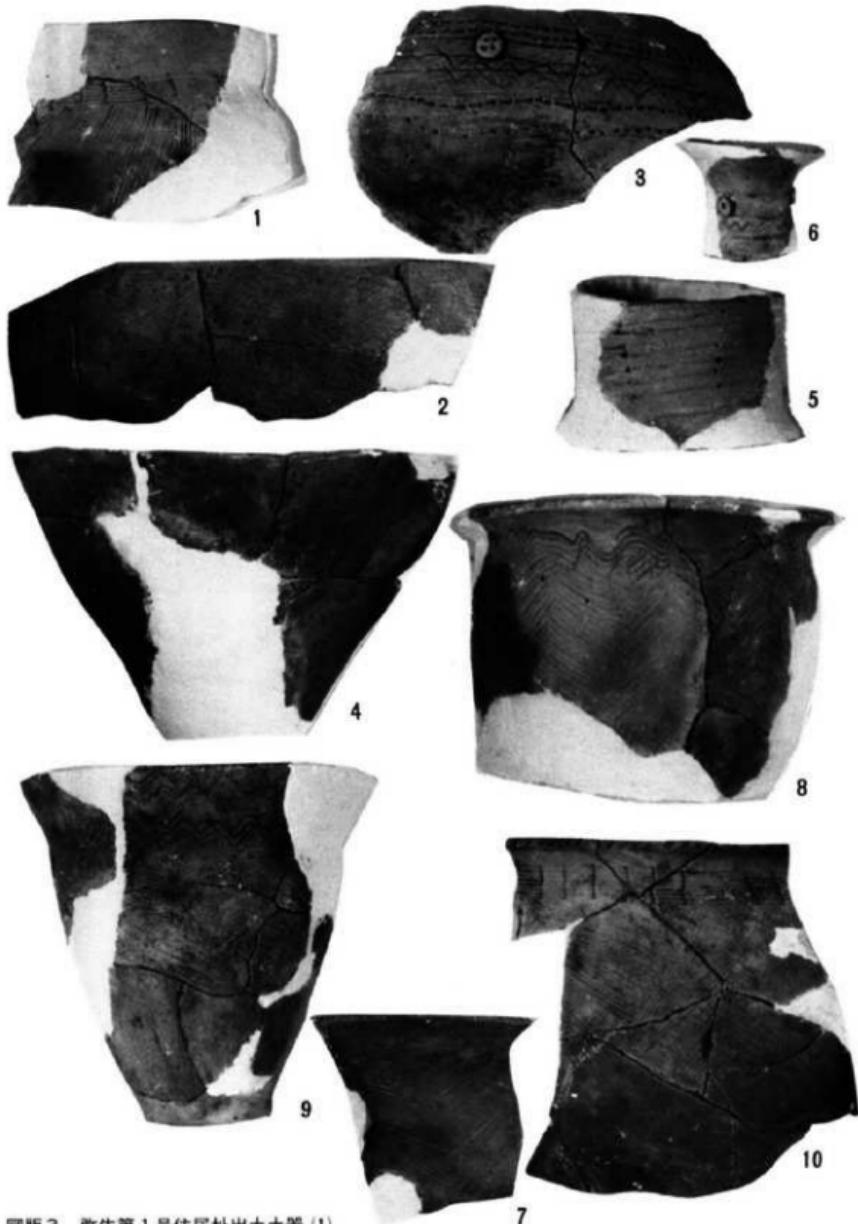




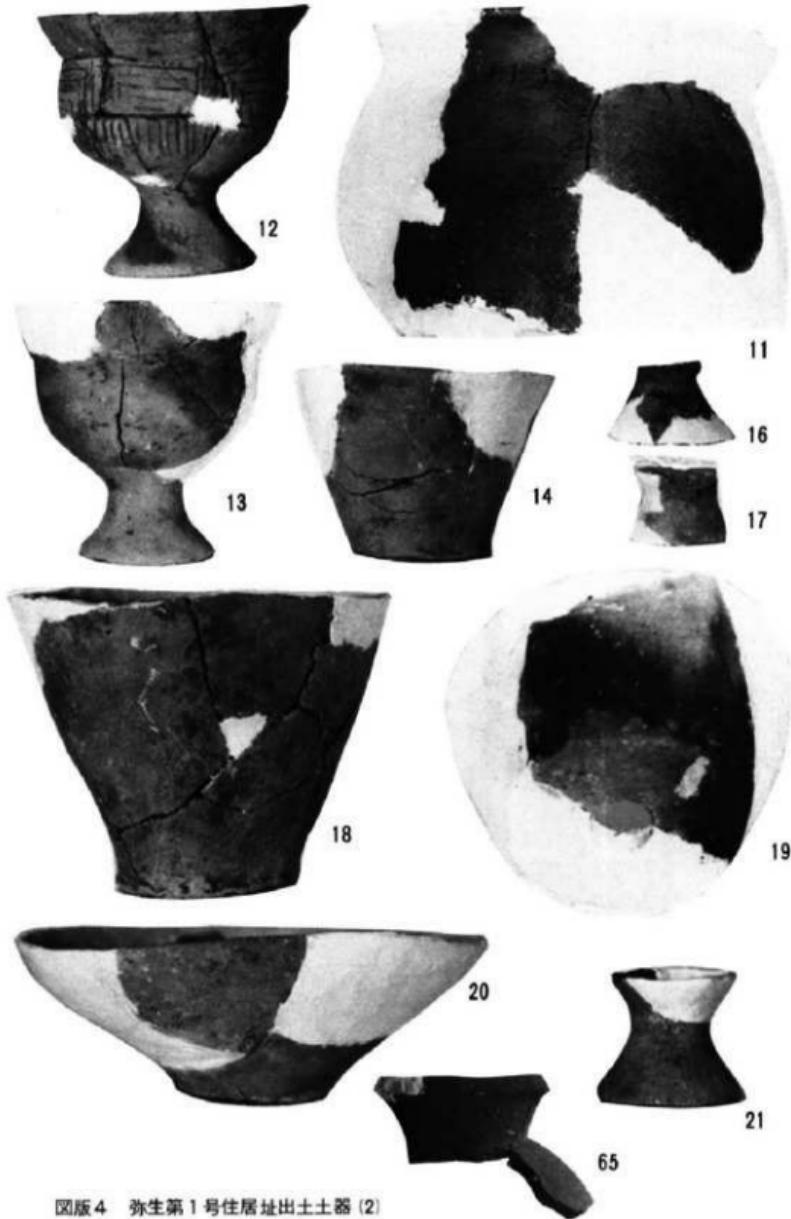
図版1 発掘地点全景 (上) 西より  
(下) 東より



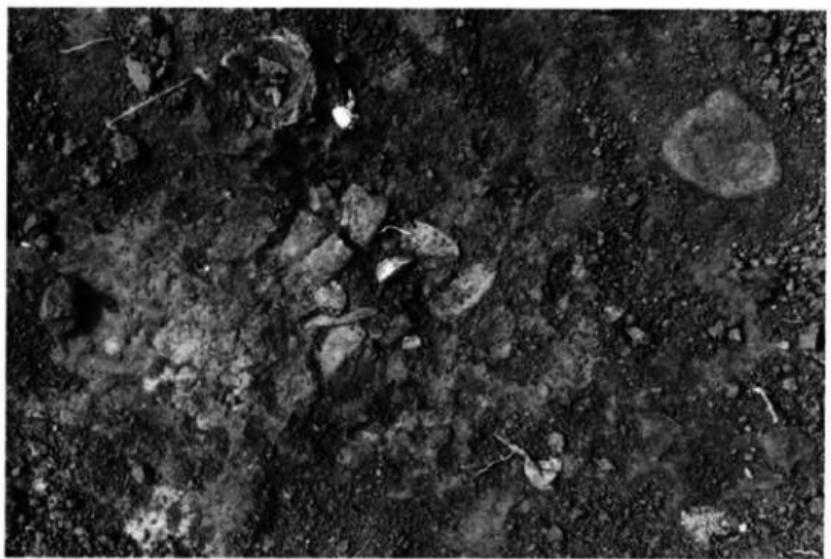
図版2 弥生式第1号住居址（上）  
同上 遺物出土状況（下）



图版3 弥生第1号住居址出土土器(1)



図版4 弥生第1号住居址出土土器(2)



図版5 弥生第1号住居址内石器出土状況 (1)(2)



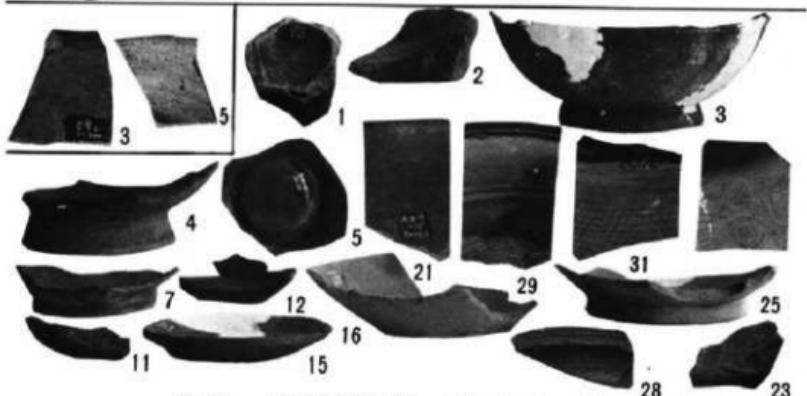
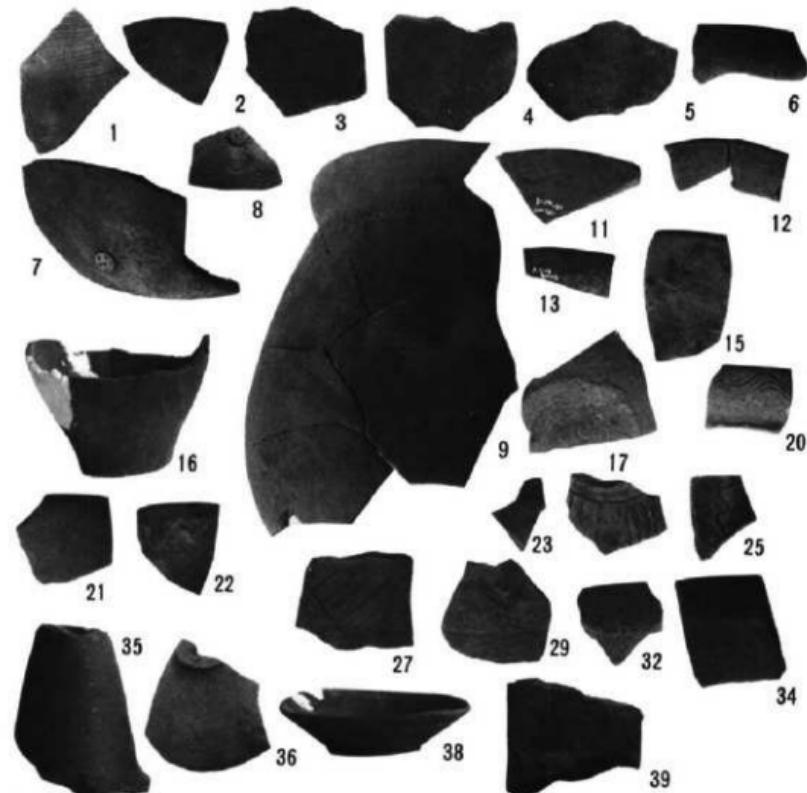
図版6 弥生第1号住居址内石器の出土状況 (3)(4)



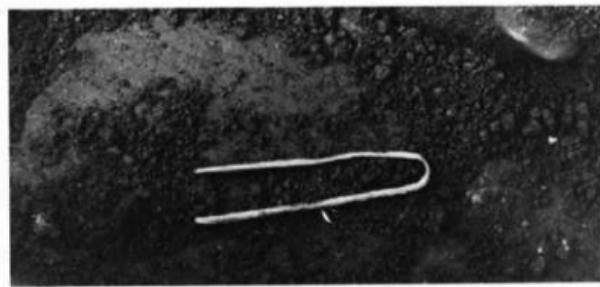
图版 7 弥生第 1 号住居址出土石器



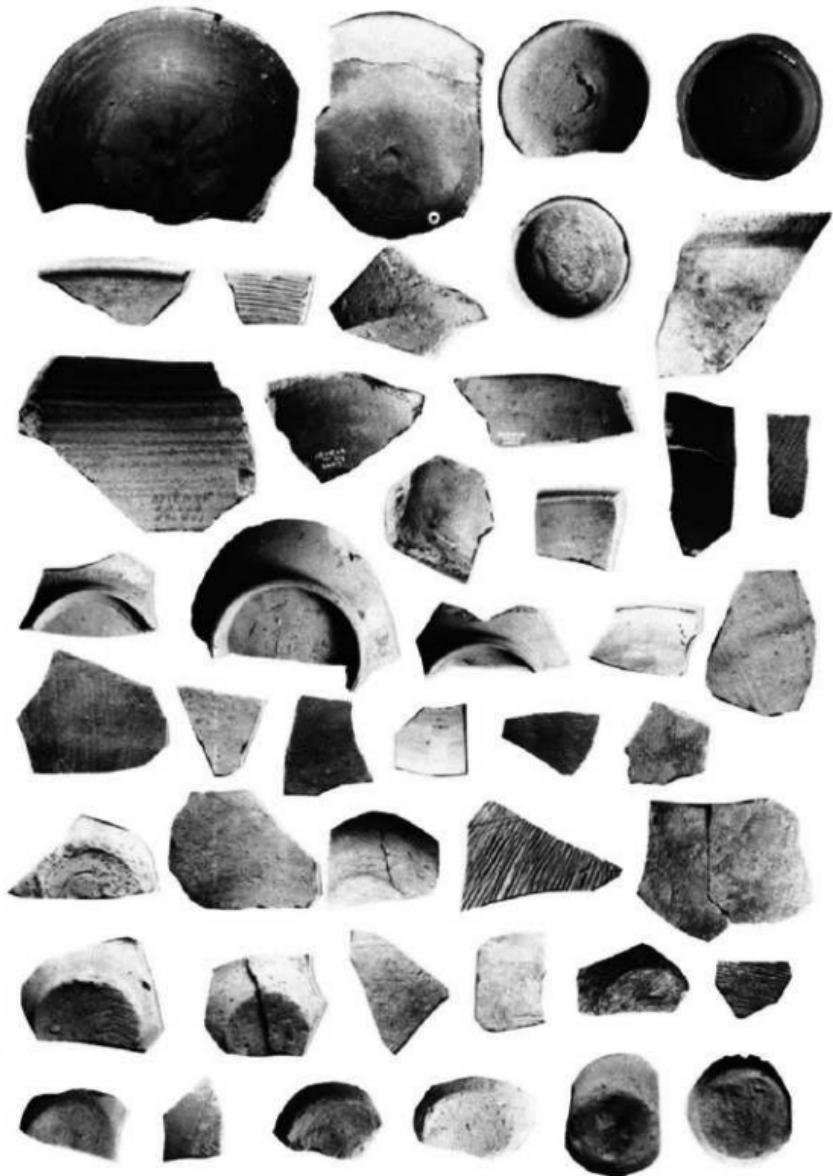
図版 8 弥生第2号住居址（上）  
イヌドクサの上にあった石（下）



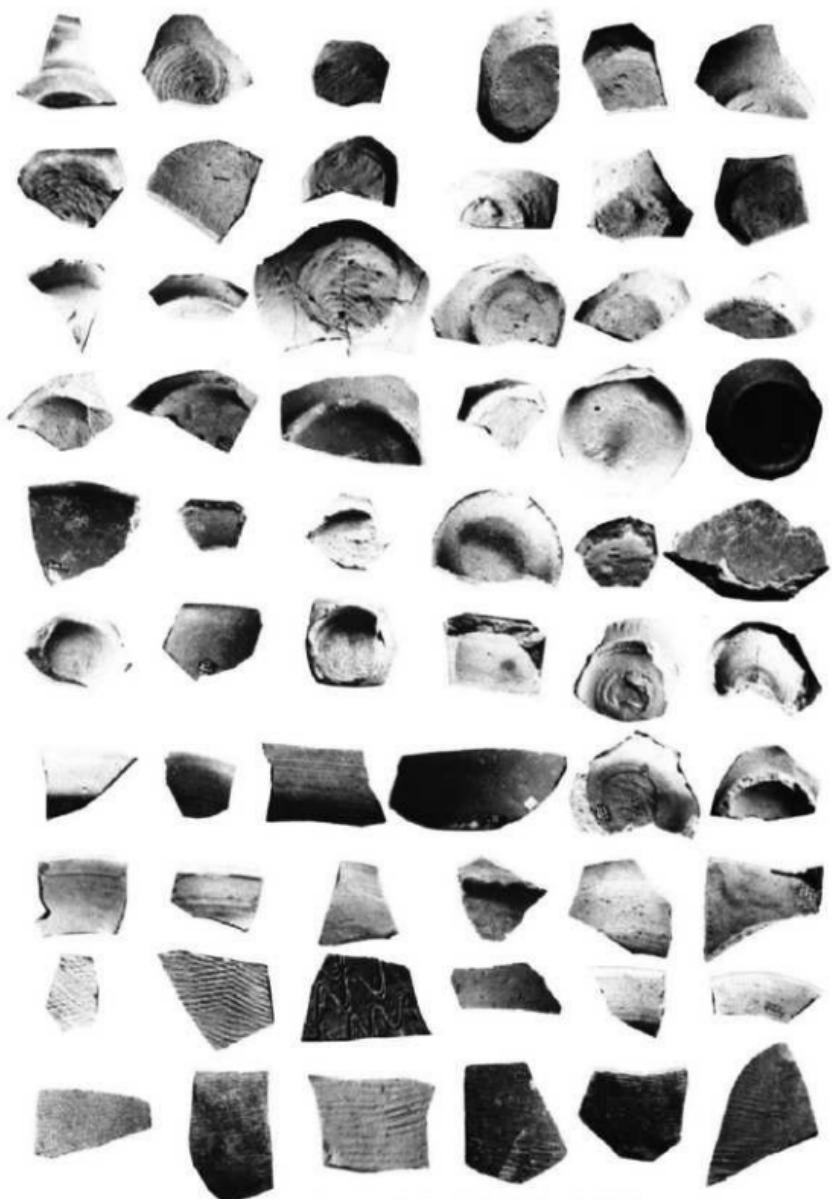
図版9 弥生第2号住居址、確敷、その他の地域  
よりの出土遺物



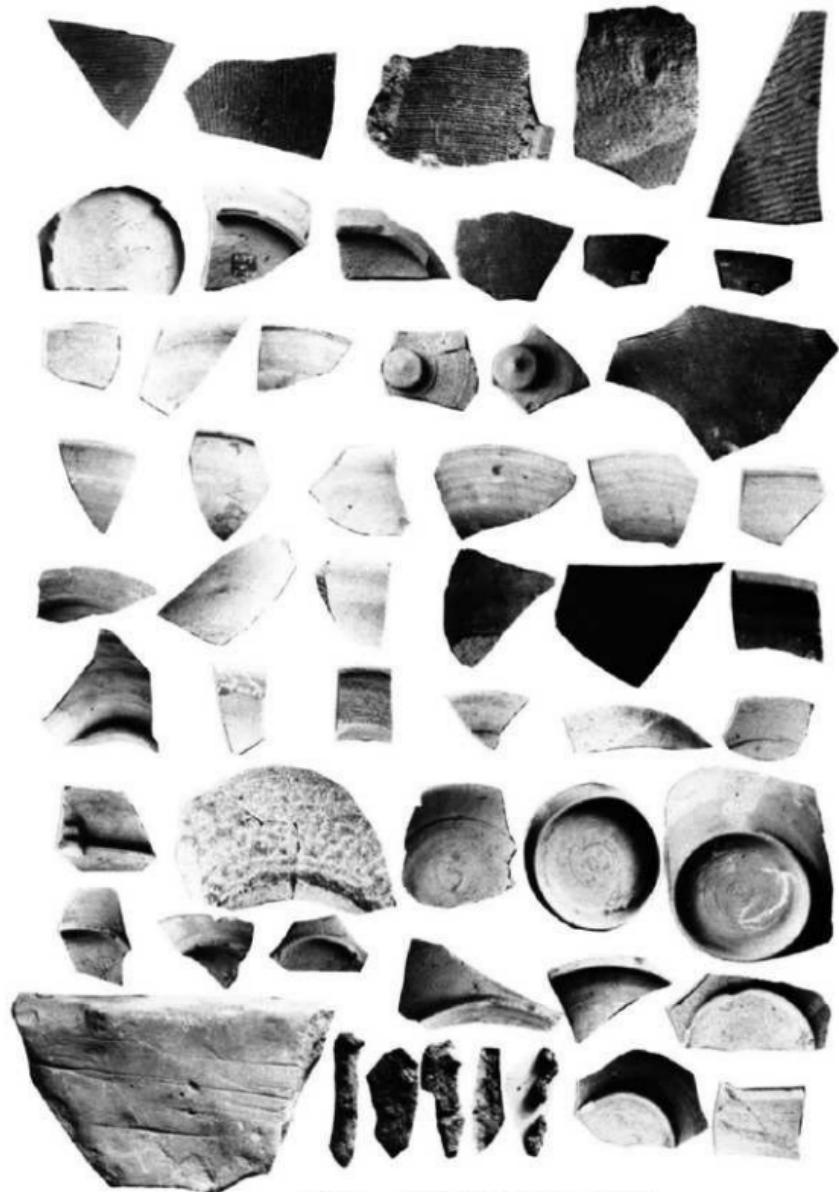
図版10 土師第1号住居址 (上)南西より (中)北より (下)銭子出土状況



图版11 土师第1号住居址出土土器(1)



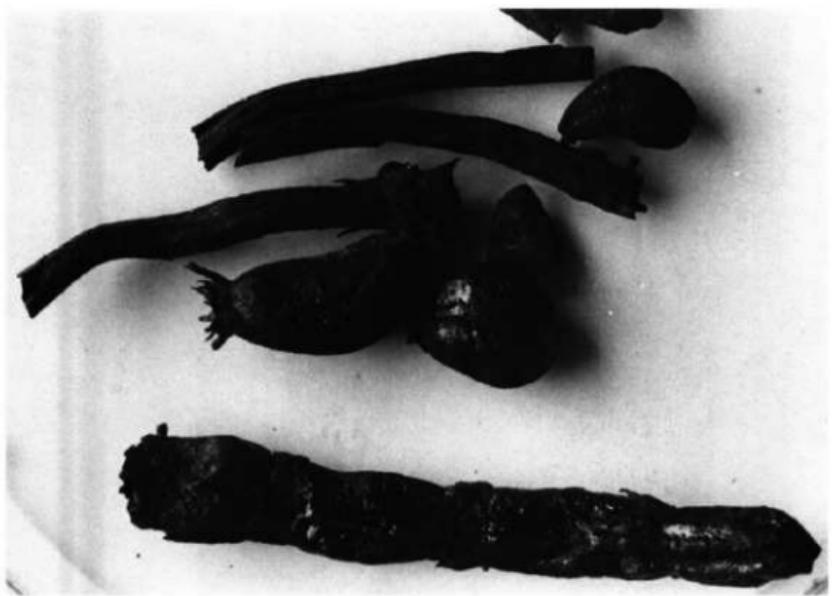
图版12 土师第1号住居址出土土器(2)



图版13 土师第1号住居址出土土器(3)

図版14 横濱遺構(南よし)





図版15 発芽したイヌドクサ（上）  
発掘時のイヌドクサ（下）

---

## あがた遺跡

松本市文化財調査報告No.19  
—長野県松本市あがた遺跡発掘調査報告書—

発行日 昭和56年3月31日

発行者 松本市教育委員会

長野県松本市丸の内3番7号

印刷所 電算印刷株式会社

松本市筑摩3270番地

---

